

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

— X VIII —

福岡県筑紫野市所在遺跡群の調査

1 9 7 7

福岡県教育委員会

九州縦貫自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—XVIII—

福岡県筑紫野市所在遺跡群の調査

1 9 7 7

福岡県教育委員会



唐人塚遺跡

序

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財の調査は、昭和44年度に始まり、昭和51年度には大牟田市から鞍手郡鞍手町までの全路線内の発掘調査を終了しました。

筑紫野市内の縦貫道関係の調査は、萩原遺跡、萩原古墳、扇祇古墳群、山の口遺跡、畑添1・2地点、八隈古墳群、八隈住居跡群、道場山遺跡、桶田山遺跡、塔ノ原遺跡、唐人塚遺跡、前田遺跡、剣塚遺跡の調査を実施し、縄文時代から、中世までの各時代にわたる貴重な遺跡が多数発見されました。

本報告書はこの筑紫野市内所在の遺跡群としては、第3冊目にあたり、昭和47年度に調査した前田遺跡と、昭和48年の夏から初秋にかけて調査を実施した唐人塚遺跡の調査報告書であります。なかでも唐人塚遺跡は、福岡教育大学教授波多野院三氏をはじめ福岡教育大学考古学研究班の学生の皆さんによって発掘調査をして頂きました。ここに心からの感謝を申し上げます。また発掘作業に従事して頂いた地元各位、整理作業にご尽力いただいた関係各位に対し、ここにお礼を申し上げます。調査終了から今日まですでに4年もの歳月が過ぎ去っておりまして、報告書の発刊が遅れましたが、この報告書を活用していただくことを願って序にかえます。

昭和52年11月1日

福岡教育委員会

教育長 浦山太郎

例 言

1. この報告書は、九州縦貫自動車道路建設予定地内の遺跡について行なった事前調査のうち、筑紫野市所在遺跡群で昭和47年度に調査を実施した前田遺跡と、昭和48年夏から初秋にかけて実施した唐人塚遺跡の調査報告書である。
2. 発掘調査は、日本道路公団の委託事業として、福岡県教育委員会が実施した。
3. 本書の執筆はつぎのとおりである。

I	川述昭人
II	川述昭人
III	1川述昭人
	2川述昭人・森田勉・平ノ内幸治
	3大澤正巳・川述昭人・森田 勉
IV	川述昭人・平ノ内幸治

4. 人骨の鑑定は九州大学医学部教授永井昌文氏と、同助手橋口達也氏（現福岡県教育庁文化課技師）の協力を頂いた。
5. 鉄器の分析は北九州郷土史研究会大澤正巳氏の御厚意によるものである。
6. 昭和47年度に行った九州縦貫自動車道関係の調査は、主として植田実主事と、西谷正・石山勲・酒井仁夫・川述昭人・森田勉の各技師があたり、昭和48年度は主として藤竜二主事と、石山勲・酒井仁夫・川述昭人・中間研志の各技師が担当した。
7. 遺物の実測は岡島英世・川述昭人が行い、製図は芦塚照子が担当した。
なお、写真撮影は唐人塚遺跡の遺構は川述昭人が、前田遺跡の遺構は西谷正が、遺物は林志郎と前田次郎が、それに九州歴史資料館技師石丸洋が担当した。
8. 本書の編集は川述昭人が担当した。

目 次

	頁
I はしがき.....	1
II 筑紫野市所在遺跡群の位置と環境.....	5
III 唐人塚遺跡の調査.....	9
1. 調査の経過.....	9
2. 調査の内容.....	14
(1) 土壌群の調査.....	16
(a) 弥生時代の貯蔵穴.....	16
(b) 古墳時代の土層.....	19
(c) その他の土層.....	19
(2) 墓地群の調査.....	21
A. 古墳時代の墓地.....	21
(a) 土槨墓.....	21
(b) 石蓋土槨墓.....	29
(c) 木棺墓.....	35
(d) 箱式石棺墓.....	37
(e) その他の遺構と遺物.....	43
(f) 横穴式石室.....	49
B. 中・近世の墓地.....	94
(a) 墓塔.....	94
(b) 土槨墓.....	95
3. 結語.....	99
IV 前田遺跡の調査.....	113
1. 調査の経過.....	113
2. 調査の内容.....	115
3. 結語.....	121

図 版 目 次

唐 人 塚 遺 跡

本文対照頁

P.L. 1	(1) 唐人塚遺跡遠景(北西から).....	14・15
	(2) 唐人塚遺跡遠景(西から).....	14・15
2	唐人塚遺跡全景(南から).....	14・15
3	唐人塚遺跡遠景(北から).....	14・15
4	(1) 唐人塚遺跡近景(東から).....	14・15
	(2) 唐人塚遺跡近景(南から).....	14・15
5	(1) 唐人塚2号墳遺構出土状態.....	14・15
	(2) 唐人塚2号墳地山整形面近景.....	14・15
6	(1) 第1号貯蔵穴.....	16
	(2) 第1号土壇.....	19
7	唐人塚遺跡出土石器類.....	17・18
8	(1) 1-4号土壇墓.....	21
	(2) 1-5号土壇墓.....	22
9	(1) 2-8号土壇墓.....	24
	(2) 2-12号土壇墓.....	26
10	(1) 3-1号土壇墓(北東から).....	26
	(2) 3-1号土壇墓(南東から).....	26
11	(1) 2-10号土壇墓.....	25
	(2) 3-3号土壇墓.....	28
12	(1) 2-9号土壇墓.....	25
	(2) 8-1号土壇墓.....	29
13	(1) 1-11号石蓋土壇墓.....	29
	(2) 1-12号石蓋土壇墓.....	30
14	(1) 2-7号石蓋土壇墓.....	34
	(2) 1-11・1-12号石蓋土壇墓.....	29・30
15	(1) 2-2号石蓋土壇墓と土層断面.....	30
	(2) 2-2号石蓋土壇墓.....	30
16	(1) 2-4号石蓋土壇墓検出状態.....	31

P L. 16	(2)	2-4号石室土壌墓	被覆粘土除去後の状態	31
17	(1)	2-4号石室土壌墓	石室を取り除いた状態	31
	(2)	2-4号石室土壌墓	粘土枕と遺物出土状態	31
18	(1)	5-1号石室土壌墓		34
	(2)	5-1号石室土壌墓	石室を取り除いた状態	34
19	(1)	2-4号石室土壌墓	棺外副葬土師器葬出土状態	32
	(2)	1-2号木棺墓内刀子出土状態		35
20	(1)	1-2号木棺墓		35
	(2)	1-3号木棺墓		36
21	(1)	3-1号木棺墓(東棺)・土壌墓(西棺)		36
	(2)	3-1号木棺墓内鉄斧出土状態		37
22	(1)	1-1号箱式石棺墓		38
	(2)	1-1号箱式石棺墓	石室を取り除いた状態	38
23	(1)	1-1号箱式石棺墓	石材を取り除いた状態	38
	(2)	1-1号箱式石棺墓全景		38
24	(1)	2-1号箱式石棺墓と土層断面(南壁)		38
	(2)	2-1号箱式石棺墓と土層断面(東壁)		38
25	(1)	2-1号箱式石棺墓と配石道構出土状態		43
	(2)	2-1号箱式石棺墓		38
26	(1)	2-1号箱式石棺墓	人骨出土状態	38
	(2)	2-1号箱式石棺墓	人骨と小玉出土状態	38
27	(1)	2-1号箱式石棺墓	石室被覆粘土中の施出土状態	39
	(2)	2-1号箱式石棺墓	小玉着装状態	38
28	(1)	2-1号箱式石棺墓	棺材と粘土使用状態	38
	(2)	2-1号箱式石棺墓	石棺構築状態	38
29	(1)	2-6号箱式石棺墓		42
	(2)	2-3号箱式石棺墓		41
30	(1)	2-5号箱式石棺墓		41
	(2)	2-5号箱式石棺墓内鉄鏃出土状態		41
31	(1)	2-3号箱式石棺墓	石材抜き跡の状態	41
	(2)	3-2号箱式石棺墓		42
32		唐人塚遺跡出土遺物	鉄器類	22~47
33		唐人塚遺跡出土遺物	鉄器類	22~47
34		唐人塚遺跡出土遺物	玉類・鉄器・土師器	22~47
35	(1)	1号墳調査前全景(北から)		49

P L.	35	(2)	1号墳墳丘と石室全景(北西から)	49
	36	(1)	1号墳石室近景	49
		(2)	1号墳石室全景	49
	37	(1)	3号墳墳丘と石室全景(南東から)	53
		(2)	3号墳石室近景(南東から)	53
	38	(1)	3号墳石室と墓壇近景	53
		(2)	3号墳出土遺物 須恵器	53
	39	(1)	4号墳全景(西から)	58
		(2)	4号墳周溝と石室(南から)	58
	40	(1)	4号墳石室全景(南から)	58
		(2)	4号墳石室近景(北から)	58
	41	(1)	4号墳石室近景(墓道から)	58
		(2)	4号墳周溝土層断面	58
	42		4号墳出土遺物	59~61
	43		4号墳出土遺物 須恵器 その1	61
	44		4号墳出土遺物 須恵器 その2	63
	45		4号墳出土遺物 須恵器 その3	63~70
	46		4号墳出土遺物 須恵器 その4	70・71
	47		4号墳出土遺物 須恵器 その5	71~73
	48		4号墳出土遺物 須恵器・土師器	75~77
	49	(1)	5号墳全景(西から)	79
		(2)	5号墳全景(北西から)	79
	50	(1)	5号墳周溝と石室(南から)	79
		(2)	5号墳周溝近景(東南から)	79
	51	(1)	5号墳右側壁竪込めの状態	79
		(2)	5号墳周溝土層断面(北から)	79
	52	(1)	5号墳石室全景(南から)	79
		(2)	5号墳石室近景(墓道から)	79
	53	(1)	5号墳石室近景(墓道から)	79
		(2)	5号墳石室奥壁(南から)	79
	54	(1)	5号墳石室近景(北から)	79
		(2)	5号墳墓道中遺物出土状態	80
	55	(1)	5号墳出土遺物 耳環・勾玉・管玉・小玉	81
		(2)	5号墳出土遺物 鉄鏃・短刀	80
	56		5号墳出土遺物 須恵器	82~84

P.L. 57	5号墳出土遺物 須恵器・土師器	84・85
58	(1) 6号墳石室近景(南から)	87
	(2) 6号墳石室奥壁(南から)	87
59	6号墳出土遺物	89~91
60	(1) 7号墳石室全景(南西から)	92
	(2) 7号墳石室全景(北東から)	92
61	(1) 1号近世土槨墓	95
	(2) 1号近世土槨墓 土師器・鉄貨出土状態	96
62	(1) 2号近世土槨墓	96
	(2) 3号近世土槨墓	97
63	(1) 3号近世土槨墓人骨出土状態	97
	(2) 3号近世土槨墓出土遺物 数珠玉	97
64	近世土槨墓出土遺物 陶器・鉄貨	96・97
65	(1) 墓棺墓	94
	(2) 墓棺墓横と断面	94
前田遺跡		
66	(1) 前田遺跡発掘前遠景	113
	(2) 前田遺跡全景	115

挿 図 目 次

		頁
Fig. 1	九州縦貫道と唐人塚・前田遺跡の位置 (縮尺1/550,000) 芦塚照子製図	2
2	筑紫野市周辺遺跡の位置 (縮尺1/25,000) 川述昭人作製	4
3	唐人塚・前田遺跡周辺地形図 (縮尺1/2,000原図道路公団作製) 芦塚製図	8・9
唐 人 塚 遺 跡		
4	唐人塚遺跡地形測量図 (縮尺1/300) 川述昭・川述公紀・光枝房敏実測、芦塚製図	14
5	唐人塚遺跡遺構配置図 (縮尺1/300) 川述昭・川述公・光枝実測、芦塚製図	15
6	唐人塚遺跡丘陵頂部周辺遺構配置図 (縮尺1/100) 川述昭・川述公・進博次・古賀茂雄・直江千秋・村上千鶴実測、芦塚製図	16~17
7	第1号貯蔵穴実測図 (縮尺1/40) 川述公・進・荒石正・古賀実測、芦塚製図	16
8	唐人塚遺跡出土石器実測図 (縮尺2/3) 平ノ内幸治実測、製図	18
9	1-6号土壇実測図 (縮尺1/30) 佐土原逸男・村上実測、芦塚製図	19
10	1-8号土壇実測図 (縮尺1/30) 佐土原・村上実測、芦塚製図	19
11	第1号竪穴遺構実測図 (縮尺1/40) 瀬戸隆・与那嶺実測、芦塚製図	20
12	2号墳境丘土層断面図 (縮尺1/80) 鹿島英世・進・上野正治実測、芦塚製図	20~21
13	1-4号土壇実測図 (縮尺1/30) 佐土原・瀬戸・村上実測、芦塚製図	21
14	1-4号土壇墓出土玉実測図 (実大) 川述昭実測、芦塚製図	22
15	1-5号土壇墓実測図 (縮尺1/30) 川述公実測、芦塚製図	22
16	1-5号土壇墓出土鉄斧実測図 (縮尺1/2) 川述昭実測、製図	22
17	1-7号土壇墓実測図 (縮尺1/30) 鹿島・与那嶺実測、芦塚製図	23
18	1-9号・1-14号土壇墓実測図 (縮尺1/30) 筒井龟実測、芦塚製図	23
19	1-10号土壇墓実測図 (縮尺1/30) 牛島昭則実測、芦塚製図	24
20	2-8号土壇墓実測図 (縮尺1/30) 鹿島・富士崎秀子実測、芦塚製図	24
21	2-9号土壇墓実測図 (縮尺1/30) 鹿島・富士崎実測、芦塚製図	25
22	2-10号土壇墓実測図 (縮尺1/30) 鹿島・富士崎実測、芦塚製図	25
23	2-11号土壇墓実測図 (縮尺1/30) 直江実測、芦塚製図	26
24	2-12号土壇墓実測図 (縮尺1/30) 川述昭・川述公実測、芦塚製図	26
25	3-1号東木棺墓、西土壇墓実測図 (縮尺1/30) 川述昭・浦山博子実測、芦塚製図	27
26	3-1号西土壇墓実測図 (縮尺1/30) 川述昭実測、芦塚製図	27
27	3-1号西土壇墓出土玉類実測図 (実大) 川述昭実測、芦塚製図	28
28	3-3号土壇墓実測図 (縮尺1/30) 浦山・西依美穂子実測、芦塚製図	28

Fig. 29	8-1号土槨墓実測図(縮尺1/30)鹿島・富士崎実測、芦塚製図	29
30	1-11号石蓋土槨墓実測図(縮尺1/30)川述公実測、芦塚製図	29
31	1-12号石蓋土槨墓、1-13号土槨墓実測図(縮尺1/30)筒井実測、芦塚製図	30
32	2-2号石蓋土槨墓実測図(縮尺1/30)光枝・鹿島実測、芦塚製図	31
33	2-4号石蓋土槨墓実測図(縮尺1/30)橋口速也・光枝実測、芦塚製図	32
34	2-4号石蓋土槨墓出土刀子実測図(縮尺1/2)川述昭実測・製図	34
35	2-4号石蓋土槨墓出土土師器実測図(縮尺1/3)川述昭実測、芦塚製図	33
36	2-7号石蓋土槨墓実測図(縮尺1/30)鹿島・富士崎実測、芦塚製図	33
37	5-1号石蓋土槨墓実測図(縮尺1/30)波多野晩三・川述昭実測、芦塚製図	34
38	5-1号石蓋土槨墓出土刀子実測図(縮尺1/2)川述昭実測・製図	35
39	1-2号木槨墓実測図(縮尺1/30)佐土原・進実測、芦塚製図	35
40	1-2号木槨墓出土刀子実測図(縮尺1/2)川述昭実測・製図	35
41	1-3号木槨墓実測図(縮尺1/30)川述公・進・岸本実喜子・佐土原実測、芦塚製図	36
42	1-3号木槨墓出土玉類実測図(実大)川述昭実測、芦塚製図	36
43	3-1号東木槨墓実測図(縮尺1/30)浦山実測、芦塚製図	37
44	3-1号東木槨墓出土鉄器実測図(縮尺1/2)川述昭実測・製図	37
45	1-1号箱式石槨墓実測図(縮尺1/30)宮小路賀宏・鹿島・富士崎実測、芦塚製図	36~37
46	1-1号箱式石槨墓出土鍔実測図(縮尺1/2)川述昭実測・製図	38
47	2-1号箱式石槨墓実測図(縮尺1/30)橋口・光枝・鹿島・筒井実測、芦塚製図	38~39
48	2-1号箱式石槨墓出土杖筥実測図(縮尺1/2)橋口・光枝・鹿島実測、芦塚製図	38
49	2-1号箱式石槨墓出土鍔実測図(縮尺1/2)川述昭実測・製図	39
50	2-1号箱式石槨墓出土玉実測図(実大)川述昭実測、芦塚製図	39
51	2-3号箱式石槨墓実測図(縮尺1/30)光枝・筒井実測、芦塚製図	40
52	2-5号箱式石槨墓実測図(縮尺1/30)鹿島・与那嶺実測、芦塚製図	41
53	2-5号箱式石槨墓出土鉄鍔実測図(縮尺1/2)川述昭実測・製図	41
54	2-6号箱式石槨墓実測図(縮尺1/30)鹿島・富士崎実測、芦塚製図	42
55	3-2号箱式石槨墓実測図(縮尺1/30)浦山・西依実測、芦塚製図	43
56	2号墳配石遺構実測図(縮尺1/30)光枝・瀬戸実測、芦塚製図	44
57	2号墳配石遺構出土玉実測図(実大)川述昭実測、芦塚製図	45
58	2号墳配石遺構出土鉄器実測図(縮尺1/2)川述昭実測・製図	45
59	1号墳墳丘中出土鉄斧実測図(縮尺1/2)川述昭実測・製図	46
60	2号墳採集土師器実測図(縮尺1/3)川述昭実測、芦塚製図	46
61	2号墳採集刀子実測図(縮尺1/2)川述昭実測・製図	46
62	性格不明遺構出土鉄器実測図(縮尺1/2)川述昭実測・製図	47
63	1号墳墳丘土層断面図(縮尺1/2)光枝・筒井・上野実測、芦塚製図	48~49

Fig. 64	1号墳石室実測図 (縮尺1/40) 川述昭・光枝・筒井・鹿島実測、芦塚製図	50~51
65	1号墳出土須恵器・土師器実測図 (縮尺1/3) 川述昭・鹿島実測、芦塚製図	51
66	3号墳墳丘土層断面図 (縮尺1/60) 筒井・進・佐土原実測、芦塚製図	52~53
67	3号墳石室実測図 (縮尺1/40) 筒井・岸本実測、芦塚製図	52
68	3号墳出土須恵器実測図 その1 (縮尺1/3) 川述昭・鹿島実測、芦塚製図	54
69	3号墳出土須恵器実測図 その2 (縮尺1/4) 川述昭実測、芦塚製図	55
70	3号墳出土須恵器実測図 その3 (縮尺1/4) 川述昭実測、芦塚製図	56
71	4号墳石室と周溝実測図 (縮尺1/100) 川述昭・古賀・牛島・荒石実測、芦塚製図	58~59
72	4号墳周溝土層断面図 (縮尺1/60) 上野実測、芦塚製図	58
73	4号墳石室実測図 (縮尺1/40) 進・直江実測、芦塚製図	58~59
74	4号墳出土耳環・鉄器実測図 (縮尺1/2) 川述昭実測・製図	60
75	4号墳出土須恵器実測図 その1 (縮尺1/3) 鹿島実測、芦塚製図	62
76	4号墳出土須恵器実測図 その2 (縮尺1/3) 鹿島実測、芦塚製図	64
77	4号墳出土須恵器実測図 その3 (縮尺1/3) 鹿島実測、芦塚製図	66
78	4号墳出土須恵器実測図 その4 (縮尺1/3) 鹿島実測、芦塚製図	68
79	4号墳出土須恵器実測図 その5 (縮尺1/3) 鹿島実測、芦塚製図	69
80	4号墳出土須恵器実測図 その6 (縮尺1/3) 川述昭・鹿島実測、芦塚製図	72
81	4号墳出土須恵器実測図 その7 (縮尺1/4) 川述昭実測、芦塚製図	73
82	4号墳出土須恵器実測図 その8 (縮尺1/6) 川述昭実測、芦塚製図	74
83	4号墳出土須恵器実測図 その9 (縮尺1/6) 川述昭実測、芦塚製図	75
84	4号墳出土土師器実測図 (縮尺1/3) 鹿島実測、芦塚製図	77
85	5号墳石室と周溝実測図 (縮尺1/100) 川述昭・古賀・荒石実測、芦塚製図	78~79
86	5号墳墳丘土層断面図 (縮尺1/60) 川述昭・川述公・大石宮・松村一良・三好正文・進・上野実測、宮原真裕実・芦塚製図	80~81
87	5号墳石室実測図 (縮尺1/40) 筒井・岸本・西依実測、芦塚製図	80~81
88	5号墳出土耳環・勾玉・鉄器類実測図 (縮尺1/2) 川述昭実測・製図	81
89	5号墳出土玉類実測図 (実大) 川述昭実測、芦塚製図	81
90	5号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/3) 鹿島・川述昭実測、芦塚製図	83
91	5号墳出土須恵器・土師器実測図 (縮尺1/3) 鹿島実測、芦塚製図	84
92	5号墳出土須恵器実測図 (縮尺1/6) 川述昭実測、芦塚製図	86
93	6号墳墳丘土層断面図 (縮尺1/60) 三好・松村・斉藤・立木実測、芦塚製図	88
94	6号墳石室実測図 (縮尺1/40) 晃治・筒井・与那嶺実測、芦塚製図	88~89
95	6号墳出土耳環・鉄器類実測図 (縮尺1/2) 川述昭実測・製図	89
96	6号墳出土玉類実測図 (実大) 川述昭実測、芦塚製図	89
97	6号墳出土須恵器・土師器実測図 (縮尺1/3) 鹿島実測、芦塚製図	90

Fig. 98	7号墳石室実測図(縮尺1/30) 瀬戸・筒井・岸本実測、芦塚製図	92
99	7号墳周辺表探須恵器実測図(縮尺1/3) 鹿島実測、芦塚製図	93
100	唐人塚道跡甕棺実測図(縮尺1/10) 佐土原・西依実測、芦塚製図	94
101	唐人塚道跡出土甕実測図(縮尺1/3) 鹿島実測、芦塚製図	95
102	近世墓1号棺実測図(縮尺1/30) 川述昭・川述公実測、芦塚製図	96
103	近世墓2号棺実測図(縮尺1/30) 川述昭・川述公実測、芦塚製図	96
104	近世墓2号棺出土土師器・陶器実測図(縮尺1/3) 森田勉実測・製図	97
105	近世墓3号棺実測図(縮尺1/30) 筒井・瀬戸実測、芦塚製図	97
106	近世墓3号棺出土銭貨拓影(実大) 岩瀬正信手拓	98
107	近世墓4号棺実測図(縮尺1/30) 川述昭実測、芦塚製図	98
前 田 遺 跡		
108	土層断面図(縮尺1/100) 菊池法信実測、芦塚製図	112~113
109	遺構配置図(縮尺1/100) 西谷正・瀬戸・山崎謙・菊池実測、芦塚製図	114~115
110	土壇実測図(縮尺1/60) 瀬戸・山崎実測、芦塚製図	115
111	石器実測図(縮尺2/3) 平ノ内実測・製図	118
112	鉄器実測図(縮尺1/2) 川述昭実測・製図	118
113	土器実測図(縮尺1/3) 川述昭実測、芦塚製図	119

表 目 次

		頁
Tab. 1	2-1号箱式石槨出土小玉針測表 川述昭作成	40
	2号墳配石遺構出土小玉針測表 川述昭作成	45
	古墳時代土槨墓・石室土槨墓・木槨墓・箱式石槨墓一覽表 川述昭作成	48
	4 鉄器の分光分析結果 大澤正巳作成	108~109

I はしがき

九州縦貫自動車道建設に伴う発掘調査は昭和44年度に始まり、昭和51年度には大牟田市から、鞍手郡鞍手町までの全路線内の発掘調査を終了しました。

昭和47年度は久留米市1カ所、瀬高町3カ所、小郡市4カ所、筑紫野市2カ所、太宰府町5カ所、大野城市19カ所、粕屋郡7カ所の調査が行なわれました。

昭和48年度は筑紫野市7カ所、粕屋郡2カ所の調査を実施しております。

遺跡の調査関係者はつぎのとおりです。

なお、遺物整理には文化課嘱託の岩瀬正信氏のご尽力によるものです。

総 括

教 育 長	森 田 実	教 育 次 長	西 村 太 郎
文 化 課 長	森 英 雄	文化課課長補佐	菅 隆
文化課課長補佐	今 井 岩 雄	文化課課長技術補佐	藤 井 功
調 査 係 長	松 岡 史	技 術 主 査	鶴 久 剛 郎

庶 務 会 計

文化課庶務係長 (前任)	飯 野 博	文化課庶務係長	前 田 栄 一
文化課庶務主査 (前任)	小 川 浩一郎	文化課庶務主査	師 岡 満
文化課庶務主査	瀧 竜 二	文化課庶務主査	山 本 文 和
嘱 託	因 将 太		

発 掘 調 査 員

福岡教育大学教授	渡多野 皖 三	文化課技術主査	西 谷 正
文化課技師	川 述 昭 人		

発掘調査補助員

川 述 公 紀	瀬 戸 隆	菊 池 法 信	佐 土 原 逸 男
福岡教育大学学生	東京教育大学学生		

日本道路公団福岡建設局

局 長	吉 田 喜 一	次 長	塩 塚 富 司
総 務 部 長	中 川 了 一	技 術 一 課 長	森 原 秀
総 務 課 長	遠 藤 明 美	総務課長代理	石 川 雄 三

岡 橋 岡 工 事 事 務 所

所 (前任) 長	福 田 隆	所 長	山 本 隆 義
----------	-------	-----	---------

筑業野工事長	吉井 宏 幸	庶務課長	西田 建 治
工務課長	八尋 勇 次	所 員	小村 浩

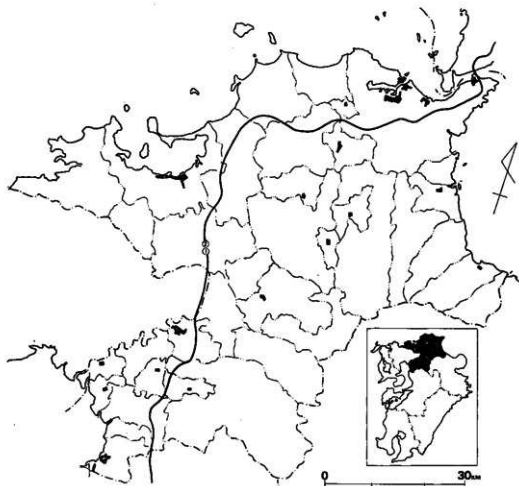


Fig. 1 九州縦貫道と唐人塚・前田遺跡の位置 (縮尺1/650,000)

① 唐人塚遺跡

② 前田遺跡

Ⅱ 筑紫野市所在遺跡群の位置と環境

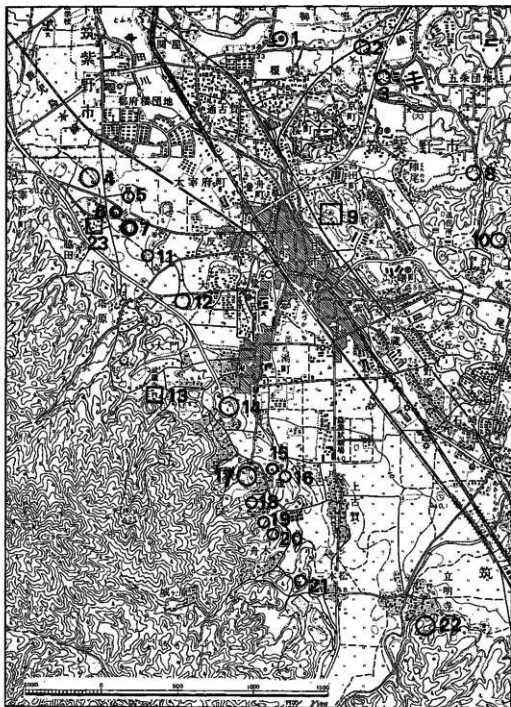


Fig. 2 筑紫野市周辺遺跡の位置 (縮尺1/25,000)

- | | | | | |
|-----------|-----------|----------|----------|----------|
| 1 鼓石遺跡 | 2 五條遺跡 | 3 若ヶ畑遺跡 | 4 剣塚遺跡 | 5 城安神社古墳 |
| 6 前田遺跡 | 7 唐人塚遺跡 | 8 池田遺跡 | 9 般若寺跡 | 10 吉ヶ浦遺跡 |
| 11 塔ノ原遺跡 | 12 桶田山遺跡 | 13 武蔵寺 | 14 道場山遺跡 | 15 原口遺跡 |
| 16 サギタ山遺跡 | 17 八原遺跡 | 18 畑添2地点 | 19 畑添1地点 | 20 山ノ口遺跡 |
| 21 轟抵古墳群 | 22 立明寺古墳群 | 23 杉塚廃寺 | | |

II 筑紫野市所在遺跡群の位置と環境

唐人塚遺跡、前田遺跡は筑紫野市大字杉塚に所在する。遺跡は背振山系の東北端で標高257mの天拝山の東側裾部に位置する。大宰府政庁の南西1.3kmである。この天拝山麓の東端には狭長な筑紫野平野があり、北東は福岡平野と、南東は朝倉郡・三井郡の平野部と接している。筑紫野の平野部東側は愛岳山、宮地嶽さらには砥上岳がせまっている。宝満川は米山にその起点を發し、吉木、阿志岐をへて平野部の中央を流れ、やがて有明海にそそぐ。この宝満川の支流は一つには山口川があり、これは基山に起点を發し、萩原、古賀、立明寺をへて、平野部の俗明院、永岡を走向し、宝満川に合流する。もう一つは冷水の谷水を集めて山家をへて、宝満川へ合流する。これは南行する河川であるが北行するものは、天拝山麓の谷水を集めた鷺田川が合流して御笠川となり、博多湾へ注ぐ。従ってこの地は御笠川と、宝満川の分水嶺でもあるわけである。

以下、周辺部に所在する遺跡を年代を追って見ていく事にする。

まず先縄文時代では山口川南側の立明寺丘陵から石器が発見されており、縦貫道建設予定地内の萩原遺跡から台形石器、尖頭器、ナイフ形石器等が採集された。また山口川を挟んだ対岸の野黒坂、峠山遺跡からも石器が発見されている。

縄文時代では萩原遺跡から石器と、晩期の土器が、また、塔ノ原遺跡では後期の遺物が発見されている。

弥生時代になると、遺跡はその数を急増する。生活遺構としての住居跡・貯蔵穴は、前期では、剣塚遺跡、野黒坂遺跡があり、中期では道場山B地点の円形住居跡と貯蔵穴群、野黒坂遺跡の住居跡と貯蔵穴群、桶田山遺跡の貯蔵穴群がある。後期では八咫遺跡、野黒坂遺跡があげられる。

墓地遺構としては、この時期には妻棺、土壘墓、木棺墓、箱式石棺墓が行なわれている。まず前期の遺跡としては剣塚遺跡、道場山B地点の妻棺墓・木棺墓・土壘墓があり、中期では永岡遺跡、吉ヶ浦遺跡、道場山A地点、八咫遺跡、畑添2地点、原口古墳墳丘下から妻棺が出土している。後期は道場山A地点の妻棺と箱式石棺、桶田山遺跡の箱式石棺(M1)があげられる。

古墳時代では古式古墳として剣塚の前方後円墳と方墳、葛蒲浦1号墳、原口古墳、そして唐人塚遺跡があげられる。

後期に入ると、横穴式石室を内部主体とする多数の古墳が営まれている。宝満川西岸では南から見てみると上原田古墳群、装飾古墳の五郎山古墳、萩原古墳群、立明寺上の山古墳群、扇

祇古墳群があり、豊田川西岸には八隈古墳群、原口古墳群、唐人塚遺跡、埴安古墳、剣塚がある。また宝満川東側では宮地嶽山麓と、標高200m程の鞍部にかけて多数の古墳群が所在している。生活遺構としては5世紀代に属するものに八隈1地点の住居跡があり、6世紀代～7世紀代にかけては、野黒坂遺跡と八隈1・2地点の遺跡があげられる。

奈良時代には大宰府政庁跡があり、政治の中枢部となった。白村江の戦の敗北後に大野城、水城が築られ、政治上、軍事上の両面で西の拠点となった。また国分寺をはじめとして、杉塚庵寺、塔ノ原庵寺、武蔵寺が所在する。

平安時代以降では剣塚、塔ノ原遺跡、桶田山遺跡で木棺墓、土壘墓が発見されている。

註 (1) 島田寅次郎「異例の古墳」『福岡県史蹟名勝天然記念物調査報告書第10輯』1935

Ⅲ 唐人塚遺跡の調査

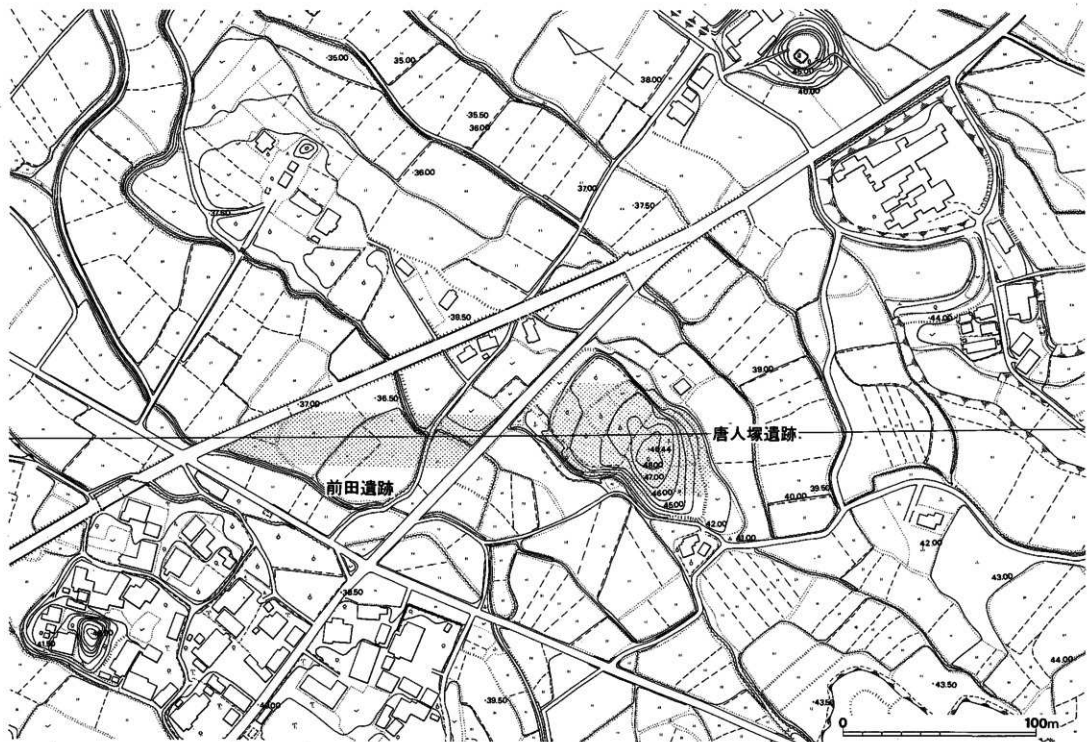


Fig. 3 唐人塚・前田遺跡周辺地形図 (縮尺 1/2000)

Ⅲ 唐人塚遺跡の調査

1 調査の経過

唐人塚遺跡の調査は、1973年（昭和48年）7月14日から10月8日まで実施した。

調査団は下記のとおりである。

調査担当者	福岡教育大学教授 (現旭光女学園教授) 福岡県教育庁文化課技師	波多野 晓 三 川 述 昭 人
調査補助員	川 述 公 紀 瀬 戸 隆	佐土原 逸 男
福岡教育大学学生	光 枝 房 敏 晃 治	大 石 官
	尾 崎 良 孝 進 博 次	鹿 島 英 世
	筒 井 亀 上 野 正 治	沢 田 康 夫
	浦 山 博 子 原 真 知 子	与 那 横
	直 江 千 秋 富 士 崎 季 子	岸 本 真 喜 子
	横 山 栄 二 友 延 正 弘	加 治 俊 英 (卒業生)
	荒 石 正 古 賀 茂 雄	村 上 千 鶴
	西 依 美 穂 子 牛 島 昭 則	佐 野 哉 男
東京教育大学学生	松 村 一 良 三 好 正 文	立 木 修
	斎 藤 英 男	
庶務担当者	福岡県教育庁文化課主事	瀧 竜 二

なお、人骨の調査、鑑定は、九州大学医学部教授永井昌文氏と同助手（現福岡県教育庁管理部文化課技師）橋口達也氏にお願いした。日・際日には文化課技師官小路賀宏氏の応援をうけた。ここに記して感謝の意を表したい。

以下に、調査日誌によって経過をたどってみよう。

- 7月14日（土）晴 発掘調査を開始する。まず伏採作業を行う。
- 7月16日（月）晴 伏採作業を続行する。笹がびっしり繁っているので作業は困難。その上むし暑くてたまらない。
- 7月17日（火）晴 伏採作業と地形測量用の基準杭うちをする。
- 7月18日（水）晴一時雨 伏採作業と並行して地形測量を開始する。午後から1号墳の発掘に着手する。空掘りに沿って、幅2mのトレンチを入れる。
- 7月19日（木）晴 地形測量を続行する。1号墳は石室の一部と思われる石材を確認したため、トレンチを拡張して石室の全容を追求する。
- 7月20日（金）晴 地形測量を続行する。1号墳は石室の掘り方を検出する。墳丘の土層断面の調査のため、東・西・北トレンチを設定する。

- 7月21日(土) 晴 1号墳は東・西・北トレンチ掘りを行う。地形測量を続行する。
- 7月23日(月) 晴 地形測量図の補足を行う。2号墳は幅1mのトレンチを墳丘の中心に設定するが石材などは検出されない。西方に更に1m程拡張する。3号墳は幅1mのトレンチを設定する。午後からブルドーザーで斜面周辺部の表土削ぎ作業を行う。
- 7月24日(火) 晴 1号墳は東側と奥壁側の掘り方を追求する。北・西トレンチの土層観察では墳丘は旧地表上から構築されており、地山面では古墳築造前の土壌層が検出された。2号墳は横穴式石室は所在しない事が判明した。石室土壌か箱式石棺が3基検出される。東側を拡張して遺構の検出をはかる。ブルドーザーによる表土削ぎ作業を続行する。
- 7月25日(水) くもり 2号墳は遺構確認調査を続行する。1号墳の東側の平坦面を表土削ぎした結果、古墳の周溝と思われる幅3mで径は20m弱の溝と、主体部のプランを検出した。4号墳とする。
- 7月26日(木) くもり一時雨 1号墳は墳丘土層断面の部位わけを行う。2号墳は、検出遺構の清掃を行い写真撮影の予定であったが、午後から雨のため中止する。4号墳は周溝の一部を掘り始める。北側斜面からは片側だけ石材を用いた土壌層を検出した。
- 7月27日(金) 晴 1号墳は墳丘土層断面の実測を行う。2号墳は全景写真と個別写真を撮る。4号墳は周溝を掘る。北側斜面にトレンチを設定して遺構の確認調査を行う。
- 7月28日(土) 晴 周溝と主体部の調査を行う。4号墳に南接する5号墳に幅1mのトレンチを設定する。トレンチで石室土壌層が一基検出された。
- 7月29日(日) 晴 4号墳は周溝と主体部を調査する。5号墳はトレンチを延長する。
- 7月30日(月) くもり 4号墳は前日と同様に周溝と主体部の調査を行う。周溝内から須臾器が検出される。主体部は破壊が著しく、石材の残りは悪いようだ。5号墳の南、丘陵裾部に石材が1個露出していたので、それを基準にしてトレンチを設定した結果、石室である事が判明した。これを6号墳とする。
- 7月31日(火) くもり 4号墳は主体部内の埋土除去作業を行う。5号墳は周溝の検出にとりかかる。6号墳は石室のプランを追求する。
- 8月1日(水) 晴 2号墳は墳丘中央部周辺の土層断面図を作成する。4号墳は主体部の埋土除去作業と掘り方を追求する。床石を検出し始める。攪乱土中から耳環を3個検出する。5号墳は昨日と同様に周溝を掘る。6号墳は石室内の埋土除去作業を行う。
- 8月2日(木) 晴 2号墳は東側トレンチを拡張する。トレンチに遺構の落ち込みがみられる。4号墳は石室の残りは不良であり、掘り方を追求する。5号墳は周溝掘りと土層断面の部位をわける。周溝は二重に廻っている。6号墳は石室に平行と直角方向にトレンチを設定して墳丘土層断面を検討する。
- 8月3日(金) 晴 2号墳は南側にトレンチを拡張して遺構の検出をはかる。4号墳は石室と周溝の調査を行う。5号墳は外側の周溝を掘る。6号墳は土層断面図を作成する。
- 8月4日(土) 晴 2号墳は東半部の盛土を除去して遺構の検出をはかる。4号墳は周溝を掘りあげ、石室掘り方と床面の追求。5号墳は内側の周溝を追求する。内側の溝は土層断面の観察で墳丘築造時には盛土で覆われてしまうものと考えられた。なお外側の周溝は墳丘西半部のみ存在する。6号墳は石室内の埋土除去作業をほとんど終え、床面

- を追求める。
- 8月5日(日) 晴 2号墳は東半部の遺構検出作業を行う。南側裾部で土嚢を検出する。5号墳は南半部の盛土除去作業を行う。6号墳は床面を追求める。床には全面に敷石が施されている。
- 8月6日(月) 晴 2号墳は北半部の盛土を除去して遺構の検出をはかる。5号墳は東西トレンチの土層断面を作成する。6号墳は床面を清掃する。
- 8月7日(火) 晴 2号墳は北半部の裾部の地山を追い遺構の検出作業を行う。5号墳は昨日に続いて東西トレンチと北トレンチの土層断面図を作成する。石室のプランを追求める。6号墳は床面を清掃し、ガラス玉と耳環を検出する。トレンチの土層断面図作成。
- 8月8日(水) 晴 2号墳は遺構の検出作業を続行する。5号墳は石室の追求と土層断面図の作成を行う。6号墳は周辺部と床面の清掃を行う。
- 8月9日(木) 晴 丘陵南側の斜面に丘陵と平行にトレンチを設定して、遺構の有無を確認する。2号墳は地山面での遺構検出作業を続行する。5号墳は石室を追求める。6号墳は清掃を終了する。
- 8月10日(金) 晴 2号墳と3号墳間は周溝があり、黒色土中から須恵器が出土する。1号石棺近くの配石を実測後除去する。5号墳は墓道中の埋土を除去していく。墓道内から須恵器を検出する。6号墳は石室の写真撮影を行う。
- 8月11日(土) 晴 2号墳は1号棺西側の遺構実測と他の遺構の検出を行う。新たに蓋石を検出する。5号墳は墓道追求と墓道での遺物出土状況の写真撮影を行う。6号墳は石室実測のための割りつけを開始する。
- 8月12日(日) 晴 2-5号棺内の清掃を行い、鉄鎌を検出する。2-3号棺は箱式石棺であるが石材はほとんど残っていない。2・3号墳間の墳裾を地山面まで下げる。黒色土層から須恵器が出土する。5号墳は墓道の追求と石室内埋土を除去する。6号墳は割りつけを行う。
- 8月13日(月) 晴 前日と同様の作業を行う。
- 8月14日(火) 晴 2号墳は1号棺の写真撮影と他の遺構の清掃と遺構掘りを行う。2・3号墳間の周溝掘りと3号墳の盛土除去作業を行う。5号墳は墓道を追求める。航空写真をとる。
- 8月15日(水) くもり時々雨 6号墳の実測を開始する。他の作業は益のため休む。
- 8月16日(木) くもり 6号墳は実測続行。
- 8月17日(金) 晴 2号墳は1号棺の実測を開始する。3号墳は盛土除去作業を行う。4号墳は掘り方の埋土除去作業と墓道前面部の周溝掘り。5号墳は石室床面の検出作業。6号墳は実測を続行する。
- 8月18日(土) 晴 1号墳は清掃と写真撮影を行う。2号墳は1号棺の蓋石をあける。箱式石棺であり、人骨が遺存していた。蓋石のつき目に粘土を用いており、粘土中から鉈が検出された。人骨が遺存しているため九次の永井教授に連絡をとりおいでを願う。4・5号墳は前日と同様の作業を行う。6号墳は実測を終了する。
- 8月19日(日) くもり一時雨 1号墳は割りつけを開始する。2-2号棺の実測開始。3号墳は盛土除去作業を続行する。4号墳は掘り方内埋土除去作業と墓道前面の周溝を追求める。土器が多数検出される。5号墳は床面清掃と墓道の肩部の追求。
- 8月20日(月) 晴 1号墳実測開始。2-2号棺実測終了。3号棺にとりかかる。4号墳は主体部掘り方検出。5号墳は墓道を追求める。永井先生人骨の鑑定のため来訪される。1号棺

の人骨は熟年(30~40代)の女性である事が判明した。

- 8月21日(火) 晴 1号墳実測続行。2-3号墳清掃と他の遺構の検出作業を行う。4号墳は掘り方の全容をつかむ。5号墳は写真撮影のための清掃を行う。
- 8月22日(水) 晴のち雨 1号墳は石室実測終了後、ムンボで墳丘を除去して、古墳築造前の遺構を追う。2-1号墳の骨実測と、とりあげを樋口氏が行う。2-3号墳写真撮影後実測を開始する。5号墳は石蓋上のセクションベルトを除き、石蓋の調査を行う。
- 8月23日(木) 晴 2-3号墳の写真撮影と実測を行う。3号墳は遺構検出作業を行う。小形石棺蓋を1基検出する。
- 8月24日(金) くもり一時雨 2-4号墳の石蓋土壌の蓋を取り除き、主体部の清掃をする。1号墳は石材の掘り方の実測。3号墳は遺構検出作業を続行し、小形石棺の南に土壌墓を検出する。5号墳の石蓋土壌の掘り方は墳丘築造時に削平されており、不明である。4・5号墳間の土層断面図を作成する。
- 8月25日(土) くもり 2-4号墳は遺物出土状況の写真撮影後、実測を行い、人骨をとりあげる。2-3号墳実測。3号墳は土壌墓を掘りあげ、周辺部を清掃する。4号墳は墓道前面の周溝を追う。
- 8月26日(日) 晴 2号墳は各遺構の写真撮影、実測を行う。4号墳は墓道前面の周溝を追う。
- 8月27日(月) 雨のちくもり 1号墳は旧地表層を取り除き、地山面での遺構の確認作業を行う。4号墳は前日同様周溝掘り。
- 8月28日(火) 晴 1号墳は遺構検出作業を行う。4号墳は周溝掘りを実施する。5号墳は石室実測のための割りつけを開始する。
- 8月29日(水) 晴 1号墳は石棺1基と、西側斜面部で小形の横穴式石室を1基検出する。4号墳は周溝掘りを終る。4・5号墳間で土壌墓を3基検出し、1基を調査する。横臥屈葬の人骨が遺存している。
- 8月30日(木) くもり時々雨 1号墳は墳丘 $\frac{1}{4}$ にあたる東北部を地山面まで下げる。小形石室は7号墳と呼ぶ。脛石のみを残しており、高台付の須恵器が3個体出土した。4号墳は周溝の清掃を行う。
- 8月31日(金) 晴 1号墳は遺構検出作業を続行する。4号墳は全体清掃を行う。
- 9月1日(土) 雨 4号墳の清掃を続行する。
- 9月2日(日) 雨のちくもり 1号墳は盛土除去作業を行う。
- 9月3日(月) 雨のちくもり 午後から2号墳南裾の表土剥ぎ作業を行う。4号墳は石室内の排水作業を行う。
- 9月4日(火) くもり一時小雨 1号墳南 $\frac{1}{4}$ の遺構検出作業を行う。石蓋土壌墓1基を検出する。地形図にトレンチの位置を入れる。
- 9月5日(水) くもり 1号墳は遺構検出作業を続行する。南側斜面部の地山を追求する。
- 9月6日(木) くもり 1号墳は写真撮影のための清掃をしたあと、昨日の続きの作業を行う。4号墳は清掃をし、写真撮影を行う。4・5号墳間の土壌墓は室町時代ごろのものと思われる。3号墳より洪武通宝が出土する。
- 9月7日(金) 晴 2号墳は清掃作業を行う。西北斜面で土壌1、貯蔵穴状の整穴が1基検出される。
- 9月8日(土) くもり 2号墳は全景写真と、細部の写真を撮る。3号墳はセクションベルト西半部の表土剥ぎ作業を行い、横穴式石室の側壁と思われる石材を検出するが、盜掘を受けて残りは良くない。

- 9月9日(日) くもりのち雨 3号墳は奥壁と側壁を1部残すのみである。5号墳は西南半の周溝掘りを行う。
- 9月11日(火) 晴 5号墳周溝の土層断面図作成と周溝掘りを行う。
- 9月12日(水) くもり 1号墳の調査を進める。2号棺からは刀子が出土する。3号棺は木棺と思われる管玉1、小玉4が検出される。5号墳は周溝掘りを続行する。
- 9月13日(木) 雨 雨のため宿舎で遺物整理を行う。
- 9月14日(金) 晴 1号墳は遺構掘りを行う。近世墓は遺物出土状況の写真撮影を行う。5号墳は周溝掘りを行う。
- 9月15日(土) 晴 宮小路氏応援のため来訪し、1号墳1号棺の実測を行う。5号墳は周溝掘りを続行。
- 9月17日(月) くもり 1号墳1号棺の棺内埋土除去作業を行う。5号墳は石室土壌の写真撮影と蓋石の実測を行う。
- 9月18日(火) くもり 5号墳は石室掘り方を検出する。
- 9月19日(水) 晴 1号墳は遺構掘りを行う。3号墳は横穴式石室の階層後写真撮影を行う。
- 9月22日(土) 晴 1-1号棺の蓋石除去後の写真撮影。他の遺構掘りを行う。
- 9月24日(月) 晴 1-1号棺実測。1号墳下の遺構検出作業を行う。4号墳は実測のため割りつけを行う。
- 9月25日(火) 晴 1号墳は1-6、1-7、1-8号棺の主休部を掘る。遺構検出作業もあわせて行う。4号墳は実測を開始する。
- 9月26日(水) くもり 1-1号棺に伴うと思われる周溝を検出する。幅は20cm~30cmで深さは10cm程であり、東半のみ確認された。1-5号棺は土壌高であり、鉄斧を1個検出した。
- 9月27日(木) 晴 1-1号棺の周溝を追う。北側の遺構面を清掃して遺構の検出をはかる。4号墳は実測を続行する。5号墳中の石室土壌高を実測する。
- 9月28日(金) 晴 1-5号棺の実測を行う。4号墳は実測を続行し、5号墳は実測を開始する。
- 9月29日(土) 晴 1-2、1-3、1-4号棺実測。2-6号棺実測。4・5号墳実測続行。1-1号棺西側に60~70cm大の花崗岩の石があり、周辺を清掃すると長方形を呈する大形の土壌を検出する。
- 9月30日(日) くもりのち雨 前日と同様の作業を実施する。
- 10月1日(月) くもり 1-2、1-4号棺実測続行し、1-3号棺は終了する。2-6号棺実測終了。貯蔵穴状の土壌の土層断面図を作成する。4号墳裾部に位置する近世墓1、2、4号は実測を終了する。4・5号墳は実測を続行する。
- 10月2日(火) 晴 縮尺1/200で遺構配置図を作成する。1、2号墳中道槽の実測を手わけて行う。4・5号墳は実測を続行する。
- 10月3日(水) 晴 実測を続行する。4号墳は縮尺1/50で地山整形面の地形測量を行う。
- 10月4日(木) くもり一時雨 実測を続行する。5号墳は縮尺1/50で地山整形面の地形測量を行う。
- 10月5日(金) くもり 2号墳は縮尺1/50で地山面の地形測量と遺構配置図を作成する。3号墳は縮尺1/50で地山面の地形測量と遺構配置図を作成し終る。石室実測を開始する。4号墳は実測を終了する。
- 10月6日(土) 晴 1号、2号墳の地山面での地形測量と遺構配置図を作成し終る。
- 10月7日(日) くもり 実測を続行する。
- 10月8日(月) くもり 3-1号西棺から勾玉を検出する。近世墓の人骨をとりあげる。すべての実測を終了する。本日を以て調査を終了する。

2 調査の内容

唐人塚遺跡は標高48.5mで、北から南にのびる丘陵であり、東西方向は急斜面を呈するが本来は更にのびていた可能性が強い。南側は低い丘陵となり人家や道路で丘陵が切断されているため、一見すると独立丘陵の様に見える。

発掘調査着手時の伐採作業により、古墳と思われる高まりが3基あり、北から1、2、3号墳と呼ぶ事にした。調査が進むにつれ、墳丘を削平された古墳が、丘陵北側と、東側の斜面か

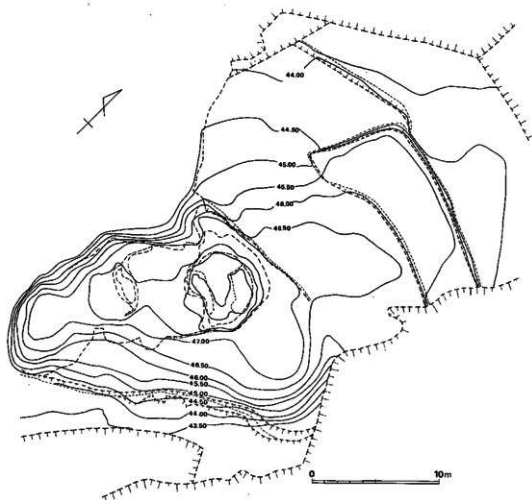


Fig. 4 唐人塚遺跡地形測量図 (縮尺1/300)

ら新たに3基検出され、しかも1号～3号墳の調査で、墳丘築造前の遺構が検出された。主な検出遺構は、土塚と墓地遺構とに分けられる。土塚は1基は袋状堅穴を呈しているため弥生時代の貯蔵穴と考えられるものと、古墳時代の土塚、それに性格不明の土塚がある。墓地遺構は、土塚墓・石蓋土塚墓・木棺墓・箱式石棺墓・横穴式石室を内部主体とする古墳、中世の要使用の墓、近世の土塚墓が発見された。1号～3号墳は、横穴式石室と他の墓地遺構が重複しており、しかもそれぞれの墳丘下から検出されたため、その番号は例えば1号墳1号棺のように古墳の番号を頭につけた。なお、2号墳は高まりがあるため2号としたが、横穴式石室を内部主体とはしないものであった。

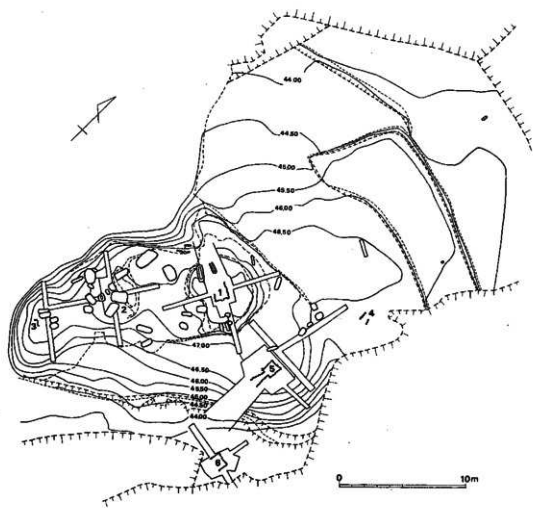


Fig. 5 唐人塚遺跡遺構配置図(縮尺1/300)

(1) 土壙群の調査

ここでいう土壙とは、墓地群の中にあっても墓地とは考えられないような不整形のものや、弥生時代の貯蔵穴と考えられそうなもの、性格不明の規模の大きな竪穴状遺構をさす。

(a) 弥生時代の貯蔵穴

第1号貯蔵穴 (Fig. 7, P L. 6)

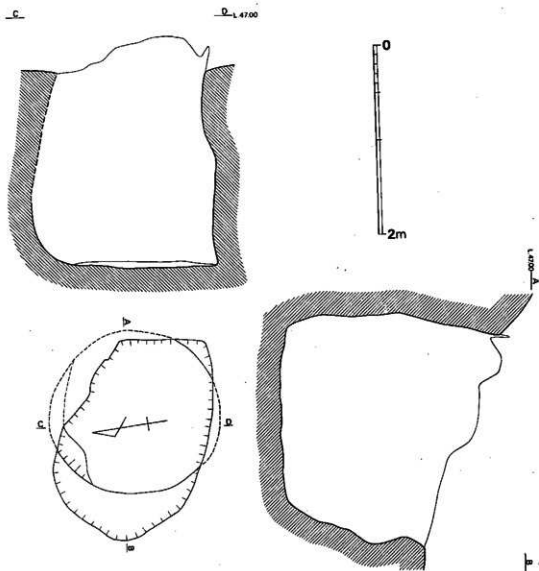


Fig. 7 第1号貯蔵穴実測図 (縮尺1/40)

上方部は崩壊により著しく旧状を変じているため、上端部の形状は定かでないが、底面は直径175cm～180cmの円形を呈する。底面はほぼ平坦であり、深さは230cmを測る。断面は本来は袋状を呈するものと考えられる。遺構内からは、サヌカイト製の石鏝が1本検出されただけである。

なお、周辺部の墳丘盛土中や、石室埋土中などから石器が若干出土しているので、ここで一括して取り上げておく。 (川述昭人)

石器 (Fig. 8, P. L. 7)

ナイフ形石器 1

サヌカイトの縦長剥片を素材とし、バルブをブランディングによってカットし、背を形成する。基部調整は施されておらず、剥片の先端をそのまま利用している。

唐人塚1号墳埋土中より出土。長さ2.4cm、幅1.1cm、厚さ0.4cmを測る。

石鏝 2～9

2は、黒輝石を素材として用い、押圧剝離によって入念に仕上げている。唐人塚1号墳北側周溝内より出土。

7は、サヌカイトを素材とし、両側辺部を鋸歯状に仕上げている。唐人塚3号墳東側周溝落ち込みより出土。

8は、剥片の側辺部のみ加工を施し、全体を二等辺三角形に仕上げている。底部は折断しただけである。唐人塚2号墳貯蔵穴内より出土。

3～6・9は、サヌカイトを素材とし、仕上げは雑である。3は、唐人塚6号墳石室内埋土中より出土。4は唐人塚4号墳北側周溝落ち込みより出土。5は、唐人塚6号墳埋土中より出土。6は、唐人塚1号墳南トレンチより出土。9は、唐人塚5号墳南側周溝内より出土。

スクレーパー 12・14

12は、サヌカイトを素材とし、全面を押圧剝離によって、ポイント状に仕上げている。ポイントと考えるには、少し厚すぎることと、周縁部に入念な調整が施されていることから、ラウンドスクレーパー的なものと考えられる。唐人塚5号墳南側盛土中より出土。

14は、蛋白石の横長剥片を素材としたもので、剥片の先端のエッジに若干の二次調整を施したものである。第1号竪穴遺構より出土。刃部長5.5cmを測る。

二次加工のある石器 10

サヌカイトを素材として用い、右側辺部に表方向から加撃している。何らかの石器の未製品と思われる。唐人塚5号墳石室内埋土中より出土。

砥石 13

硬質砂岩を用いたもので、全体形は、石斧状をしている。全面に研磨痕が見られる。石の目は荒い。唐人塚6号墳石室内より出土。

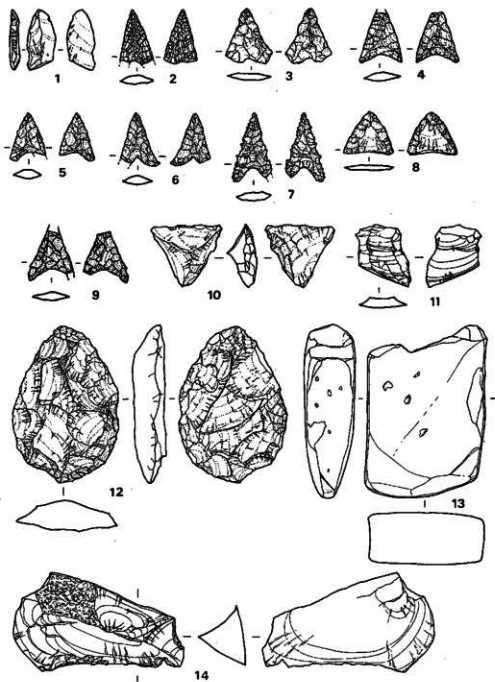


Fig. 8 唐人塚遺跡出土石器実測図 (縮尺2/3)

剥片 11

良質の黒曜石で、先端部は折断されている。唐人塚4号墳石室内埋土中より出土。

(平ノ内幸治)

(b) 古墳時代の土壌

1号墳の墳丘下から他の墓地遺構とともに検出されたものであるが形状から墓地とは考えられないものである。

1-6号土壌 (Fig. 9)

土壌は長さ157cm、幅94cmであり、各辺とも凹凸が著しく直線とはならない。壁面も直線的に底面に至るものではなく屈曲が著しい。底面は、北半部は傾斜して浅くなる。最深部は38cmを測る。

1-8号土壌 (Fig. 10)

不整形を呈する土壌であり、長さは145cm×113cm、深さは55cmのものである。中からは何らの遺物も検出されておらず性格は不明である。

(c) その他の土壌

第1号竪穴遺構 (Fig. 11, P L. 6)

1号墳と2号墳間で東側斜面寄りの位置から検出された。長さ3.68m、幅1.9m、深さ1.65mであり、平面形は隅丸長方形を呈している。南、北両壁は垂直壁であるが、東、西壁は若干傾斜している。主軸はN-10°-Eである。

遺構内からは遺物は何ら検出しておらず、不明な点が多い。

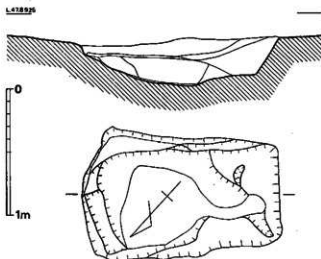


Fig. 9 1-6号土壌実測図 (縮尺1/30)

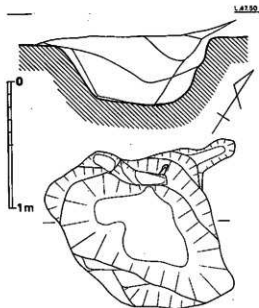


Fig. 10 1-8号土壌実測図 (縮尺1/30)

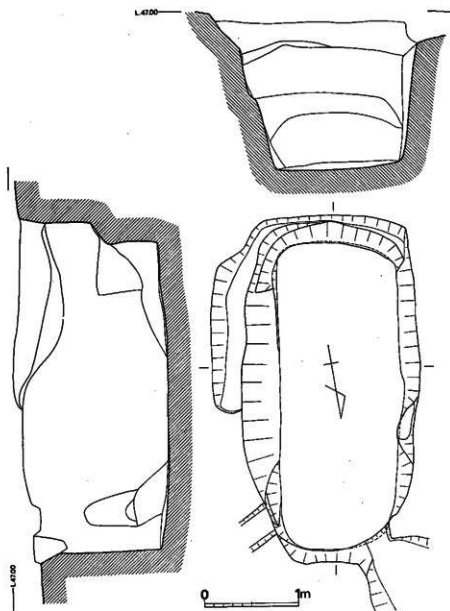


Fig. 11 第1号壑穴辺構造実測図 (縮尺1/40)

南北トレンチ土層断面図

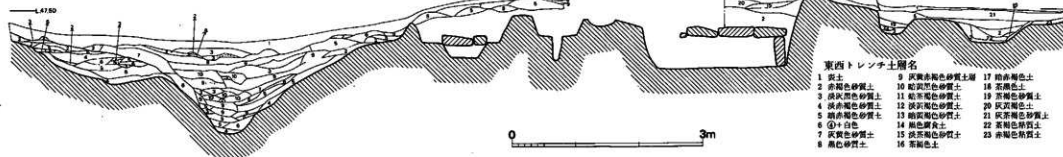
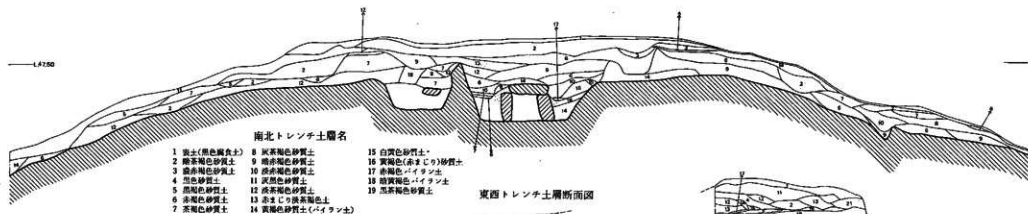


Fig. 12 2号墳填丘土層断面図(縮尺1/60)

(2) 墓地群の調査

A 古墳時代の墓地

古墳時代前期のものとしては土壙墓、石蓋土壙墓、木棺墓、箱式石棺墓があり、総数は30基である。後期のものとしては横穴式石室が6基検出された。

(a) 土壙墓

土壙墓としたものの中のいくつかは木棺墓になるものもあるかも知れないが、確証のないものはすべて土壙墓とした。石蓋の明確なものは、石蓋土壙墓としの中には含めない事とする。土壙墓は次にのべる14基が検出された。大半は頂部周辺に所在する。

1-4号土壙墓 (Fig.13, P.L. 8)

墓壙は上部を削平されているため浅いが、長さ240cm+ α 、幅135cmである。主体部は主軸をS-56°-Eにとり、南東からやや東寄りに頭部を向けた土壙墓である。棺の内法は長さ145cm、中央部幅26cmであり、足部幅は15cmと狭くなる。平面形は隅丸長方形を呈する。両側壁側には幅20cm、厚さ5cm程の粘土の帯がみられ、これは木蓋の周囲を被覆したものと考えられ

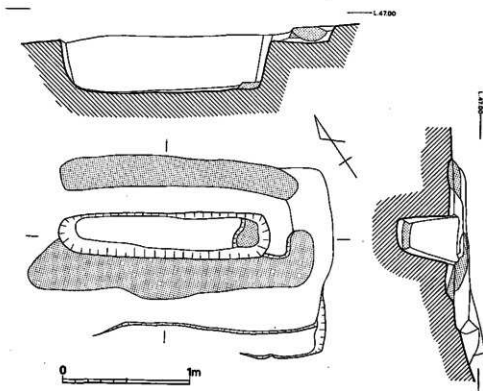


Fig. 13 1-4号土壙墓実測図 (縮尺1/30)

る。木蓋の位置から床面までは高さ40cmであり、右側壁は直に、左側壁と、兩小口壁はややゆるやかな勾配となる。頭部には最大幅18cm、厚さ5cmで、粘土と、やや粘土っぽい土を混ぜた粘土枕を有する。

遺物

小玉 (Fig.14) 水色ガラス玉である。直径5.8mm、孔径2mm×2.5mm、厚さ3mmである。



Fig. 14 1-4号土墳墓出土玉実測図(実大)

1-5号土墳墓 (Fig.15, P.L. 8)

主軸はS-22°-Eであり、頭位は南南東である。主体部は長さ218cm、幅55cm、深さ25cmであり、平面形は隅丸長方形を呈する。頭部の小口壁に接して、隅丸長方形のピットがあり深さ

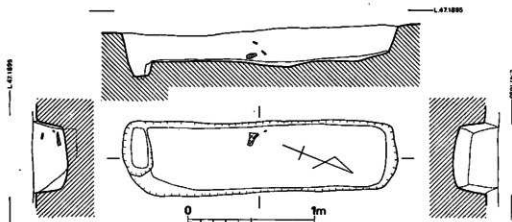


Fig. 15 1-5号土墳墓実測図(縮尺1/30)

は底面から12cmである。棺底面はやや凹凸があるもほぼ水平であり、中央部の左壁ぎわでは、床面からやや浮いた状態で鉄斧と鉄小片が出土したがこれは棺外副葬品と考えられる。小口に比して側壁の方が壁面は急勾配である。

遺物

鉄斧 (Fig. 16, P.L. 32) 鉄板の上半分を厚さ3.5mm~4mmほどに鍛錬して筒状の袋部としており、合わせ目が明瞭に入る。全長89.5mm、刃部長36.5mm、刃部先端幅52mm、刃部基部幅39mm、柄長53mm、柄中央部幅38mmである。柄部より刃部は幅広となる。無屑式であり、柄断面は長方形を呈する。袋部には木質が遺存していないため、柄を装着せずに副葬したものと考えられる。

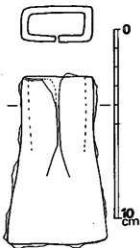


Fig. 16 1-5号土墳墓出土鉄斧実測図(縮尺1/2)

1-7号土墳墓 (Fig.17)

主軸はN-55°-Eであり、頭位は北東から東北東の間である。主体部は内法で長さ145cm、中央部幅45cmで長方形を呈する。足部の小口は斜面に位置するため残りは悪く、深さは10cm弱であるが、頭部では深さ34cmを測る。棺内からの出土遺物は皆無である。

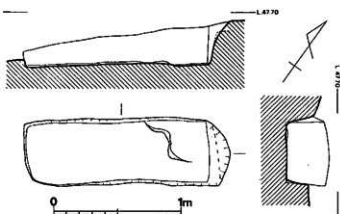


Fig. 17 1-7号土墳墓実測図 (縮尺1/30)

1-9号土墳墓 (Fig.18)

主軸はS-32°-Wであり、頭位は南南西にとるものと思われる。棺周囲には刃のだれた掘り込みがみられ墓塚としては不整形のものである。棺の底面は長さ96cm、幅25cmで長方形を呈している。深さは棺の上端までは15cmであり不整形土塚の上端までは25cmを測る。外側の掘りこみを墓塚と考えると2段掘りとなり1段目の肩部に蓋材がのりとも考えられる。

なお、遺物は全く検出されなかった。

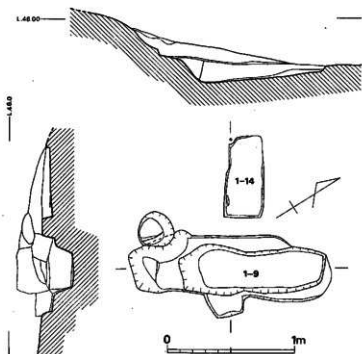


Fig. 18 1-9号・1-14号土墳墓実測図 (縮尺1/30)

1-14号土墳墓 (Fig.18)

1-9号棺の北西15cmの所に、これと直角方向に所在している小形のものである。棺は長さ65cm、幅30cmであり、現在高は9cmと非常に浅い。棺内の南コーナー近くの壁ぎわから鉄器が出土したが現存しない。主軸はS-58°-Eである。

1—10号土墳墓 (Fig.19)

墓壇は長さ82cm、幅65cm、深さ18cmであり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はN—61°—Eである。上部を削平されているため、非常に浅くなっている。遺物は出土していない。

1—13号土墳墓 (Fig.31)

1—12号棺に中央部を切られている。棺は長さ105cm、幅27cmであり平面形は長方形を呈している。棺の周囲には、長さ125cm、幅70cm、厚さ5cmで長方形に粘土が見られる。粘土の遺存状況から判断して木蓋土墳墓であったと思われる。上部はあまり削平されていないと判断できるが棺は深さ11cmと非常に浅いものである。

棺内から遺物の出土は皆無である。主軸はN—26°—Eであり、1—12号棺とはほぼ直交する位置にある。

2—8号土墳墓 (Fig.20, P L. 9)

墓壇は長さ120cm、幅100cmであり、隅丸長方形を呈するも、やや方形に近い形態である。深さ35cmの位置で墓壇のほぼ中央部にさらに掘り込みをもうけて棺としている。この棺の底面での規模は長さ64cm、幅23cmであり、平面形は隅丸長方形を呈している。棺だけの深さは30cmであり、墓壇上端面までは65cmを測る。棺を覆う施設は何ら検出されなかった事から木蓋土墳墓が考えられる。棺底面の東側は地山部を削り残して10cmの比高差をもうけているのがみられ、このことから頭位は東側であったと考えられる。主軸はS—89°—Eである。

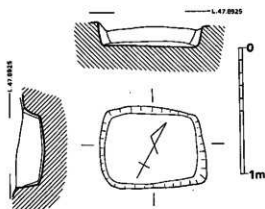


Fig. 19 1—10号土墳墓実測図 (縮尺1/30)

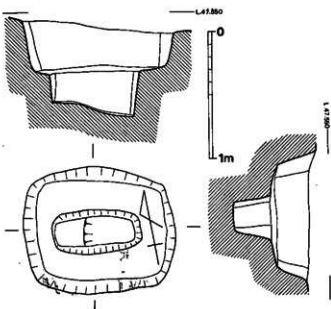


Fig. 20 2—8号土墳墓実測図 (縮尺1/30)

このことから頭位は東側であったと考えられる。主軸はS—89°—Eである。

遺物は何も検出されなかった。

2-9号土墳墓 (Fig.21, P L, 12)

墓壙は短辺103cm、長辺135cm、幅80cm強の台形状の堅穴を掘り、長辺の壁面にさらに横穴を穿っている特殊なものである。横穴の前面には幅10cm程の溝があり、横穴部の入口を塞ぐ施設を設けていたようである。横穴は長さ95cm、奥行き32cmである。天井は入口部は高く、奥の方はこれより10cm低い傾斜をもつため、高さは45cm～55cmの間である。しかし、この傾斜は調査前の段階で天井が若干崩壊したため生じた可能性もあり、本来は高さ45cm程の水平な天井であったかも知れない。主軸はN-52.5°-Eである。

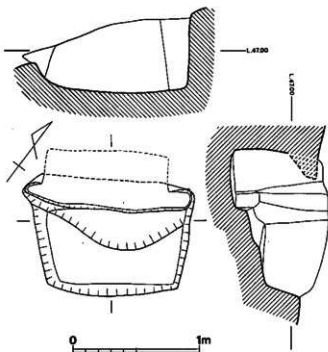


Fig. 21 2-9号土墳墓実測図 (縮尺1/30)

2-10号土墳墓 (Fig.22)

東側の斜面に土墳墓は営まれている。墓壙の南半部は削平を受けて低くなる。規模は長さ162cm、中央部幅79cmであり、北側小口部は82cmと広く南側小口部は狭くなる。墓壙の形状からして頭位は北側と思われる。主軸はN-13°-Eである。

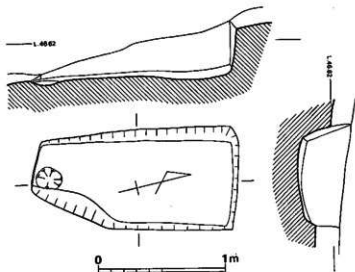


Fig. 22 2-10号土墳墓実測図 (縮尺1/30)

墓壇底面は水平であり壁の高さは37cmを測る。

遺物は何ら検出されていない。

2-11号土壇墓 (Fig.23)

墓壇は長さ93cm、幅63cm、深さ55cmであり、平面形は隅丸長方形を呈しており、北西コーナーは堅穴状遺構によって切られている。底面はややくぼませており、長さ65cm、幅37cmを測るものである。主軸はN-89°-Eであり、頭位は東向きであったろうと思われる。

遺物は何ら検出されていない。

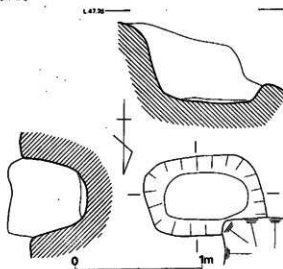


Fig. 23 2-11号土壇墓実測図(縮尺1/30)

2-12号土壇墓

(Fig.24, P L. 9)

墓壇の西側は溝状遺構に切られている。棺は長さ70cm、幅34cm、深さ10cmである。底面は西から東へ傾斜しており、この底面での規模は長さ54cm、中央部幅18cmであり、東側小口の方が西側のそれよりも広い。主軸はS-76°-Eであり、頭位は東から東南東の間である。

遺物は何ら検出されていない。

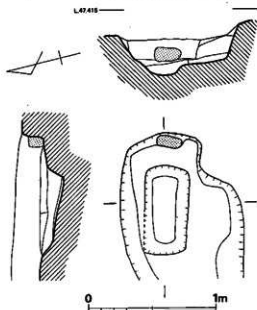


Fig. 24 2-12号土壇墓実測図(縮尺1/30)

3-1号西土壇墓

(Fig.25・26, P L. 10)

東棺と並置しており主軸は東棺とは若干ずれて、N-33°-Eである。北半部には粘土と小石がある。南西の小口には粘土の被覆は見られない。棺の内法は主軸の長さ166cm、幅42cmである。北東の小口は直線であるが、南西の小口は東棺と同じく弧状を呈する。壁はいずれも垂直に近く深さは43cmを測る。棺内埋土中から滑石製の勾玉1個と有孔円盤が1個検出された。

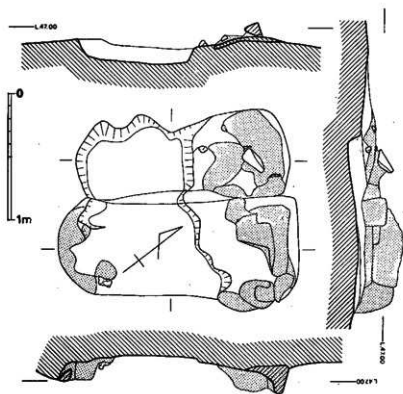


Fig. 25 3-1号東木棺墓、西土槨墓実測図(縮尺1/30)

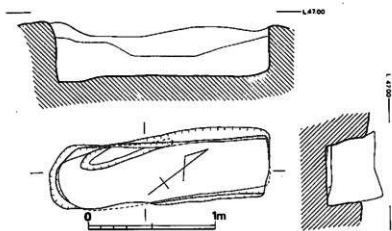


Fig. 26 3-1号西土槨墓実測図(縮尺1/30)

遺物

勾玉 (Fig.27-1, P L. 34) 滑石製品であり、全長は21mm、厚さ4mmである。孔径は2.5mm×2.8mmで両面から穿孔する。丁寧にみがいてあり、表面はなめらかである。

有孔円盤 (Fig.27-2, P L. 34)

円形というよりも五角形に近い形であり剣形 Fig.27 3-1号西土城墓出土玉類実測図(実大)
品とした方が良いかも知れない。長径19.5mm、短径16mmであり孔径は1.5mmである。厚さは1.2mm~2.5mmである。滑石製品である。

3-3号土墳墓 (Fig.28, P L. 11)

主軸はN-26.5°-Eである。墓壙は台形状を呈する。主軸の長さは120cm、幅90cm、深さ65cmである。中ほどには、長さ90cm、幅38cmの長方形の掘り込みがみられる。これは深さ10cm程の浅いものであるが、中央部には36cm×29cmで深さ31cmの落ち込みがある。遺構内からは何ら遺物は検出されなかった。土壙の性格は不明であるが一応土墳墓として取り扱った。

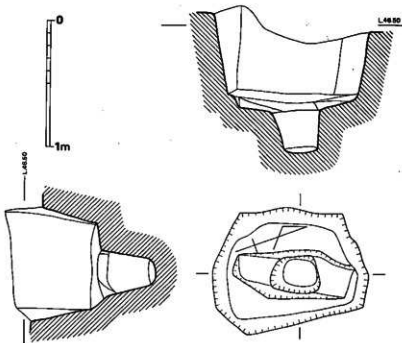
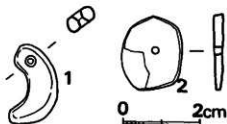


Fig. 28 3-3号土墳墓実測図(縮尺1/30)

8-1号土墳墓 (Fig.29, P.L. 12)

丘陵の北側低斜面で標高43.5mの位置で1基だけ単独で検出された。墓横上半部は削平されていて現存しなかった。主軸はN-0°であり、南北に位置する。墓横は長さ192cm、幅77cmであり、やや南小口が幅広い長方形を呈する。石材を北側小口に一枚と東壁に4枚用いているが、他の2辺は最初から石材は存在していない。北側小口に石材を使用している事から頭位は北方向と考えられる。墓横の現存高は15cmであり、石材までの高さは20cm強である。内法は長さ176cm、幅50cmであり、底面は南側が高くなる。南寄り西壁近くから直径3cmの範囲で珠が検出された以外は何ら遺物は検出されなかった。

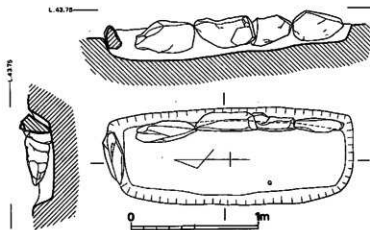


Fig. 29 8-1号土墳墓実測図 (1/30)

(b) 石蓋土墳墓

石蓋土墳墓は1号墳に2基、2号墳に3基、そして5号墳下に1基の総数6基検出されている。

1-11号石蓋土墳墓

(Fig.30, P.L. 13・14)

蓋石は頭部から2枚だけ残存するにすぎず、墓横の大きさからして蓋石の合計は4枚であったと考えられる。残存する蓋石は墓横内に落ち込んでいた。墓横は長さ127cm、幅61cm、深さ40cmである。底面は頭部が若干高くなり、粘土枕を有する。この粘土枕は

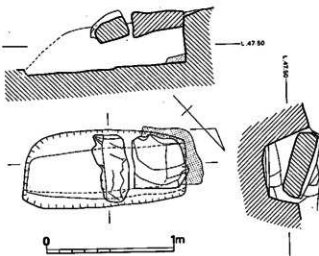


Fig. 30 1-11号石蓋土墳墓実測図 (縮尺1/30)

長さ15cm、幅23cm～27cm、厚さ5cm～8cmのものである。壁面は頭部の小口は垂直であるが、左、右側壁はゆるやかに傾斜している。底面の規模は、長さ125cm、幅35cmであり、成人用とは思われない。なお棺内からは遺物は出土していない。主軸はN-46°-Wであり、頭位は北西にとっている。

1-12号石蓋土墳墓 (Fig.31, P L, 13・14)

1-13号土墳墓を切って造られている。主軸はN-66°-Wであり、頭位は西北西にとっている。墓壇は足部を削り取られているが、現存する規模は長さ170cm、幅52cmである。頭部は、長さ24cm、幅40cm、厚さ5cmほどの粘土枕を有する。棺は深さ50cm強であり、地山底面は頭部のみ若干高いがほぼ水平である。なお石蓋は残存していなかった。

棺内から遺物は出土していない。

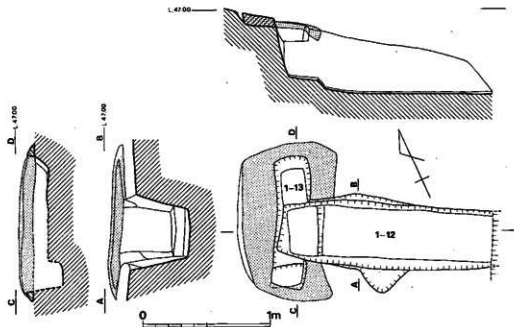


Fig. 31 1-12号石蓋土墳墓・1-13号土墳墓実測図 (縮尺1/30)

2-2号石蓋土墳墓 (Fig.32, P L, 15)

主軸はS-65°-Eであり、頭位を東南東にとる。墓壇は不整形であり、主軸の長さ120cm、幅110cm、深さ45cm程のものである。興味深い事は墓壇内に木棺を埋置して裏込めを行ったと考えられる痕跡がみられた。それによると、棺は長さ95cm、幅45cm、深さ30cm程のものである。蓋石は3枚であり、頭部と思われる部分の蓋石は特に大きいものを用いている。遺物は何も検出されていない。

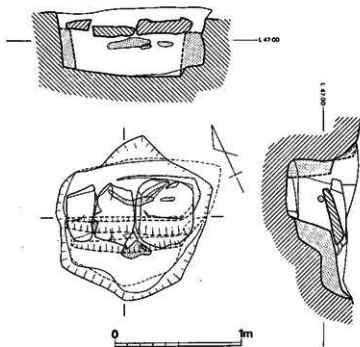


Fig. 32 2-2号石蓋土墳墓実測図(縮尺1/30)

2-4号石蓋土墳墓 (Fig.33, P L. 16・17)

墓壇は長さ200cm、幅110cm程であり、平面形は隅丸長方形を呈する。主軸はS-88°-Eであり、頭位は、ほぼ東向きである。墓壇底面中央部にさらに長方形の掘り込みをして棺とし、6枚のやや厚手の石材で蓋をする。蓋石は頭部にはやや大き目の石材を用いており、石材の接合部や、墓壇と蓋石との空間部を粘土で厚く被覆している。棺は内法で、長さ150cm、中央部幅29cmであるが、頭部はこれより幅広く、足部は狭い。深さは、蓋石が若干落ち込んでいるため20cmであり、棺上端面までは26cmを測る。頭部は長さ20cm、幅38cm、厚さ8cmの粘土枕を有する。この枕の直前に刀子が1本あり、中央部には人骨がわずかに遺存していた。これと逆向きに頭蓋骨と歯が検出されており、2体埋葬されていた事になる。頭部左側の棺外には古式土師器が横転しており、しかも口縁部を石でふさいだ状態で検出された。また別個体の小片も近くから検出されている。

遺物

刀子 (Fig.34, P L. 33) 全長81mm、中央部幅11mm、厚さ1.5mmである。中央部から折り曲げられており、木材を削るためには押し出すよりも手前に引いた方が適した用い方の方である。

甕 (Fig.35, P L. 34)

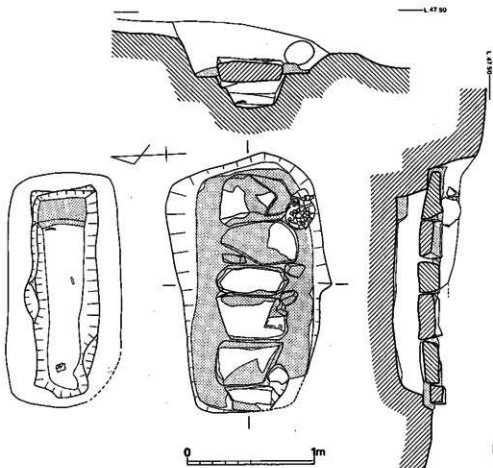


Fig. 33 2-4号石蓋土墳墓実測図(縮尺1/30)

石蓋土墳墓の棺外附属品の土師器であり、南東のコーナーから1が、石蓋の粘土上から2が出土した。なお1は甕を横にして、口を花崗岩の自然石で塞いでいた。

1は胴部上方に1条の平行に近い沈線が入る。胴部最大径はほぼ中央部に位置しており、底部はふくらみをもった円形である。頸部は外反度が著しく、口縁端部内面は若干はね上る。調整法は外面は全面に刷毛目を施してあり、内面は、ヘラ削りと、底部近くはナデを施す。器壁はヘラ削りによって一様に薄手である。胴部下半部には煤が付着する。口径17.2cm、器高24.4cm、胴部径22.2cmである。色調は黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。2は胴部下半のみである。外面は刷毛目調整を施しており、内面は指ナデと一部ヘラ削りしている。1より

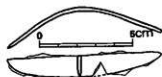


Fig. 34 2-4号石蓋土墳墓出土刀子実測図(縮尺3/4)

若干大形である。色調は灰褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。

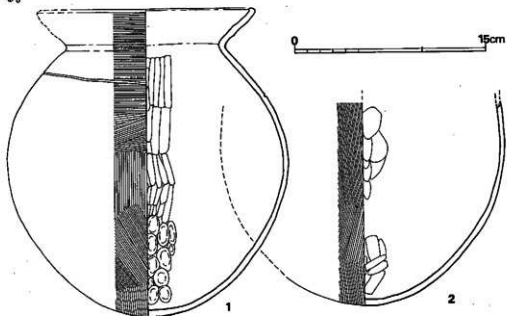


Fig. 35 2-4号石蓋土横基出土土師器実測図（縮尺1/3）

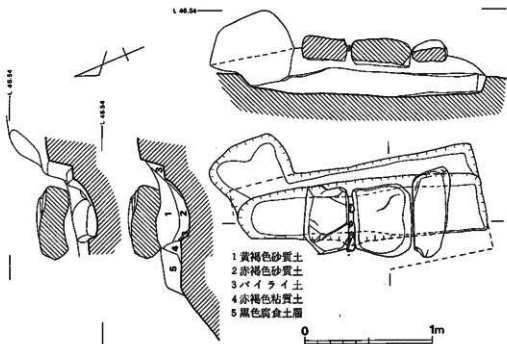


Fig. 36 2-7号石蓋土横基実測図（縮尺1/30）

2-7号石蓋土墳墓 (Fig.36, P L. 14)

西側の斜面に位置しており、墓壙は東壁を残すのみである。石蓋は3枚遺存しており北側は取り除かれていた。主軸はS-19.5°-Wであり、頭位は南から南南西の間である。蓋石は斜めにずれ落ちておりあまり棺にはのっていない。棺の内法は長さ180cm、中央部幅30cmであり、南小口は35cm、北小口は25cmである。平面形は北小口は弧状を呈するが、全体的にはほぼ長方形状である。

遺物は何ら検出されていない。

5-1号石蓋土墳墓 (Fig.37, P L. 18)

5号墳の石室の墓壙北西コーナーからわずか40cm程の位置に所在する。墓壙は古墳築造時に破壊されており、石蓋以下を残すのみであった。棺の主軸はN-26°-Eであり頭位はほぼ北北東である。石蓋は大き目の石材6枚と小ぶりの石材2個を一枚分として総数7個を使用する。すべて花崗岩の自然石を用いており、石材間の空間部に粘土で詰める。従って粘土の用い方は石蓋の上面を覆ってしまうのではなく、空間部の詰めのみ用いており、石蓋をする際に棺と石材との空間にも粘土を敷いている。石蓋は主軸での長さ、195cm、幅60cm、厚さ20cmほどのものである。棺は上端部は長さ175cm、中央部幅43cmであり、底面では、長さ162cm、頭部幅30cm、足部幅20cmで隅丸長方形を呈している。底面は平坦であり深さは30cm程である。足位に近い西壁から鋒を足部小口に向け、刃部を西壁に向けた刀子が1本検出された。人骨は遺存し

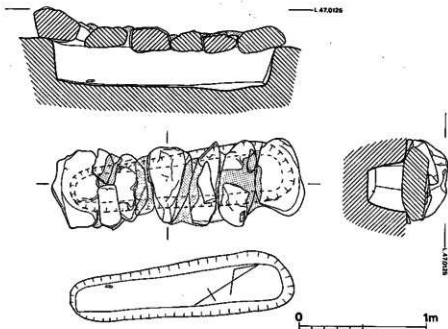


Fig. 37 5-1号石蓋土墳墓実測図 (縮尺1/30)

ていなかった。

遺物

刀子 (Fig.38, P L, 33) 全長70.5mm、刃部幅13mm、刃部厚2mmである。茎と刃部との境は不明瞭である。



Fig. 38 5-1号石蓋土墳墓出土刀子実測図 (縮尺3/4)

c) 木棺墓

棺の断面形態や粘土の被覆状態から木棺墓と考えられるものは3基でありいずれも遺物を検出している。

1-2号木棺墓 (Fig.39, P L, 20)

主軸はS-56.5°-Eであり、頭位は南東を向くものである。頭部小口と右側壁部には粘土の被覆がみられる。墓壇は長さ250cm、幅68cmで長方形を呈している。棺は内法で長さ181cm、幅35cmであり、底面には小口、側壁の棺材を覆く掘り込みは見られない。

頭部の右側床面からは刃を右側壁に向け、鋒を足部に向けた刀子が1本出土した。

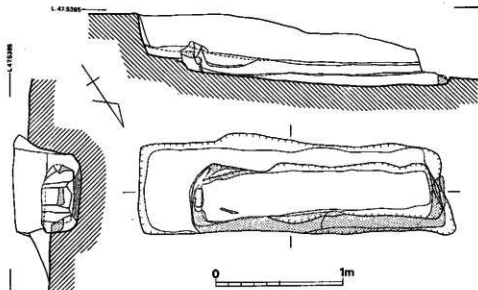


Fig. 39 1-2号木棺墓実測図 (縮尺1/30)

遺物

刀子 (Fig.40, P L, 33) 鋒の先端部をわずかに欠くがほぼ完形品である。全長15.05cm、茎長5.0cm、茎幅は中央で1.3cm、刃部長10.05cm、刃部厚0.45cmである。関はほとんどみられず無関と言ってよからう。刃部基部幅1.4cmであり、



Fig. 40 1-2号木棺墓出土刀子実測図 (縮尺1/2)

鋒は幅を減じて先端へ至る。茎には木質の遺存が見られるが、刃部には見られない事から鞘に納めなかった事が考えられる。

1-3号木棺墓 (Fig.41, P L, 20)

主軸はS-69°-Eであり、頭位は東南東を向くものである。墓壁は足部上面を若干削られており、長さ230cm+α、幅72cm、現存高20cm強の隅丸長方形を呈する。棺はこの墓壁のほぼ中央部に埋置した割竹形木棺と思われる。即ち、墓壁断面はU字形を呈し、棺を安定させるため周囲に用いた粘土もU字形の断面を呈する。棺の最大長207cm、最大幅44cmである。棺の右側で中央部からやや頭部に寄った位置から管玉1個とガラス玉4個が検出されている。

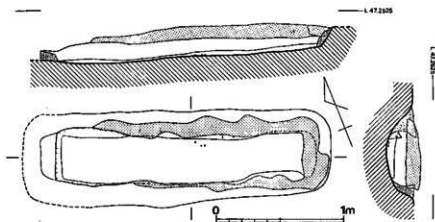


Fig. 41 1-3号木棺墓実測図 (縮尺1/30)

遺物

管玉 (Fig.42-1, P L, 34) ひすい製品である。径4mm、孔径2mm、長さ8.8mmを測る。両面穿孔であるが片方からの穿孔の度合いが強い。

小玉 (Fig.42-2・3, P L, 34) ガラス製品であり、水色を呈する。径4mm~4.8mm、孔径1.5mm~2mm、厚さ2.5mm~3.5mmである。

粟玉 (Fig.42-4・5, P L, 34) ガラス製品であり、水色を呈する。径2.5mm~3mm、孔径1mm~1.3mm、厚さ2mmであり、不整形を呈する。

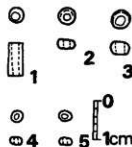


Fig. 42 1-3号木棺墓出土玉類実測図 (実大)

3-1号東木棺墓 (Fig.43, P L, 21)

2墓並置されており、上方部は削平により、また、両棺の中央部から南寄りの部分は盗掘を受けている。

主軸はN-37°-Eであり、頭位は北東~北北東と思われる。周囲には粘土があり、厚い所

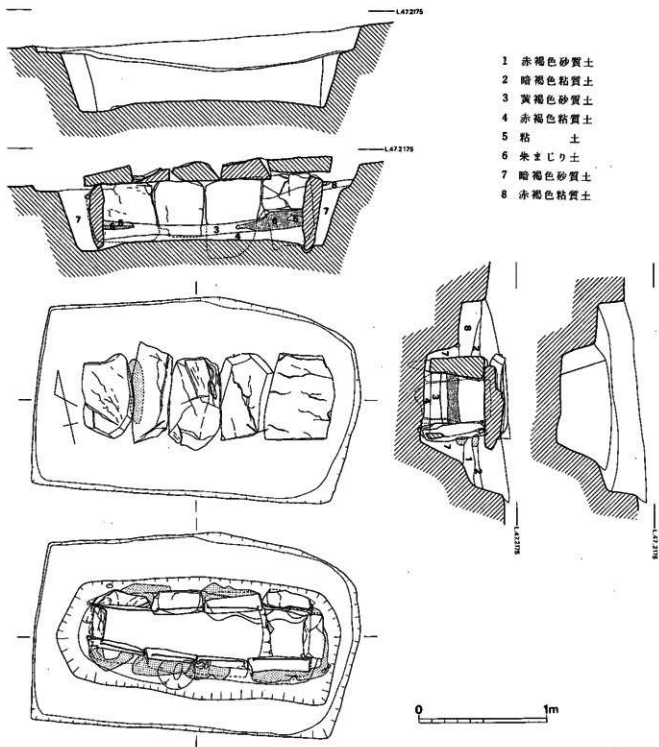


Fig. 45 1-1 箱式石棺墓実測図 (縮尺 1/30)

では20cm程の厚さで遺存している所もある。棺は北東の小口は内法で70cmを測り、南西の小口は弧状を呈する。主軸の長さは178cmほどである。深さは18cmであり、底面は平坦であるが、やや傾斜しており南西小口は若干高くなる。棺内の南東隅から鉄斧が1個検出されており、他に鉋と刀子片が出土した。

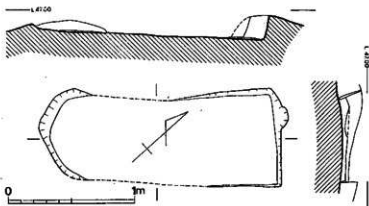


Fig. 43 3-1号木棺蓋実測図(縮尺1/30)

遺物

鉄斧 (Fig.44-1, P L. 32) 無肩式であり、刃部はやや幅を増す。鉄板の上半分を厚さ4.5mm程に鍛錬して筒状の袋部としている。袋部には合せ目があり、この合せ目は3mm~4.5mmほどひらいている。袋部は隅丸長方形の断面形を呈している。刃部はやや片減りしており、これは使用のためと思われる。全長98mm、刃部幅56.5mm、柄長75mm、柄幅47mmである。

鉋 (Fig.44-2, P L. 32) 鋒を欠損する。柄幅9.5mm、柄厚4.5mmである。

刀子 (Fig.44-3, P L. 32) 一応刀子の茎と考えた。茎幅8mm、茎厚3.5mmである。

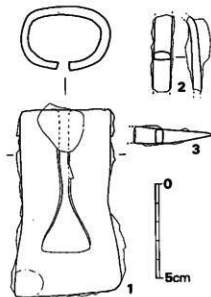


Fig. 44 3-1号東木棺蓋出土鉄器実測図(縮尺1/2)

(d) 箱式石棺墓

蓋石まで完全に残っていたのは2基だけであり、他の4基は石材の若干とその抜き跡から規模を推定するにすぎないものである。そのうちわけは、1号墳に1基、3号墳に1基であり、他の4基は2号墳に集中する。3基から遺物が検出されており、他の3基は破壊の度合いが著しい事もあってか遺物を検出してない。

1-1号箱式石棺墓 (Fig.45, P L. 22・23)

主軸はS-78°-Eであり、頭位は東向きである。蓋石は5枚であり、頭部には最も大形で整った石材を用いている。石材はいずれも花崗岩であり、長さ60cm~70cm、幅30cm~50cm、厚

さ8cm～16cmの扁平なものを使用している。石蓋の接合には粘土を詰めているのが若干見られるだけである。墓標は長さ258cm、幅155cmであり、平面形はほぼ長方形を呈する。2段掘りであり、棺材を据えるための掘り込みは、長さ225cm、幅95cmである。小口の部分の壁は弧状を呈している。棺材は両壁とも4枚であり扁平な石材を縦長に用いている。両側壁が小口を挟み込むものであり、石材の接合部には特に粘土は用いていない。墓標は高さ60cmであり、底面にはまず赤褐色粘質土を敷き、さらに黄褐色砂質土を敷いて床面としている。底面の厚さは中央部で12cm～13cmである。小口東側には、朱まじりの土で長さ30cm、幅45cm、高さ5cmほどの枕をもっている。石棺内面の床面から上方の四壁には赤色顔料を塗布しているが、蓋石の内面には施されていない。

石棺の北から西側には西方部を他の遺構で切られたL字状溝があり、この溝は石棺の肩溝とするには位置が近すぎるように思える。

なお石棺内からは鉋が出土している。

遺物

鉋 (Fig.46, P.L. 32) 鋒を残存するのみである。幅10.5mm、厚さ2.5mmで断面はU字形に近い。

2-1号箱式石棺墓 (Fig.47・48, P.L. 24～28)

2号墳のはば中央部に位置している。墓標は長さ260cm、幅190cm程であり、隅丸長方形を呈している。墓標のはば中央部には棺材を据えるための2段目の掘り込みがある。これは両小口部分は墓標壁に接するが、両側壁部は内方に位置しており、幅は110cm程のものである。墓標底面から、上端までは100cmを測る。主軸はN-55°-Eであり、頭位は北東から東北東の間である。蓋石は頭部と胸部上面部に最も長大のものを用いており、全部で5枚使用している。蓋石間はかなり入念に粘土を詰めている。そして頭部から4番目の蓋石の被覆粘土中から鉋が1本検出された。両側壁はそれぞれ4枚の石材を横長に用いている。頭部の小口は両側壁がこれを挟んでおり、足部の小口は井桁状となる。石材の接合部にも入念に粘土を詰めている。棺内には頭蓋骨など若干部分の骨が遺存して



Fig.46 1-1号箱式石棺墓出土鉋実測図 (縮尺1/2)

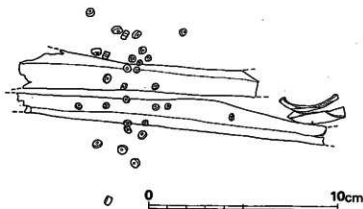


Fig. 48 2-1号箱式石棺墓 玉出土状態実測図 (縮尺1/2)

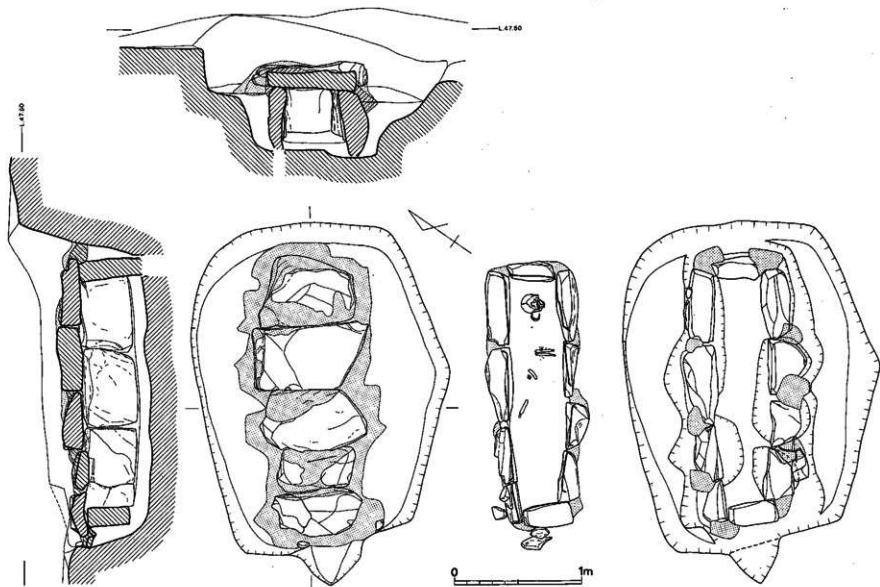


Fig. 47 2—1号箱式石棺墓室剖面 (縮尺1/30)

おり、34個のガラス玉を左手首に装着しているのが発見された。この人骨は九州大学医学部永井昌文教授により、熟年（30代～40代）の女性である事が判明した。なお、上部には若干の盛土が見られた。

遺物

箱式石棺の蓋石の被覆粘土の中に副葬されていたものである。

鉈 (Fig.49, P L, 32) 全長222mmであり、幅11.5mm、厚さ2.2mmで断面U字形の棒状部に鋒をつくり出したものであり、先端部も山形に曲げて両端に刃をつけ、曲げたものである。鋒長は28mmである。棒状部裏面は、鋒端部の58mmの位置から164mmにわたって木質が付着しており、表面の所々には紐の跡と思える痕跡が認められる。

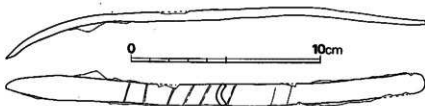


Fig. 49 2-1号箱式石棺墓出土実測図 (縮尺1/2)

小玉 (Fig.50, P L, 34) すべて青色を呈するガラス製品である。径4mm～5.7mm、孔径1.3mm～2.5mm、厚さ1.9mm～4.0mmである。右上腕部の装着品であり、実測可能なものは総数31個である。各々の計測値はTab.1の通りである。

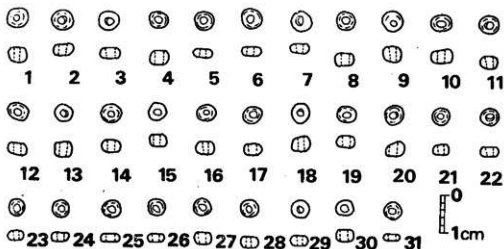


Fig. 50 2-1号箱式石棺墓出土玉実測図 (実大)

単位mm

番号	径	孔径	厚さ	材質	色	番号	径	孔径	厚さ	材質	色
1	5.5×5.3	1.5×1.5	4.0	ガラス	青色	17	4.9×4.9	2.0×1.8	3.0	ガラス	青色
2	5.7×5.2	2.5×1.9	3.0	"	"	18	5.1×5.0	2.0×1.5	4.0	"	"
3	5.3×5.0	2.5×2.0	3.0	"	"	19	5.0×4.2	2.2×1.6	3.2	"	"
4	4.9×4.5	2.2×1.9	3.9	"	"	20	5.1×4.9	2.3×1.8	4.0	"	"
5	5.0×4.9	1.9×1.7	2.2	"	"	21	4.5×4.4	1.8×1.4	2.8	"	"
6	5.5×5.2	2.0×1.9	2.2	"	"	22	5.0×4.3	2.2×2.0	2.6	"	"
7	5.5×5.0	2.5×2.0	2.8	"	"	23	4.5×4.0	2.2×1.8	2.9	"	"
8	4.8×4.6	2.2×1.8	3.5	"	"	24	4.5×4.5	2.0×1.5	2.6	"	"
9	5.3×5.5	1.8×1.3	4.1	"	"	25	4.8×4.4	2.1×1.9	2.1	"	"
10	5.3×4.5	2.2×1.8	3.8	"	"	26	4.2×4.2	2.2×1.8	2.2	"	"
11	5.0×4.5	2.3×1.8	3.1	"	"	27	4.8×4.5	2.1×1.8	3.2	"	"
12	5.8×4.2	2.0×1.8	3.0	"	"	28	4.9×4.5	1.8×1.3	3.0	"	"
13	4.6×4.4	2.0×1.9	4.0	"	"	29	4.8×4.5	1.9×1.3	3.0	"	"
14	5.1×4.9	2.0×1.8	3.2	"	"	30	4.7×3.9	2.1×1.9	3.5	"	"
15	4.6×4.2	2.0×1.8	3.2	"	"	31	4.6×4.3	2.0×1.5	1.9	"	"
16	5.0×4.2	1.5×1.3	3.5	"	"						

Tab. 1 2-1号箱式石棺墓出土小玉針測定表

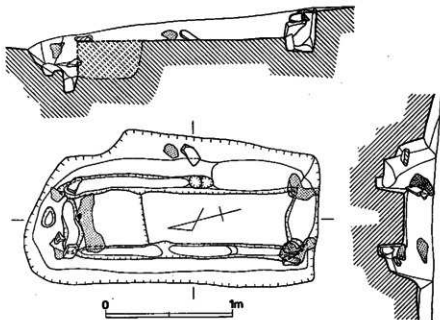


Fig. 51 2-3号箱式石棺墓実測図(縮尺1/30)

2-3号箱式石棺墓 (Fig.51, P L, 31)

石材はことごとく持ち去られており、石材間の空間を詰めるのに用いられた小石と粘土が残存するのみである。主軸は $N-14^{\circ}-E$ であり、頭位は北と北北東との間にある。頭部近くは床面を盗掘により30cm程掘りくぼめてあった。この盗掘からまぬがれた粘土枕がわずかに残存しており、若干赤色顔料が検出された。墓壁の東壁は旧状を変じているが長さ230cm、幅100cmである。棺材の抜き跡から、棺の内法は、長さ170cm、幅40cmであり、現存高は22cmである。

遺物は何ら検出されていない。

2-5号箱式石棺墓 (Fig.52, P L, 30)

箱式石棺墓であるが、石材はほとんど持ち去られており、石材間の詰め石として用いた小石と、同じ用途で用いられた粘土が残っているだけである。墓壁は長さ235cm、幅95cmであり、平面形は隅丸長方形を呈する。石材の抜きあとから判断した棺の内法は、長さ185cm、中央部

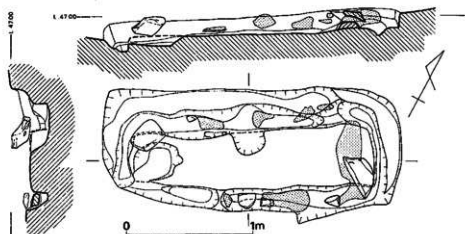


Fig. 52 2-5号箱式石棺墓実測図 (縮尺1/30)

幅45cmである。北東の小口は幅45cmで、粘土枕と思われるものがあり、南西の小口は35cmと狭いため、北東の小口部を頭部と考える。主軸は $N-61^{\circ}-E$ である。中央部よりやや足部に近い右壁からは壁面に並行して鉄鎌が1本検出された。

遺物

鉄鎌 (Fig.53, P L, 33) 箱式石棺墓の床面から検出された。

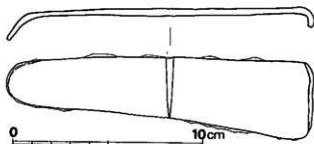


Fig. 53 2-5号箱式石棺墓出土鉄鎌実測図 (縮尺1/2)

全長192mmであり、基部は刃部先端に向って左側に短く折り曲げている。刃部は基部から細味となる。棟はほぼ平坦に近く、先端部を刃部方向へ折り曲げる事はしない。刃部先端は基部の折り曲げと同方向に曲げられている。刃部中央幅は32mmである。基部には木質の遺存が全く見られない事から、柄は装着しなかったものと考えた方が良さそうである。

2—6号箱式石棺墓 (Fig.54, P L. 29)

墓壙は盗掘などにより攪乱されているが、本来は隅丸長方形を呈していたものと推定される。墓壙は主軸の長さ255cm、幅145cmほどのものである。棺材は側壁を1個残すのみで、あとはすべて持ち去られている。北側の小口に近い部分には長さ50cmの範囲に赤色顔料がありこの部分が頭部であったと思われる。従って主軸はN—9°—Wであり、頭位はほぼ北向きである。石棺の内法は、長さ約170cm、中央部幅約45cmのものと思われた。なお、床面からの高さは45cm程である。

遺物は何も検出されていない。

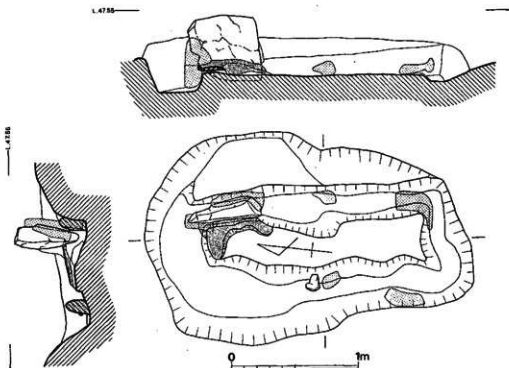


Fig. 54 2—6号箱式石棺墓実測図 (棺尺1/30)

3—2号箱式石棺墓 (Fig.55, P L. 31)

3—3号棺で東壁を切られている。上部を削平されているため墓壙北壁は消滅している。主

軸はN—14.5°—Eである。墓壇は2段掘りであり、1段目は深さ25cmである。現存長135cm、現存幅80cmである。棺の内法は長さ65cm+ α 、幅は49cmから石材の数値を引いた分であり、小形である。小児用と思われる。棺材は南小口は残存するが、以外は抜き去られている。北小口は石材を掘える際の掘り込みがみられるが、東、西両壁には底面に若干掘り込みがみられる程度である。南小口と西壁との接合部には小石と粘土がみられる。底面は平坦であり、床から右側頂部まで27cmである。棺の平面形は小口北側が幅広いため、北側が頭位と考えられる。

遺物は出土していない。

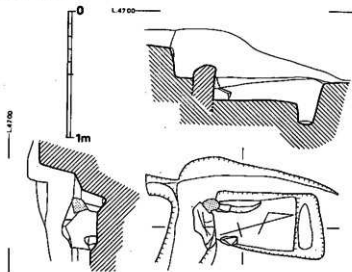


Fig. 55 3—2号箱式石棺墓実測図(縮尺1/30)

(e) その他の遺構と遺物

(i) 2号墳配石遺構 (Fig.56, P L. 24)

2—1号箱式石棺墓の南西小口部の墓礎と接するような位置に所在している。その範囲は長さ100cm×190cmであり、各石材は平面的に所在するだけであって、重ならない。小礫のとぎれた東方部50cmの位置には幅80cmで厚さ35cm大の大石が1個、斜めに土中に埋っていた。この大石は小礫群と同じ意味あいをもつもので相互関係は大である。なお、この小礫群中から、ガラス玉10個と、小形の石突きが出土している。この遺構の性格としては、箱式石棺墓の墓標的性格である配石遺構とは異なると思われる。なぜならば、(1) 小礫の範囲は箱式石棺墓の土壇の一辺にわずかに接するだけでその広がりには箱式石棺墓の土壇の形態とは無関係にある。(2) 小礫中に玉、鉄器などの遺物を含んでおり、他の遺構が破壊されたあとと考えられる。(3) 小礫と同じ意味あいをもつと考えられる大石があり、墓標の性格を考えるには無理がある。

従って結論的には他の遺構の破壊された痕跡と考えられよう。

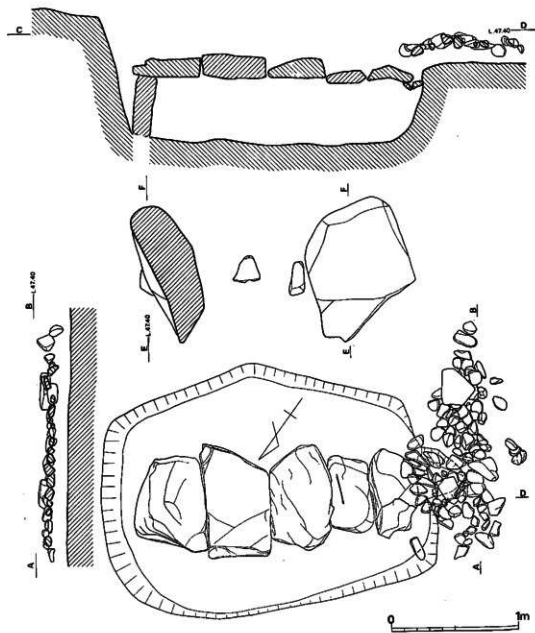


Fig. 56 2号墳配石遺構実測図 (縮尺1/30)

遺物

小玉 (Fig.57, P L. 34)
ガラス製品である。色調は
3が緑色であるがその他は
青色である。径6.2mm~8.8
mm、孔径1mm~2.9mm、厚
さ4mm~6mmのものであ
る。個々の計測値はTab.2
の通りである。

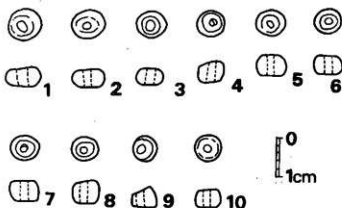


Fig. 57 2号墳配石遺構出土小玉実測図(実大)

単位mm

番号	径	孔径	厚さ	材質	色	番号	径	孔径	厚さ	材質	色
1	8.8×8.0	3.0×2.3	5.2	ガラス	青色	6	7.9×6.7	2.0×1.5	4.9	ガラス	青色
2	8.9×7.5	2.0×1.8	4.9	"	"	7	7.5×7.2	2.2×1.8	4.1	"	"
3	7.9×7.1	2.9×2.5	4.3	"	緑色	8	7.1×6.3	2.0×1.8	6.1	"	"
4	7.1×6.8	2.1×2.0	5.6	"	青色	9	6.9×6.3	2.4×1.8	5.8	"	"
5	7.8×7.0	2.0×1.2	5.6	"	"	10	7.0×6.9	1.8×1.8	4.9	"	"

Tab. 2 2号墳配石遺構出土小玉計測表

石突き (Fig.58, P L. 34) 全長37.5mm、最大幅17mmのものである。袋部に柄をさして用いたものと思われ、袋部下方には径4mmの鉄芯が存在する。これとは若干異なるが、宍枝原ノ辻カラカミ遺跡出土品の中に長さ40mmのもので尖頭器として報告されている例がある。また、山口県木崎遺跡(註2)の箱式石棺を内部主体とする円形周溝墓の棺内から出土した不明鉄器は現長40mm、上端幅2mm、下端幅6mmの棒状鉄器であり、中央から下部は中空になるものであり、類似している。

註 (1) 岡崎 敬「日本における初期鉄製品の問題——宍枝ハルノツジ、カラカミ遺跡発見資料を中心として」考古学雑誌42巻1号

(2) 棚田墳墓群1 木崎遺跡1976 山口県教育委員会

(ウ) 1号墳墳丘中出土遺物

鉄斧 (Fig.59, P L. 32) 鉄板の上方 $\frac{1}{2}$ を厚さ3mmほどに鍛鍛して筒状の袋部としており、



Fig.58 2号墳配石遺構出土鉄器実測図(縮尺1/2)

合わせ目には6mm～7mmのすきまがある。無肩式であり、中央部でややくびれるが柄部と刃部の幅には大差がない。全長94mm、柄長65mm、柄幅41mm、刃部幅44mmである。柄は外径26.5mmであり楕円形を呈する。袋部には木質の遺存がみられない事から、柄は装着しなかったものと考えられる。

(イ) 2号墳採集品

埴 (Fig.60, P L. 34)

表土除去作業中に検出した。口頸部はやや長く外反する。

胴部外面はヘラ削りを施しており、内面はナデている。

口径11.7cm、頸部径8.3cm、

胴部径9.2cmである。底部

を若干欠損しているため器

高は定かでないが、8.8cm程と思われる。色調は褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土は良好であり、酸化鉄を含んでいる。

刀子 (Fig.61) 1は刃部先端を欠損しており、2は刃部の小片である。1は両刃であり、刃部基部は幅14mm、刃部幅11.5mm、茎部は幅11.5mm、茎長31mmである。茎部には木質とひもの遺存がみられる。2は刃部幅13mmであり、ともに刃部には木質が見られない事から鞘に納めなかったものと思われる。

(ロ) 性格不明遺構出土遺物

鉄鎌 (Fig.62-1, P L. 33) 南側斜面の落ち込みから検出された。刃部先端をわずかに欠損している。現存長140mm、刃部中央幅27mm、刃部厚2.5mmである。基部は刃先端に向かって右側に折り込んでおり、この部分には木質の遺存が著しい。木質は基部の両側にみられ、この折り返しで背面をささえており、木質はこの折り返しより外方には存在しない。木柄の着装角度は、刃に対して鈍角である。刃先端部は内方へ曲っている。

鋤先 (Fig.62-2, P L. 33) 全長130mmであり、基部を若干欠損する。最大幅177mmである。刃部は幅48mmで厚さは2mm～3mmである。

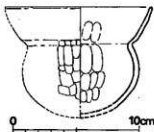


Fig. 60 2号墳採集土器実測図 (縮尺1/3)

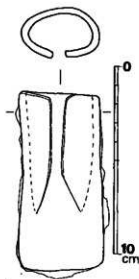


Fig. 59 1号墳丘中出土鉄斧実測図 (縮尺1/2)

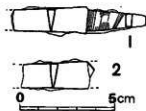


Fig.61 2号墳採集刀子実測図 (縮尺1/2)

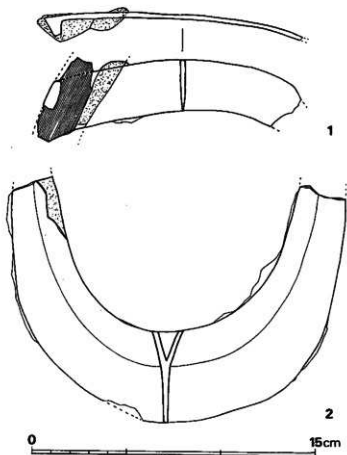


Fig. 62 性格不明遺構出土鉄器実測図 (縮尺1/2)

単位 cm

区	種類	主軸方位	墓 壇		小口幅		棺		枕	副葬品	備 考
			長さ	幅	深さ	最大	最小	長さ			
1-1	箱式石棺墓	S-78°-E	258	155	20	60	50	192	40	有	施 両側壁、両小口 2段掘り
1-2	木棺墓	S-56.5°-E	250	68	34	35	27	181	12	無	刀子 片小口2段掘り
1-3	木棺墓	S-69°-E	230+ α	72		40		200	20	無	管玉 ¹ ガラス玉 ⁴
1-4	土壇墓	S-56°-E	240+ α	135	13	26	15	145	40	有	無 片小口、両側壁 2段掘り
1-5	土壇墓	S-22°-E				40		218	25	無	鉄斧
1-7	土壇墓	N-55°-E				48	43	145	34	無	無
1-9	土壇墓	S-32°-W				25		96	15	無	無 両側壁、両小口 2段掘りか
1-10	土壇墓	N-61°-E				65		82	18	無	無
1-11	石蓋土壇墓	N-46°-W				35		125	40	有	無
1-12	石蓋土壇墓	N-66°-W				39		162	50	有	無
1-13	土壇墓	N-26°-E				20		90	11	無	無
1-14	土壇墓	S-58°-E				28		62	9	無	鉄器
2-1	箱式石棺墓	N-55°-E	260	190	35	36	30	179	42	無	施 ガラス玉 両側壁2段掘り、 人骨あり
2-2	石蓋土壇墓	S-65°-E	120	110	45	45		95	30	無	無 両側壁、両小口 貼り付け
2-3	箱式石棺墓	N-14°-E	230	100		40		170	22	有	無 両側壁2段掘り
2-4	石蓋土壇墓	S-88°-E	200	110	30	36	20	150	20	有	刀子 土師器繫 両側壁、両小口2 段掘り、人骨2体
2-5	箱式石棺墓	N-61°-E	237	95		45	35	185		有	鉄鎌
2-6	箱式石棺墓	N-6°-W	255	145		45		170	45	有	無 両側壁2段掘り
2-7	石蓋土壇墓	S-19.5°-W		85+ α		35	25	180	13	無	無
2-8	土壇墓	S-89°-E	127	100	40	23		64	30	無	無 両側壁、両小口 2段掘り
2-9	土壇墓	N-52.5°-E	103~ 135	80	42	32		95		無	無
2-10	土壇墓	N-13°-E				64		160	37	無	無
2-11	土壇墓	N-89°-E				37		65	55	無	無
2-12	土壇墓	S-76°-E				34		70	10	無	無
3-1東	木棺墓	N-37°-E				70		178	18	無	施、刀子 鉄斧
3-1西	土壇墓	N-33°-E				42		166	45	無	勾玉 有孔円盤
3-2	箱式石棺墓	N-14.5°-E	135	80	23	40	55+ α	27		無	無 両側壁、両小口 2段掘りか
3-3	土壇墓	N-26.5°-E	120	90	65	27		85	10	無	無 両側壁、両小口 2段掘り
5-1	石蓋土壇墓	N-26°-E				30	20	162	30	無	刀子
8-1	土壇墓	N-0°				50		176	20	無	無

Tab. 3 古墳時代土壇墓・石蓋土壇墓・木棺墓・箱式石棺墓一覽表

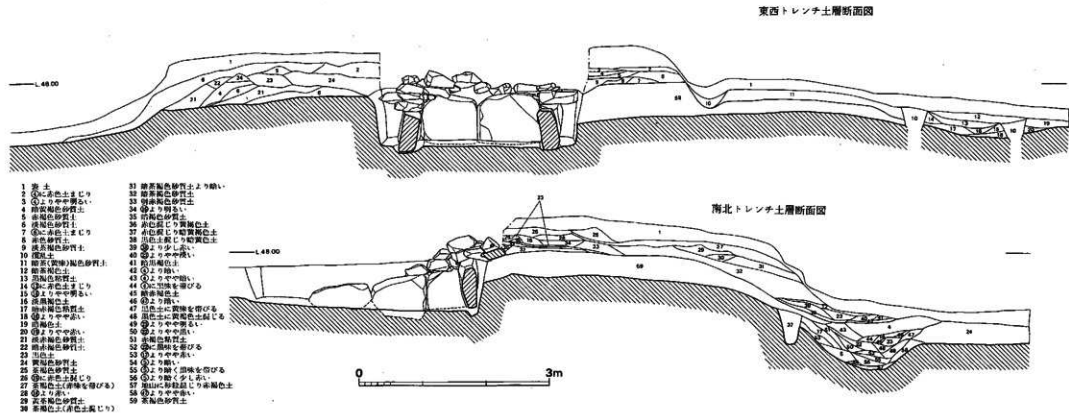


Fig. 63 1号墳頂丘土層断面図 (縮尺1/60)

(f) 横穴式石室

横穴式石室を内部主体とする古墳は1号、3号、4号、5号、6号、7号墳の6基であり、丘陵頂部のものが最も古く、新しくなるにつれて裾部へその占地を変えている。なお7号墳は、小形の横穴式石室であり、興味深い。

唐人塚1号墳

墳丘 (Fig.63, P L., 35)

唐人塚1号墳は、標高48.5mの丘陵頂部に位置する長径12m、短径10mの円墳であり、頂部には、広範囲に盗掘のための陥没がみられた。このように旧状を著しく変じているため、もとの高さは不明であり、封土の残存高は60cmを測るにすぎない。墳丘の築造は旧地表面から開始されており、墳丘東側トレンチでは、石室中心から5mの位置に地山整形の段落ちがありこの位置に土堤状の盛土を行ったのちに、中心に向かって盛土を行なっている。南側トレンチでは、裾部付近の地山面に落ち込みが検出されており、墳丘築造前の遺構が検出された。西トレンチでは石室中心から3.6mの位置に攪乱に伴う段落ちがあるが、この位置は旧地表面を整形した墳丘裾部にあたるものと考えられる。従って、東西径は10mを測るものである。

石室 (Fig.64, P L., 35・36)

内部主体は主軸をN-60°20'5"-Wにとり、ほぼ西北西に開口する単室の横穴式石室である。玄室は右側壁の一部と両方の袖石は現存しないが、石材を据える際の地山面の掘り込み痕より、石室の規模はほぼ復元する事ができた。

石室の形態は長方形を呈しており、幅は奥壁部で2.05m、中央部では1.95mである。長さは左側壁現存長2.5mであり、袖石までの長さは定かではないが石材の抜き跡より推定すると、約2.5m~2.7mであったと思われる。石室の構築に際しては、最下段部は腰石として、幅80cm~100cm、高さ40cm~80cm、厚さ25cmの石材を横長に使用しており、腰石上部には、高さ20cm大のものを横長に積んでいるのが3段階確認された。この腰石を据えるためにそれぞれの石の底面になる部分を15cm~20cm程掘りくぼめているが、これは地山上に10cm程盛土して床面を形成したあとこの盛土面から再び掘り込んであるものである。奥壁は側壁よりも大き目の石材を用いている。石材はすべて花崗岩を用いており、石室内面の腰石部には古式の古墳においてよく見られるように、赤色顔料を全面に塗布している。床面には敷石は施されてなく、地山上に10cm程の土盛りを施し、平坦面をつくって床としている。なお、床面のレベルは玄室内の方が外方よりも若干低い位置にある。

墓室(掘り方)は、幅3.4m、長さは左側は3.85m、右側は3.6mでありその形状は長方形を呈しており、旧地表面より掘り込まれている。この掘り込みの深さは0.8m~1mである。

墓道は検出されなかった。

出土遺物

出土状況

石室は盗掘を受けており、このため石室内からの出土遺物は皆無であった。墳丘の調査時に表採によるものや墳丘からの出土品の須恵器を若干検出した。また、盛土中から鉄斧1個と土師器を検出している。この盛土中からの出土品は、古墳築造時に破壊された遺構に伴うものと思われる。

出土遺物を列記するとつぎの通りである。

(1) 工具	鉄斧	1個
(2) 土器	須恵器	5個体
	壺	1個体
	杯身	1個体
	提瓶	1個体
	甕	2個体
	土師器	2個体
	埴	2個体

鉄斧(本文45頁を参照のこと)

須恵器(Fig.65—1～5)

壺(1)口頸部のみであり、胴部を欠損している。口縁端部内面は段を有しており、頸部と口縁部の境も段がつき、直上部に1条の沈線が入る。口縁部、頸部ともに櫛描波状文が入る。口径は15.6cmである。色調は灰黒色を呈しており、胎土、焼成ともに良好である。墳丘盛土中からの出土品である。

甕(2)口頸部と肩部の一部を残すのみである。口頸部は外反度が著しく、頸部中ほどと、口縁部に突帯を有する。そしてこの突帯間には櫛描波状文を配している。突帯の稜線はややダレている。肩部外面は平行叩きを施しており、内面は同心円叩きの上からナデを施す丁寧なものである。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。墳丘南側の盛土中からの出土品である。

提瓶(3)胴部は直径13.6cmの円形を呈しており、カキ目が入る。背面は中央部を若干くぼませており、静止ヘラ削りと指頭ナデがみられる。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細砂粒を含む。西側斜面からの採集品である。

甕(4)小形甕の口頸部である。口径は14.7cm、口頸部高3.5cmである。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含んでいる。墳丘西側からの出土品である。

杯(5)底部には粘土を貼りつけ、厚みを増している。底部内面はナデを施しており、以外の部分は横ナデ調整を施す。色調は灰色を呈しており、胎土、焼成ともに良好である。

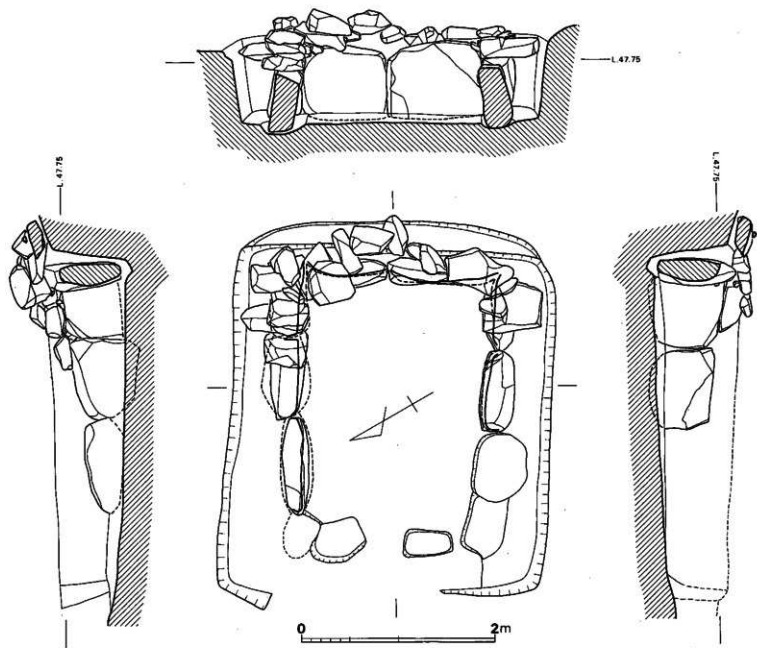


Fig. 64 1号填石室墓断面(縮尺1/40)

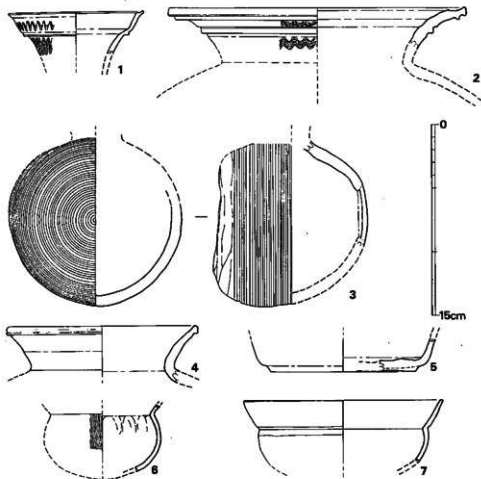


Fig. 65 1号墳出土須恵器・土師器実測図(縮尺1/3)

土師器 (Fig.65—6・7)

埴 (6, 7) 7は1号墳の盛土中から、6は盛土を除去して遺構検出作業を行っている時に出土したものである。6は口縁部と底部を欠いている。胴部外面は刷毛目調整を施しており、内面はナデの際の指頭痕がみられる。胴部最大径は9.2cmである。黄褐色を呈しており、胎土、焼成ともに良好である。7は底部を欠損している。口頸部は大きく開く形態である。頸部と胴部の境部は内面は稜線が入り、外面は凹彎する。内面は横ナデを施し、外面口頸部は横方向のヘラ磨きを施す。胴部については、やや磨減しているために不明である。口径13.6cmである。赤茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細砂粒を含むが良質である。

以上、個々の遺物の説明をしてきたが、竈、2の竈はⅡ期に属するものと思われ、古墳の築造年代を同時期の6世紀前半代に比定できよう。土師器については古墳より先行するものであり、古墳築造前の遺構に伴う遺物と考えられる。

唐人塚 3号墳

墳丘 (Fig.66, P.L. 37)

墳丘は削平されているため、構築状況は不明である。東方の2号墳との境部に設定したトレンチの土層断面から周溝が存在する事が確認された。北、西、南は削られているために不明であるが地形的にみて、周溝は存在しなかったものと考えられる。

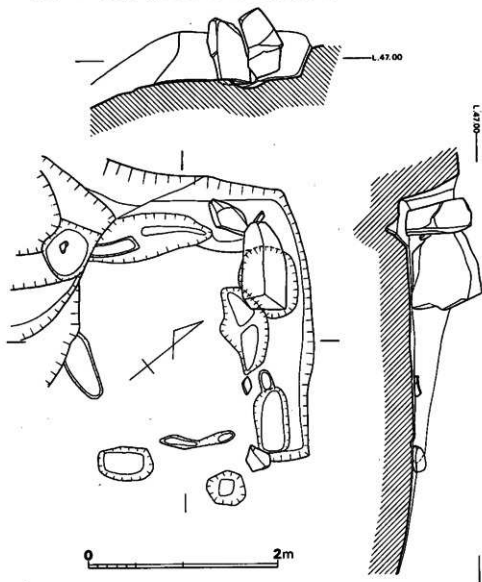


Fig. 67 3号墳石室実測図 (縮尺1/40)

南北トレンチ土層断面図

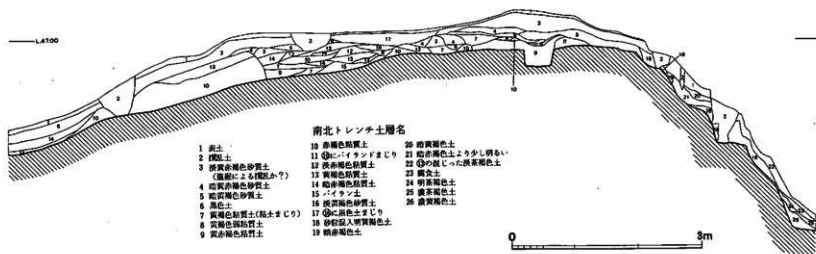


Fig. 66 3号墳墳丘土層断面図 (縮尺1/60)

石室 (Fig.67, P L. 37・38)

主軸はN-38°-Wであり、ほぼ南東に開口する横穴式石室であるが、破壊が著しいため、単室、複室の区別はつかない。

女室は奥壁と右側壁の1石ずつを残すのみであり、詳しくはわからない。ただ、石材の抜き跡から、右側壁は3個の石材を用いていた事がうかがわれた。同じく抜き跡から、石室の規模は、幅約1.7m、長さ2.3m程と思われた。

墓壇は長さ2.9mであり、袖石と考えられる位置で内方へ直角に屈曲する。墓壇底面は水平であり、玄室前面部は下降する。

墓壇が2.9mの位置で内側へ屈曲する事や、石材の抜き跡が玄室部のみに見られる事などから、単室の可能性が高い。

出土遺物

出土状況

石室は大半を破壊されており、石室内からの遺物の出土は須恵器が若干検出されただけであった。墳丘の調査で、盛土中から砥石や、須恵器が出土した。また、東側の周溝からも須恵器が出土している。

出土遺物を列記するとつぎの通りである。

(1) 土器	須恵器	19個体以上
	杯蓋	2個体
	杯身	4個体
	高台付杯	2個体
	甕	3個体
	高杯	3個体
	平瓶	1個体
	甕	4個体
(2) その他	砥石	2個

須恵器 (Fig.68~70, P L. 38)

杯蓋 (1, 2)

I類 (1) 小片であるため口径は不明である。天井部と体部の境に1条の沈線が入る。天井部外面はヘラ削りを施しており、以外は横ナデを施す。墳丘南側からの出土品である。色調は灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

II類 (2) 身受けのかえりを有するものであり、頂部には扁平なつまみがつく。かえりは、わずかに折りまげた程度であり、内面は凹線が入る。頂部内面を除くすべてを横ナデしており、頂部内面のみナデ調整である。墳丘東側からの出土品である。口径は13.6cm、器高は2.1

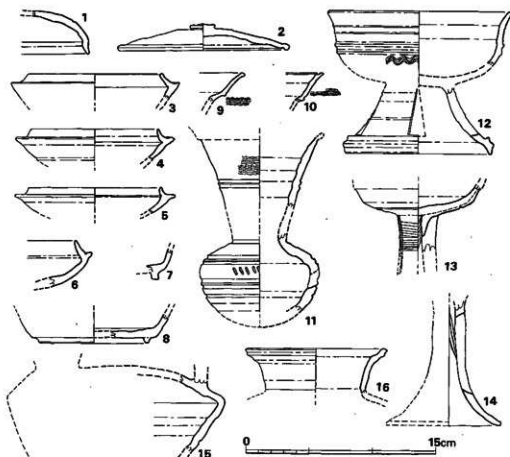


Fig. 68 3号墳出土須恵器実測図その1 (縮尺1/3)

cmである。灰色を呈しており、胎土、焼成ともに良好である。

杯身(3~8)

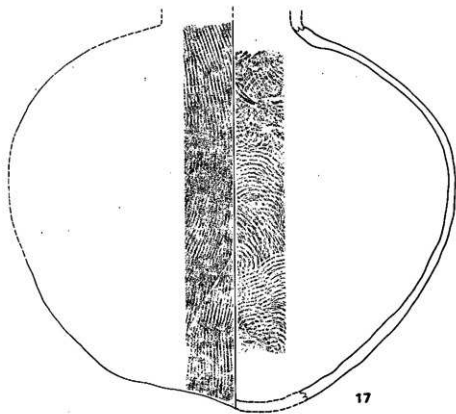
I類(6) 立上りは1.0cmで内傾する。蓋受け基部には1条の沈線が入る。立上りと内傾斜面との境は稜は入らない。灰色で焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

II a類(3, 4) 立上りは0.8cmと短く、内傾する。立上りと内傾斜面との境は鋭い稜線が入る。復元最大径は12.4cm~13.3cmである。灰色を呈しており、焼成は良好である。

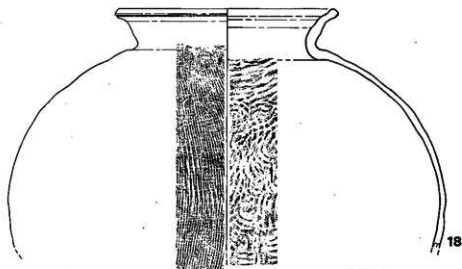
II b類(5) 立上りは0.6cmと短く、直立する。体部を引き出して蓋受けをつくり、立上りを接合する。復元最大径は12.6cmである。灰黒色を呈しており、胎土、焼成は良好である。

III類(7, 8) 低い高台が付く。7の高台底面は平坦であり、8は内側のみが地に着く。灰色を呈しており、胎土、焼成ともに良好である。

匙(9~11) 9、10は口頸部のみである。ともに口縁部と頸部の境は突出し、直上に沈線が



17



18



Fig. 69 3号墳出土須志器実測図その2 (縮尺1/4)

入る。9は口縁端部は平坦面を有するが10は段がつく。11は口頸部を欠いているが9、10とは別個体である。胴部には沈線が入り、沈線間には刺突文が入る。頸部中央部にも沈線が入り、上部には波状文が入る。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。

高杯(12~14) 12は杯部と脚部の一部をととも欠いており接合されなかった。口縁部は外彎しており、端部は丸い。体部には小突帯が入り、底部近くには波状文が入って装飾を添える。脚部には1段4カ所に台形状の透しが入る。色調は暗小豆色を呈しており、焼成は良好である。胎土には微砂粒を含むが良好である。

13は長脚2段透しと思われる。脚柱内面はしぼり痕が著しい。色調は灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

14は1段透しが2カ所に入る。脚柱は単に丸くおさめているだけである。脚柱内面にはしぼり痕が著しい。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。墳丘中からの出土品である。

平瓶(15) 胴部周辺をわずかに残すのみである。肩部との境は角張っている。肩部には本来把手がつくが破損されてわずかに痕跡が残るのみである。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含んでいる。

甕(16~19) 16は小形甕の口頸部であり、口径は11.2cmである。口縁部は短く外反しており、端部は平坦面を有する。色調は灰黒色を呈しており、焼成、胎土はともに良好である。

17は口頸部のみを欠く。底部は若干ゆがみを生じている。外面は平行叩きの上からカキ目を施しており、内面は同心円叩きを施す。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。

18は胴部下半部を欠損する。口頸部は短く外反しており、口縁端部側面には1条の沈線が入る。口頸部に比して胴部は叩きしめにより一様に薄手造りであ

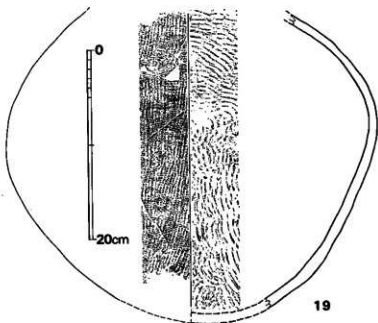


Fig. 70 3号墳出土須恵器実測図その3(縮尺1/4)

る。外面には平行叩きが、内面には同心円叩きが入る。口径は23.4cm、胴部最大径は46.0cmである。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

19は口頸部を欠損している。胴部最大径はやや上方に位置する。外面は平行叩きの上からカキ目を施しており、内面は同心円叩きである。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。ともに周溝からの出土品である。

以上個々の土器の説明をしてきたが、その時期について述べる。杯蓋Ⅰ類はⅢB期、Ⅲ類はⅤ期に、杯身のⅠ類はⅢB期、Ⅱ類はⅣ期、Ⅲ類はⅤ期に属すると思われる。遽はⅢB期に属している。12の高杯は5世紀後半に属すると思われ、唐人塚の須恵器のうちでは最も古いものである。3号墳の内部主体は破壊がひどいため詳しくはわからないが、この高杯を副葬した時期を古墳の築造手代と考えると、6世紀後半までには1世紀の空白が須恵器で見られるため、この高杯を古墳に伴うものとするには無理があるように思える。

唐人塚 4号墳

墳丘 (Fig.71・72, P.L. 39)

墳丘は削平されているため盛土の状況は不明である。表土層を取り除くと直下は地山であり、周溝が検出された。周溝は幅2m~2.3mで深さ1mを測る。周溝から見た墳丘の規模は直径20mであり、東側は傾斜しているため周溝は一部分存在しない。

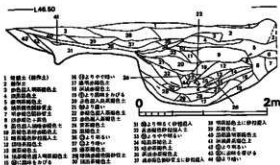


Fig. 72 4号墳周溝土層断面図 (縮尺1/60)

石室 (Fig.71・73, P.L. 40・41)

複室の横穴式石室であり、主軸はN-9°40'-Wで、ほぼ南に開口している。

石室は著しく破壊されており、石材もほとんどが持ち去られて、敷石と羨道部を残すのみである。敷石の残存状況や、石材の抜き跡から判断すると、玄室は幅1.9m、長さ2.8m、前室は1.3mで奥壁からは6mの位置となる。

床面には10cm前後の埋め土を行なったのち敷石を施している。敷石は奥壁から1.9mの位置までは20cm~30cm大の大きな目目の石材を用いるが、前室寄りには10cm~20cm大の小さな目目の石材を用いている。前室は20cm~30cm大の大きな目目の石材を敷石としている。敷石の並べ方を見ると、玄室では主軸に対して長辺が平行となるのが大勢であり、前室では主軸に対して長辺が直角方向となるものが多い。

羨道部は左壁は1.35m、右壁は1.0m程確認された。従って石室全長は6.2mである。

墓道は長さ3.5m程地山を掘り割ってつくられている。

石室の掘り方は石室の平面形に沿った長方形を呈しており、裏込めにあたる空間部は充分の広さを有している。深さは1m程である。

出土遺物

出土状況

石室は盗掘のため著しく破壊されていた。石室埋土中から須恵器若干と土師器が検出された。床面もしくは床面近くからは耳環4個、刀子、鉄鏝が検出された。羨道部埋土中からは、盗掘時のかき出しによるものと思われる耳環が1個検出された。墓道内、もしくは墓道前面部からは、石室内からのかき出しによるものと思われる鉄鏝、道具、刀子が検出された。墓道前面の周溝からは多数の須恵器を検出しており、周溝堆積土中からは墳丘中に供献していたものと思われる須恵器が検出された。

出土遺物を列記するとつぎの通りである。

- (1) 武器 鉄鏝 10本以上

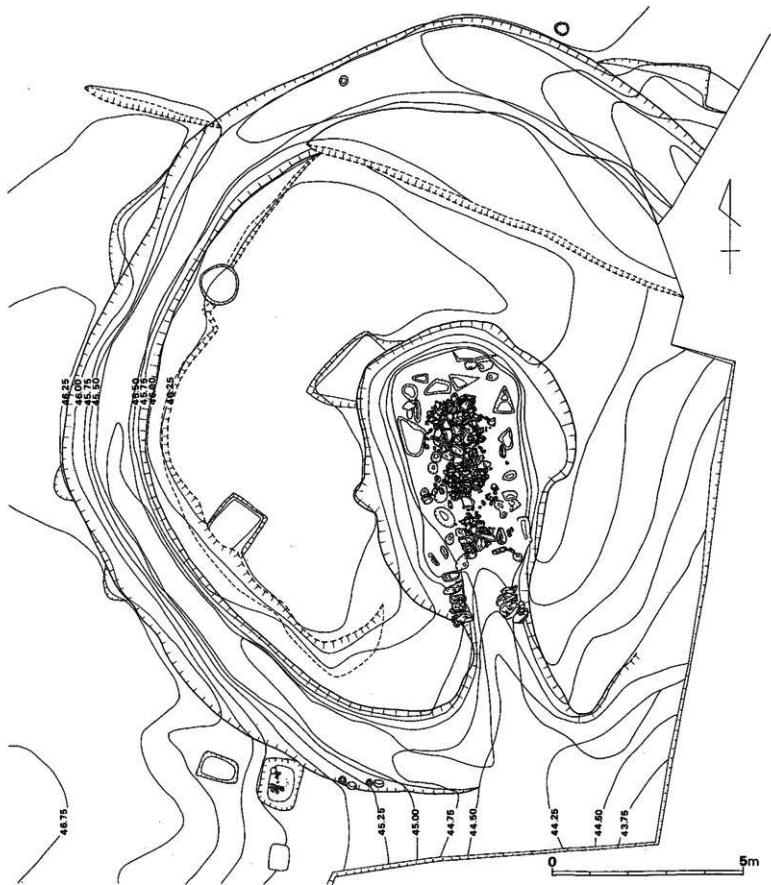


Fig. 71 4号墳石室と周溝平面図 (縮尺1/100)

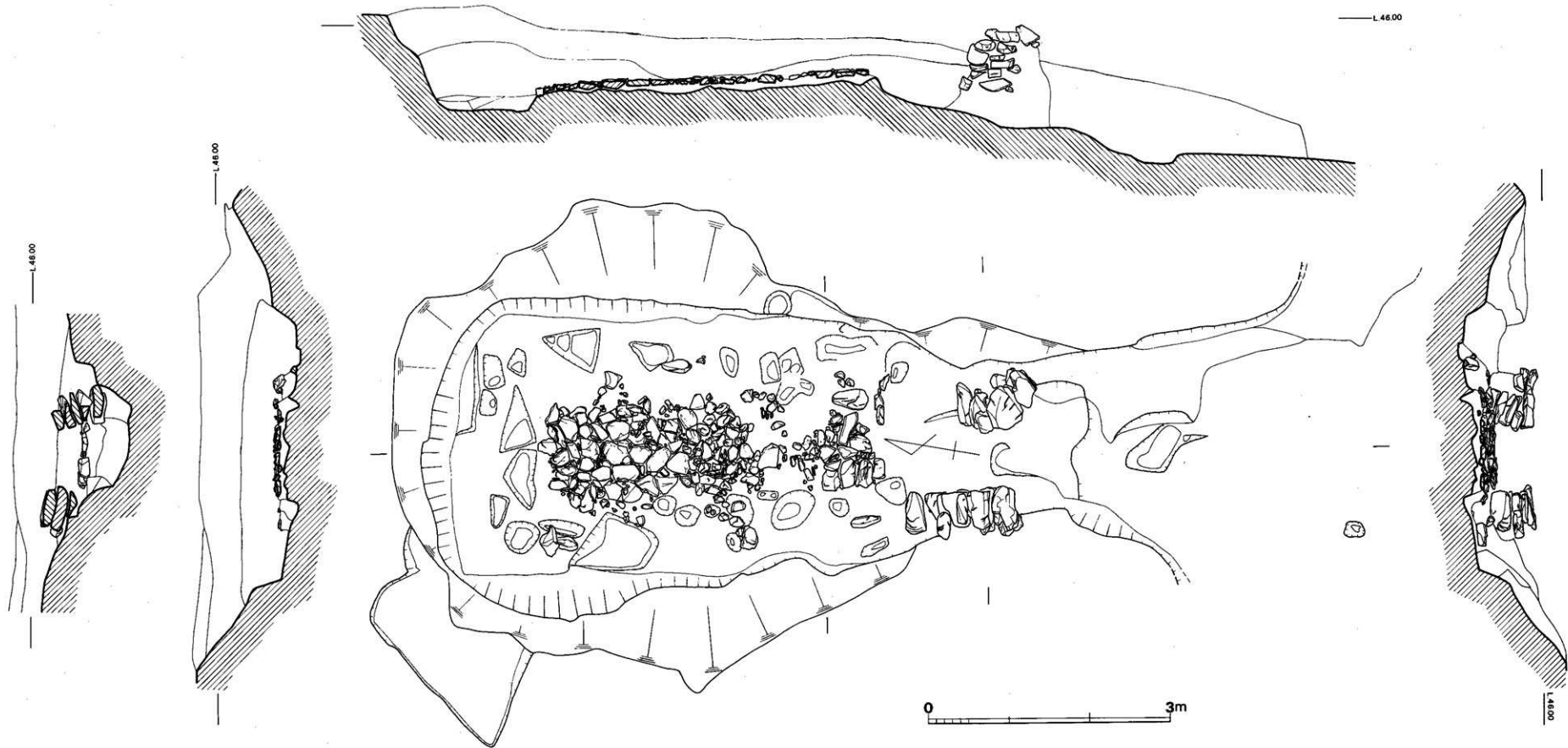


Fig. 73 4号横石室実測図 (縮尺1/40)

		鉄 鉢	1 本
		鐙	1 個
(2) 工 具		刀 子	6 本
(3) 馬 具		鉸 具	1 個
(4) 装身具		耳 環	5 個
(5) 土 器	須恵器		116個体以上
		杯 身	43個体以上
		杯 蓋	33個体以上
		皿	4 個体以上
		甌	5 個体
		有蓋高杯	8 個体
		有蓋高杯蓋	3 個体
		無蓋高杯	6 個体
		提 瓶	3 個体
		平 瓶	1 個体
		直口壺	1 個体
		短頸壺	2 個体
		甕	7 個体
	土師器		9 個体
		甌	1 個体
		高 杯	1 個体
		杯	3 個体
		皿	1 個体
		鉢	1 個体
		甕	2 個体

鉄鍔 (Fig.74-8~24, P L. 42)

8は広鋒片丸造三角形式である。現在長63mm、鋒幅28mmである。9、10も8と同一種と思われる。

11は広鋒平造三角形式であり、鋒の先端部を欠損している。

12は主頭広根斧箭式である。鋒長53.5mm、鋒幅22mmである。茎はわずかに遺存しており、断面は長方形を呈する。

13~17は片丸造鑿箭式であり、鋒長は27mm~40mmと幅がある。

18~24は莖と茎の部分である。莖と茎の境部の形には19のように莖から直角に幅を減じて茎

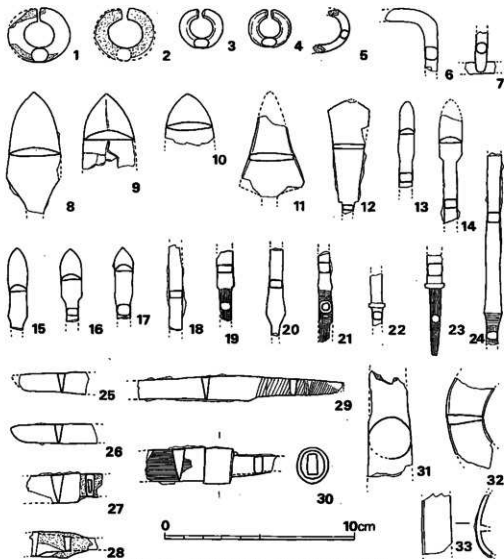


Fig. 74 4号墳出土耳環・鉄器実測図(縮尺1/2)

になるものと、20のように筥が外方へひろがって斜めに切りこまれて幅を減じて基になるもの、22、23のように、棘鋸波ぎを有するもの3種がみられる。

刀子 (Fig.74—25~29, P L. 42) 25、26は身の鋒部分であり、27、28は身と茎の境部であり、29は身の鋒部分を欠く。25は身幅10mm、身厚4mm、26は身幅10.2mm、身厚4.0mmであり、29の鋒部分として大きさは相応するが接合しなかったため別図とした。27は両関造りであり、茎断面は中空である。茎部に鹿角の遺存がみられる。28は茎部分に鹿角が遺存しており、鹿角装刀子であった事がわかる。29は刃部の方がくびれる片関造りである。茎部分には柄着装時の

痕跡が遺存している。莖長46mm、莖幅9mmである。

短刀 (Fig.74—30, P L. 42) 身の基部と莖を若干遺存するのみである。身幅17mm、身厚7mmである。境部には鍔止金具があり幅は19mm、厚さ16.5mmである。身の部分には木質が遺存している。

鐔 (Fig.74—32, P L. 42) 無窓である。全長は不明である。厚さは外縁5.2mm、内縁は1.8mmである。石室内埋土中からの出土品である。

縁金具 (Fig.74—33, P L. 42) 幅15mm、厚さ2mmであり大刀の縁金具であるがその全容は不明である。

鉄矛 (Fig.74—31, P L. 42) 身の部分をわずかに残すのみである。断面は円形であり、径は22mmを測る。図の上方部は先端に近い部分と思われ、その幅を減している。

鉸金 (Fig.74—6・7, P L. 42) 6・7は同一個体であるが、図上復元できないので別図とした。

耳環 (Fig.74—1～5, P L. 42) 全部で5個体検出されており、3と4は対になる可能性がある。1は銀環であり、腐蝕により銅地が一部出ている。径は32.8mm×29mmで断面は8.5mm×8mmの円形に近い形である。石室床面からの出土である。2は狭道部入口床面から出土した。腐蝕が著しく種類は不明である。径31mm×28mmで断面は8mm×7mmである。3、4は金環である、3は狭道部埋土中から出土した。径は23mm×20.8mmで断面は8mm×5.2mmである。4は径22mm×20mmで断面は8mm×5mmである。石室床面から出土した。5は銀環であり、石室内の床面から浮いた状態で出土した。断面は方形に近い形を呈する。

須恵器 (Fig.75—83, P L. 43—48)

杯蓋 (1—33) 口径と器高、身受けかえりの有無により次のI～IV類に大別され、それぞれは細部の形態によりさらに小分類される。

I a類 (1) 口径14.6cm、器高4.0cmである。口縁端部内面に沈線が入り、古式の名残りをとどめている。天井部はヘラ削りを施しており、この部分の内面はナデ調整である。以外の部分は横ナデ調整を施している。明灰色であり、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。墓道からの出土品である。

I b類 (2) 口径は14.0cmであり、天井部と体部の境はやや角張っている。口縁端部は単に丸くおさめているだけである。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含んでいる。

I c類 (3—5) 口径は13.3cm～13.6cm、器高は4.2cm～4.5cmであり、口径はひとまわり小形となる。天井部から体部への移行は丸味をもちなめらかである。天井部はヘラ削りを施している。胎土にはいずれも砂粒を多く含んでおり、焼成は良好であるが、3は焼成が悪い。いずれも墓道からの出土品である。

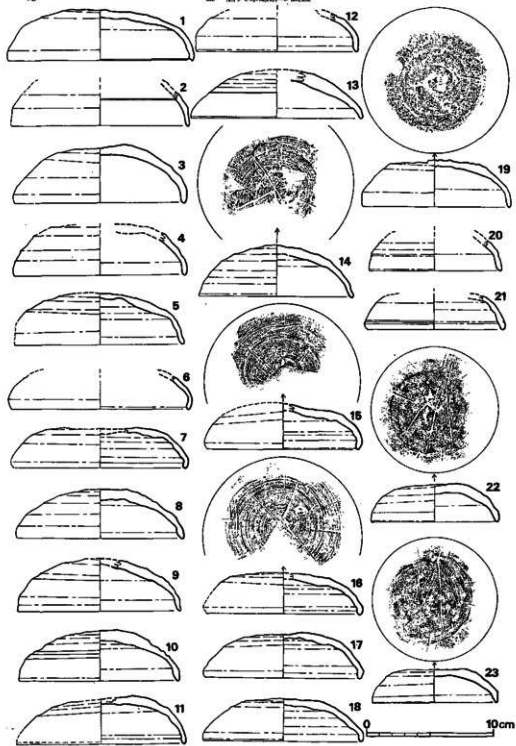


Fig. 75 4号墳出土須恵器実測図その1 (縮尺1/3)

I d 類 (6・7) 口径13.6cm~14.2cm, 器高3.2cmであり、器高が低くなる。口縁部は内傾しており、屈曲面には稜線が入るものと、入らないものがある。天井部の調整はヘラ削りである。灰色ないし灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を少量含んでいる。墓道からの出土品である。

I e 類 (8~13) 口径12.7cm~13.6cm, 器高3.8cm~4.1cmである。全体の形態はI c 類と類似しているが、これよりも、口径・器高ともに小形である。天井部は器壁が厚く、8、11は頂部内面に同心円叩き目がみられる。天井部外面はいずれもヘラ削りを施している。灰色ないし明灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土にはいずれも砂粒を含んでいる。

II a 類 (14) 口径13.2cm, 器高4.1cmであり、小形となる。天井部はヘラ削りを施しており、この部分にヘラ記号を有する。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土に砂粒を含む。

II b 類 (15~18) 口径11.7cm~12.6cm, 器高3.3cm~3.5cmである。口縁部はやや内傾する。天井部の調整法はヘラ削りである。15、16は天井部外面にヘラ記号を有する。いずれも墓道からの出土品である。灰色もしくは灰黒色を呈しており、焼成はいずれも良好である。胎土にはいずれも砂粒もしくは小砂粒を含んでいる。

II c 類 (19) 口径11.4cm, 器高3.7cmである。天井部は未調整であり、ヘラ記号を有する。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでおり、器表は粗雑である。墓道部からの出土品である。

II d 類 (20・21) 口径10.4cm~10.6cmと小形品である。20は天井部と体部の境がわずかにくぼみ、21は口縁部外面に浅い沈線が入る。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。墓道からの出土品である。

II e 類 (22~24) 口径9.7cm~10.3cm, 器高2.5cm~3.1cmと最も小形となる。天井部はヘラ削りを施しており、平坦となる。いずれも同一のヘラ記号を有している。灰黒色ないし暗小豆色を呈しており、焼成は23は良いが、あとは不良である。胎土にはいずれも砂粒を含んでいる。

III a 類 (25~27) 蓋に身受けのかえりをもち頂部につまみを有するものであり、口径8.3cm~8.5cm, 器高3.9cm~4.2cmである。身受けのかえりは0.6cmであり、内傾する。天井部はヘラ削りを施してあり、つまみ周辺は横ナデである。はりつけによる乳頭状のつまみがつく。焼成は良好であり、胎土に細砂粒を含んでいる。

III b 類 (28~30) 口径8.6cm, 器高3.0cm~3.5cmであり、III a 類に比して器高が低くなる。身受けのかえりの断面は三角形に近い形状をしており、異なる。かえりは0.5cmである。天井部はヘラ削りを施している。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含んでいる。

N 類 (32, 33) 身受けのかえりは体部からわずかに折りまげられた形態のものである。32は

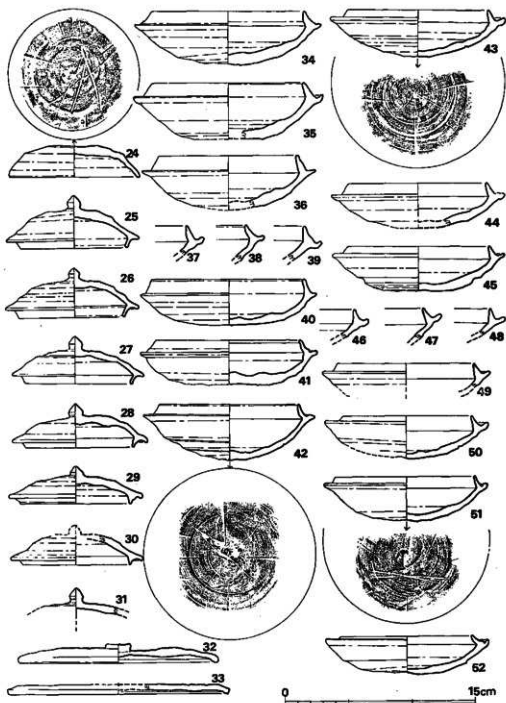


Fig. 76 4号墳出土須恵器実測図その2 (縮尺1/3)

口径15.8cm、器高1.5cmであり、扁平なつまみがつく。33は口径17.4cmであり、つまみを欠損している。灰色を呈しており、焼成は良好である。32は胎土良好であるが、33は砂粒を含んでいる。石室内埋土中からの出土品である。

杯身 (34~73)

I a 類 (34) 立上りは1.0cmであり、内面は直立気味となる。蓋受け部は短く、立上り基部には沈線が入る。底部はヘラ削りを施しており、丸味をもつ。全体に厚手造りである。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。墓道からの出土品である。蓋受け部径14.6cm、器高4.3cmの大形品である。

I b 類 (35) 立上りは1.2cmであり、内傾する。底部は平坦面を有しており、この部分はヘラ削りを施す。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を多く含む器表は粗雑である。蓋受け部径15.0cm、器高4.5cmである。

I c 類 (36) 立上りは1.2cmであり、内傾する点はI b 類と同じだが、小形となる。蓋受け部最大径は13.8cm、器高は4.3cmである。底部の調整法はヘラ削りである。明灰色を呈しており、焼成はやや不良である。胎土には砂粒を含んでいる。

I d 類 (40) 立上りは1.0cmであり、わずかに内傾する。蓋受け部最大径は13.9cm、器高3.6cmであり、扁平な形態である。ヘラ削りは広範囲に及んでおり、全体のつぎに及ぶ。墓道からの出土品である。灰褐色を呈しており、焼成は不良である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。

I e 類 (41) 大きさと全体の形はI d 類と類似するが、立上りの形態が異なるので分類した。立上りは1.0cmで内傾し、立上り端部近くの内面はわずかに段がつく。底部はヘラ削りを施しているが、中央部は凹んでいるためヘラ削りは施されておらず未調整である。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含んでいる。

II a 類 (42) 立上りは0.9cmと短く、内傾する。蓋受け部最大径13.6cm、器高4.4cmであり、器高が高く、底部は丸味をもつ。底部は広範囲をヘラ削りしており、以外は横ナゲとナゲ調整である。底部外面にヘラ記号を有する。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。

II b 類 (43~50) 立上りは0.7cm~0.8cmのものである。蓋受け部最大径は13.2cm~13.8cm、器高3.4cm~3.8cmである。立上りは内傾するが、その傾きはゆるやかである。立上りと内傾斜面との境には稜線が入る。43は底部外面にヘラ記号を有している。いずれも焼成は良好であり、胎土に砂粒を含む。

II c 類 (51) 立上りは0.7cmで短く、細い。底部外面はヘラ削りを施しており、ヘラ記号を有する。蓋受け部最大径13.0cm、器高3.5cmである。灰色を呈しており、焼成良好である。胎土に砂粒を含む。

II d 類 (52) 立上りは0.5cmであり、著しく内傾する。蓋受け部にはえぐりの深い沈線が入

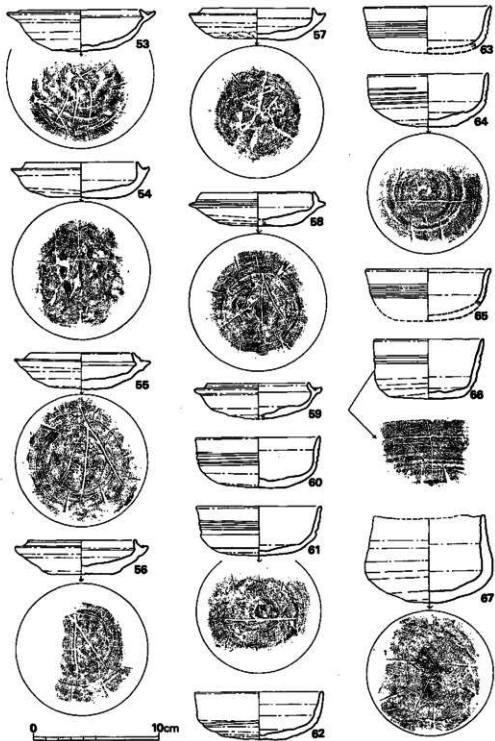


Fig. 77 4号墳出土須恵器実測図その3 (縮尺1/3)

る。蓋受け部最大径12.6cm、器高3.0cmであり扁平である。底部はヘラ削りを施している。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。石室内埋土中から出土した。

Ⅱ e 類 (53) 立上りは0.4cmと短く、蓋受け部水平面よりは0.2cm出るだけである。蓋受け部最大径は11.8cm、器高3.3cmである。底部外面はヘラ削りを施しており、ヘラ記号を有する。小豆色を呈しており、焼成は不良である。胎土には砂粒を含む。墓道からの出土品である。

Ⅱ f 類 (54~58) 立上りは0.5cm~0.7cmと短い断面は太い。立上りは内傾するものと、直立するものがある。蓋受け部最大径10.6cm~11.0cm、器高2.7cm~2.9cmと小形品である。いずれも底部は平坦面を有しており、調整法は回転ヘラ削りと静止ヘラ削りの両方が見られる。54~58は底部外面に同一のヘラ記号を有する。色調はいずれも小豆色を呈しており、焼成はやや不良である。カマド構造の相違か。胎土には砂粒を含んでいる。

Ⅱ g 類 (59) 立上りは0.5cmと短く、内傾するが中ほどから立つ。蓋受け部最大径10.2cm、器高2.9cmと小形である。底部はヘラ削りを施しており、やや丸味をもつ。明灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細砂粒を含む。石室埋土中からの出土品である。

Ⅲ 類 (60~67) 身に蓋受けのかえりをもたないものであり、形態の差異により a~c 類に細分される。

Ⅲ a 類 (60~65) 口径9.4cm~10.1cm、器高3.8cm~4.2cmである。体部には3条から4条の沈線が入り、口縁部はわずかに外反する。底部外面は未調整もしくはナデを施している。61・64は底部外面にヘラ記号を有している。灰色ないし灰黒色を呈しており、焼成は良好であるが62は焼成不良である。胎土にはいずれも砂粒を含んでいる。墓道と、石室埋土中からの出土である。

Ⅲ b 類 (66) 口径8.6cm、器高4.8cmであり体部には2条の平行沈線が入る。Ⅲ a 類に比して口径は小さいが器高が高く、底部は平坦面を有する。底部外面はヘラ削りを施しており、中央部のみ未調整である。体部外面にヘラ記号を有する。明灰色を呈しており、焼成は不良である。胎土には砂粒を含む。

Ⅲ c 類 (67) 口径8.8cm、器高6.9cmであり、体部は内傾する。底部は静止ヘラ削りを施しており、ヘラ記号を有している。焼成時のひずみが著しい。灰黒色を呈しており、胎土に砂粒を含む。墓道からの出土品である。

Ⅳ 類 (68~72) 高台付杯である。68の高台は長く、外方へひろがる形態である。69は高台が短く、内方のみが地につくものである。体部は直線的に外反する。71は高台は細味で短く、外方へ開く。高台部径は9.7cmである。杯部は深く外反する。72は丈の短い高台を有しており、外方のみが地につく形態である。杯体部外面は横ナデによる凹凸が著しく、外反する。68、69は墓道からの出土品であり、70~72は石室埋土中からの出土品である。灰色もしくは灰黒色を

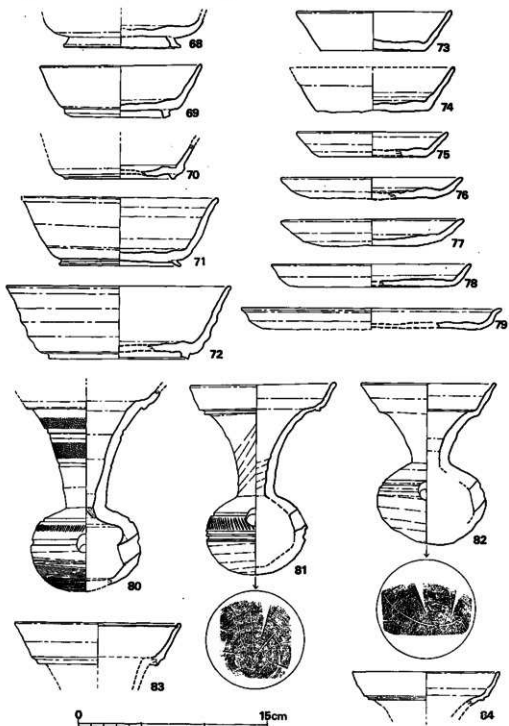


Fig. 78 4号墳出土須恵器実測図その4 (縮尺1/3)

2 調査の内容

69

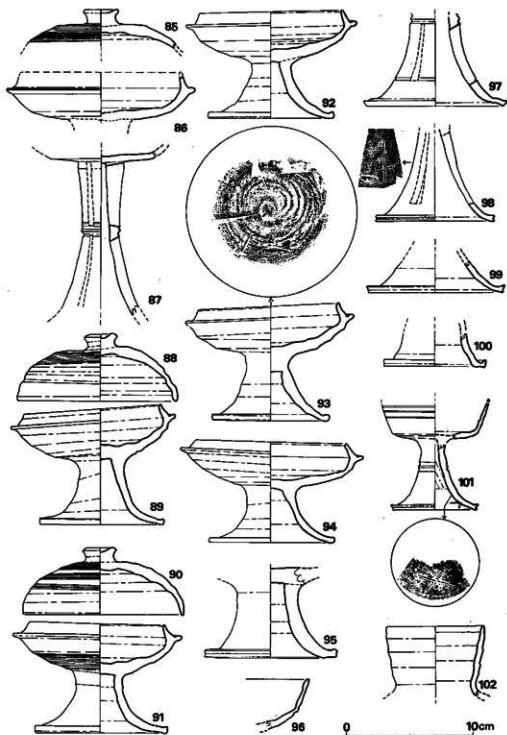


Fig. 79 4号出土須恵器実測図その5 (縮尺1/3)

呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を若干含んでいる。

V類(73, 74) 高台のつかない杯である。底部はヘラ切り後未調整であり、粘土紐の巻きあげが見られる。73は口径12.3cm、器高3.1cm、74は口径13.1cm、器高3.6cmであり、73よりひとまわり大きい。

Ⅲ(75~79) 口径に比して器高の低いものを皿としたが75の形態は杯にも似ている。口径は12.0cm~20.5cmと幅があるが、器高は1.7cm~2.0cmである。底部はいずれもヘラ切り未調整であり、体部は外反度が著しい。79は口縁部は短く外反する。胎土はいずれも細砂粒を含んでいる。

Ⅳ(80~84) 口頸部のみのものを含めて5個体出土している。大きさには大・中・小の3種類あり83は大形品に、84は中形品に含まれる。80は胴部中央と、やや上方に沈線が入り、この間には櫛状器具による刺突文が入る。底部はヘラ削り調整後カキ目を施すという丁寧なものである。頸基部は細くすぼまっており、口縁部は段を有して外反して口径を広げている。裾部には2カ所に沈線を配して3区にわけ、上方2区には波状文が入る。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。墓道からの出土品である。83は口縁端部内面に沈線を有しており、頸部との境は段を有する。口径13.0cm。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を少量ふくんでいる。墓道からの出土品である。81は口径11.5cm、胴部径8.0cm、器高15.4cmである。胴部中央に2条、やや上方に1条の沈線を配し、この間に櫛状器具による刺突文が入る。中央部の沈線下はすべてヘラ削りを施しており、底部にヘラ記号を有する。頸部はしぼり痕が内外面ともにみられるが沈線は入らない。口縁部と頸部の境は段を有し、沈線が入る。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。84は81と同じく、中形品であり、口縁部と頸部の境は段をなし、沈線を配している。口径11.6cmである。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を少量含んでいる。墓道からの出土品である。82は小形品である。口径は10.5cm、胴部最大径8.6cm、器高12.8cmである。胴部中央部に沈線を配しており、ここでは刺突文は入らない。中央部以下はヘラ削りを施しており、底部にヘラ記号を有する。口径部は短くなっており、頸部と口縁部の境は段を有するが沈線は入らない。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を若干含むが良質である。

高杯(85~101) 有蓋高杯と無蓋高杯が出土している。

有蓋高杯(85~95) 形態の相違によりI、II類に分類される。

I類(85~87) 蓋受け部径15.0cmと大形品であり、脚部は長脚2段透しのものである。85は86の蓋と思われ、頂部をおさえたと扁平なつまみがつき、頂部周辺はヘラ削りのあと目の細いカキ目を施している。87は脚中央部に2条の沈線を配して2段にわけ長方形の透しが3カ所に入る。色調は85・86は灰色、87は灰黒色を呈しており、焼成はともに良好である。85・86は胎土

に小砂粒を含むが、87は良好である。

Ⅱ類 (88~95) 短脚有蓋高杯であり、透しは入らない。

Ⅱa類 (88~94) 88は89の蓋、90は91の蓋である。蓋は口径12.5cm~12.6cm、器高5.3cm~5.4cmとほとんど同大であり、頂部をおさえた扁平なつまみがつく。頂部周辺はヘラ削りを施しており、さらにカキ目を施すという丁寧なものである。ともに頂部内面には同心円叩き目が入り、ナデで消そうとしている。89、91~94は蓋受け部最大径13.1cm~13.5cm、器高8.6cm~9.4cmである。立上りはともに1.0cmであり、基部には沈線が入る。杯部の底部外面はヘラ削りを施しており、91はこの部分にさらにカキ目を施している。91、92は杯部の底部内面に同心円叩き目がみられ、この部分をナデで消そうとしている。以外の部分は横ナデ調整を施している。色調は91は灰色を、以外は灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。墓道と周溝から出土した。

Ⅱb類 (95) 脚部のみであり、器壁は厚く、脚端部をわずかにね上げる。脚部径は10.5cmである。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土は良好。

無蓋高杯 (96~101) 透しの入るものをⅢ類、透しの入らないものをⅣ類とする。

Ⅲ類 (97, 98) 97は2段透しの高杯である。脚中央部に沈線を配して2段にわけ、3カ所に透しが入る。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。墓道からの出土品である。98は1段、2段透しの区別がつきにくい、中央部に沈線が入らないことから、1段透しの可能性が高い。脚部外面にヘラ記号を有している。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細砂粒を含んでいる。墓道埋土中からの出土である。

Ⅳ類 (96, 99~101) 杯部の形態で96と101とにさらに2分類できよう。96は底部と体部の境部に2条の沈線を配している。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を少量含んでいる。101は、杯部は体部に3条の平行沈線を配しており、脚部にも2条の沈線が入る。小形品である。脚部内面にヘラ記号を有している。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土に砂粒を若干含む。

提瓶 (102~104) 102は口頸部のみであり、詳しくは判らない。口頸部内外面は横ナデによる凹凸が著しい。口径7.6cmである。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含んでいる。98は大形品である。胴部の一部と口頸部を欠損する。胴部径19.1cmである。背面は平坦面を有する。側面には把手の退化形態の貼付がみられる。全面に櫛によるカキ目が入る。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土は精選されていて良い。墓道前面部からの出土品である。104は口頸部の若干と胴部の一部を欠損する。口縁部は頸部を丸くおりあげただけのものである。胴部側面はあまりふくらみをもたない。胴部前面には被状文が入る。側面には鈎状の把手を有している。口径7cm、器高15.0cmである。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には若干の砂粒を含むが良好である。石室内埋土中からの出土品である。

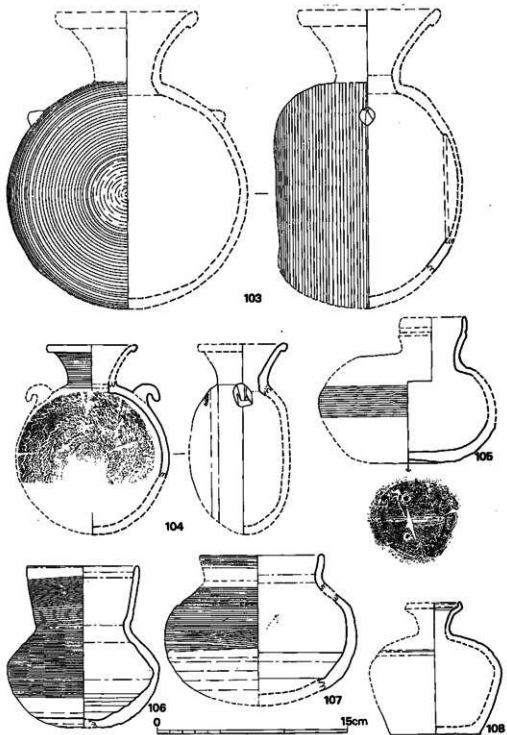


Fig. 80 4号墳出土須恵器実測図その6 (縮尺1/3)

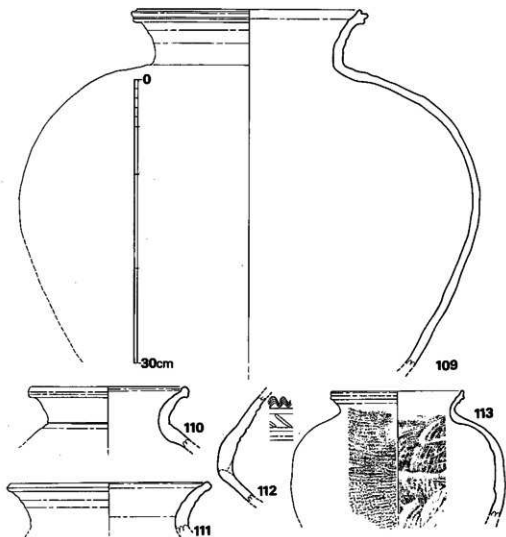


Fig. 81 4号墳出土須恵器実測図その7 (縮尺1/4)

平瓶 (105) 小形品である。頸部には凹線が入る。胴部はカキ目を施してあり、底部は静止ヘラ削りを施す。なお、底部外面にはヘラ記号を有している。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。

直口壺 (106) 口径8.6cm、胴部最大径12.0cm、器高12.8cmである。最大径部は胴部よりやや上方部にあり、若干かど張る。底部はヘラ削りを施しており、以外はカキ目調整をしている。内面は横ナデを施してあり、底部近くでは著しく稜線が入る。色調は上半部は灰色を、下半部は灰黒色を呈している。胎土には砂粒を含んでおり、焼成は良好である。墓道前面部からの出土品である。

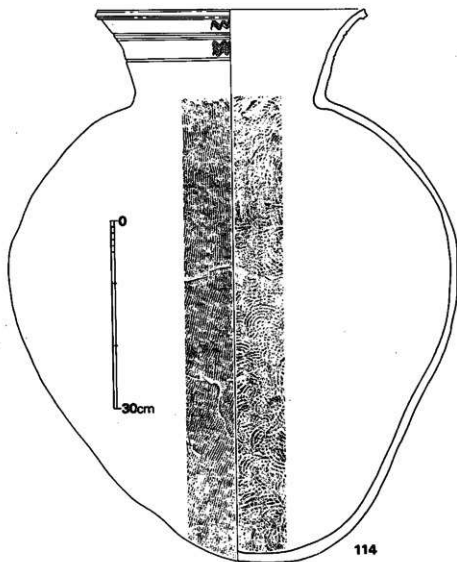


Fig. 82 4号墳出土須恵器実測図その8 (縮尺1/6)

短頸壺(107, 108) 107は口径9.8cm、胴部最大径15.2cmである。頸部は短く外反し、口縁部は丸い。胴部下半部の広範囲にヘラ削りを施しており、上半部は目の細いカキ目が入る。カキ目は口縁部にも及んでいる。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を少量含んでいる。墓道前面部からの出土品である。108は底部は平坦であり、ヘラ切り未調整である。なお粘土紐の巻きあげ痕が明瞭である。口径は4.5cmとせまく、口縁部は短く内傾する。肩部と胴部の境は峻はつかずに、わずかに角張る程度である。口縁部から胴部にかけては横ナ

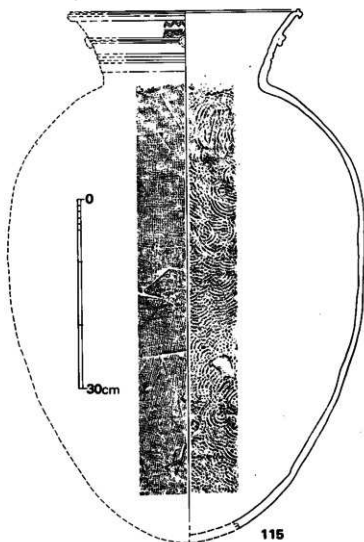


Fig. 83 4号墳出土須臾器実測図その9 (縮尺1/6)

デ調整である。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細砂粒を含むが良好である。

甕 (109~115) 大形、中形、小形の3種がある。

小形甕 (110, 113) 110は口頸部と肩部を一部残すのみである。肩部の傾斜と中形甕とした109よりも口径が小さいため小形と考えた。口頸部は内外面とも横ナデ調整であり、肩部外面は格子風叩きが、内面は同心円叩きが入る。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。113は底部を欠損する。口径は14.0cmであり、口頸部は短く外反する。口縁部には小突帯を配する。胴部外面は平行叩きが入り、内面には弧状叩きが入る。明灰色を呈して

おり、過半部分には灰黒色の自然釉が付いている。胎土には小砂粒を含んでおり、焼成は良好である。

中形甕 (109, 111, 112) 109は口径24.9cm、頸部高6.0cm、胴部最大径48.4cmである。口縁部には突帯と沈線を配している。胴部外面は平行叩きの上からカキ目調整しており、内面は同心円叩きが入る。南側周溝からの出土品である。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。111は口縁端部は平坦である。口径は21.5cmを測る。内外面とも横ナデ調整であり、器壁には凹凸が著しい。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。頸部に若干ヘラ記号がみられるが全容は不明である。南側周溝からの出土である。112は長頸の甕であるが全容は不明である。頸部には沈線を配しており、波状文が入る。肩部外面には平行叩きが、内面は同心円叩きが入る。

大形甕 (114, 115) 114は口径43.2cm、胴部最大径71.4cm、器高87.9cmである。口縁部は突帯を配しており、頸部は2カ所に沈線を配して3区にわけ、上方2区には波状文が入る。胴部最大径は中央部に位置する。胴部外面は平行叩きが、内面は同心円叩きが入る。南側周溝からの出土品である。暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含んでいる。115は口径37.5cm、胴部最大径56.7cm、器高84.3cmであり、やや胴の細いものである。口縁部は突帯を配しており、沈線が入る。頸部には、2カ所にそれぞれ2条の沈線を配して3区においており、上方の沈線の位置には4カ所にボタン状の円形貼付が装飾を添える。胴部外面は平行叩きが、内面には同心円叩きが入る。暗灰色を呈しており、焼成、胎土ともに良好である。

土師器 (Fig.84—116—124, P L, 48)

埴 (116) 口頸部を欠損している。胴部最大径8.5cmと小形である。器表が磨滅しているため調整法は不明である。茶褐色を呈しており、焼成不良である。胎土に砂粒を少量ふくんでいる。

杯 (117) 高台付杯であり、ヘラ切り底である。高台は高さ0.7cmをはかり、径11.6cmである。底部外面には煤が付着している。茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を少量ふくむが良質である。石室埋土中からの出土である。

皿 (118—120) 118はヘラ切り底である。口径は15.6cm、器高1.7cmである。淡茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。石室埋土中から出土した。119, 120は糸切り底である。119は口径11.6cm、器高2.6cmである。120は口径10.8cm、器高2.3cmであり、119よりひとまわり小形である。底部内面には煤が付着している。ともに石室内埋土中から出土した。色調は淡茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含んでいる。

高杯 (121) 高杯の脚部のみである。脚柱部外面はヘラ削りしてあり、脚柱部はヘラ磨きを施す。明茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒少く良好である。

鉢 (122) 口径21.0cm、器高7.2cmである。底部はやや平坦な面を有しつつも丸底である。口

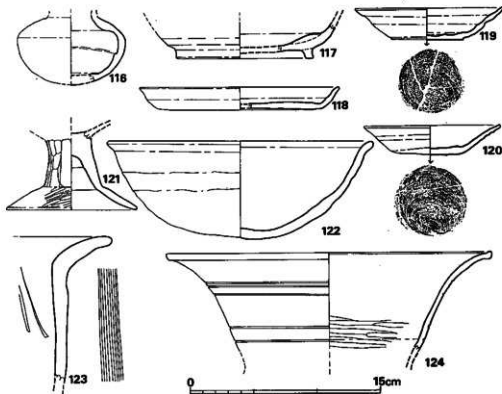


Fig. 84 4号墳出土土器実測図(縮尺1/3)

縁部は短く外反させる。火をうけているため外面は全面に煤が付着している。灰褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含む。

甕(123, 124) 123は口頸部は外反度が著しく、胴部はやや立つ。胴部外面は縦方向に刷毛目が入り、内面はヘラ削りを施している。石室内埋土中からの出土品である。褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。124は口径25.8cmである。全体にうす手造りである。口縁端部内面はややはねている。頸部には沈線を配している。頸部内面下半部はヘラ削りを施しており、以外は横ナデ調整である。石室内埋土中からの出土である。黄褐色を呈しており、焼成は良好である。

以上、個々の土器について述べてきたが、その年代を考えてみる事にする。杯蓋はⅠ～Ⅳ類に分類したが、Ⅰ類はⅢB期に、Ⅱ類はa～cまでⅣA期に、d、eはⅣB期に、Ⅲ類のaはⅣB期にbはⅤ期に、Ⅳ類はⅥ期に比定される。杯身ではⅠ類はⅢB期に、Ⅱ類のa～dはⅣA期に、e～gはⅣB期に、Ⅲ類のaはⅣB期に、bはⅤ期に、Ⅳ、Ⅴ類はⅥ期に比定されよう。従って杯に関してはⅢB→ⅣA→ⅣBへの移行は大形→中形→小形とおきかえてみる事が

できる。このⅣB期の小形の杯身に、乳頭状のつまみをつけて身と蓋を逆転した形がこの時期から行なわれたと考える。即ち杯蓋Ⅲa類と杯身Ⅲa類である。これはⅤ期にもひきつづき行なわれて、杯蓋Ⅲb類と杯身Ⅲb類がそれである。杯蓋Ⅲa類と杯蓋Ⅲb類の相違はⅢa類が器高が高いことと、身受けのかえりが細味で長さは0.6mmであるのに対して、Ⅲb類は器高がやや低くなり、身受けのかえりが断面三角形に近い形をして、長さが0.5cmである事があげられる。杯身に関してはⅢa類に比してⅢb類は口縁が小さくなるが器高は高くなることである。礎は80はⅢB期、81、82はⅣ期に比定され、82は小形であり、口縁部と頸部の境の沈線が消失する事からⅣ期でも新しい時期のものと考えられる。高杯は有蓋高杯の長脚2段透しのものはⅢB期に、透しの入らない有蓋高杯はⅣ期に比定される。101の小形高杯もⅣ期のものと思われる。

さて、古墳の築造年代であるが、石室は破壊されているため、詳しくはわからないが、出土した須恵器から6世紀後半に築造され、7世紀初頭頃まで追葬し、8世紀代に再び埋葬が行なわれている。

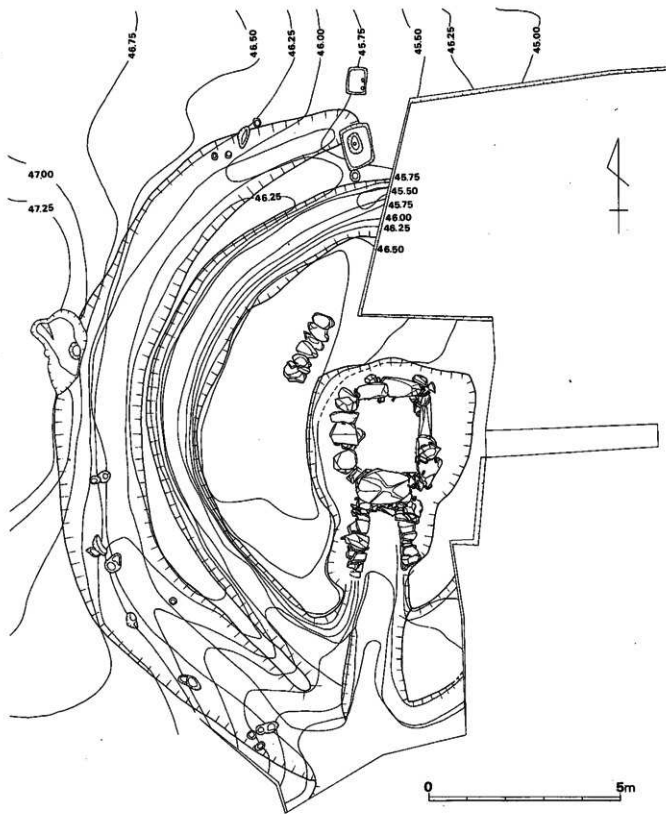


Fig. 85 5号墳石室と周溝実測図 (縮尺1/100)

唐人塚5号墳

墳丘 (Fig.85・86, P L. 49・51)

4号墳の南、1号墳の東南部で、これと墳裾を接するように営まれている直径約14mの円墳である。頂部は削平されているため低平であり、しかも墳丘西側は平坦面をなしていたため、古墳かどうか疑問に思われる様な現状であった。調査に着手してまず、古墳の中央部と思われる箇所にトレンチを設定したところ、石蓋土壌の蓋石を検出した。見かけの中央部よりも古墳の位置はずれていたためトレンチを新に設定して石室の位置を確認した。盛土の状況を見ると墳丘の東側は斜面の低位置にあたるため、墓壙上端部と裾部との比高は1.65mある。盛土は旧地表上から開始されており、内方から外方への小単位の盛土を繰り返している。石室の裏込めは2種類の土砂を主として用いている。西側では2重の周溝がめぐっており、内側のそれは、幅1.2m～1.7m、深さ1m～1.5mで底面は平坦である。外面の周溝は、内側の周溝から10cm～50cmと近距離に位置しているが、北側部のみやや離れて、その距離は100cmを測る。外側の周溝はおおむね2m幅であり、深さは50cmほどで浅い。土層断面から内側の周溝は墳丘築造時には盛土中に覆われてしまうものと思われた。周溝は斜面の高所には存在するが、低所には存在しない。従って、墳丘のほぼ西側半分強に存在したものである。

石室 (Fig.85・87, P L. 49～54)

単室の横穴式石室であり、主軸はN-30°-Eで、ほぼ南に開口している。

玄室は、奥壁側の幅1.85m、玄門側は幅1.65mでありやや奥壁の方が幅が広い。長さは、左側壁は2.15m、右側壁は2.13m、中軸線上で2.1mである。奥壁は墓壙底面をさらに掘りくぼめて2個の大石を縦長く用いて腰石としており、上方に2段程30cm×80cm大の石材をほぼ垂直に横積みし、空間に小石を充填する。現在高は1.3mである。側壁の左側は1m大の石材を腰石として用いており、上方に長さ30cm～90cm、高さ20cm～35cm大の石材を4段程横積みしている。壁面は垂直である。右側も腰石として1m大の石材を2個、底面を掘りくぼめて据えている。

左袖石は、側壁から40cm程、右袖石は53cm程突出させており、袖石間の距離は65cmを測る。ここには幅15cm弱の一石を用いて仕切石としている。左袖石は上方に2個、右袖石は上方に1個石積みをしており、床面からの高さは85cm程である。床面は盗掘により荒らされていたが、敷石が施されていたことが知られた。

閉塞は仕切石の外方袖石直前部になされていた。倒れていた石材から、閉塞の方法は、長さ60cm大の石を立てて、天井部との空間を小石で充填したものと思われた。

羨道部は左側は2.75m、右側は2.45mを測る。左、右壁とも65cm～80cm大の石材を縦長に用い、上方に2～4段程小石を積む。両壁とも一箇所だけ、最下段から小石を積む箇所がある。

墓道は地山を掘削して造られており石室へ向ってやや登り傾斜で4mほどつく。幅は中央部で1.3mであり、断面はU字形を呈する。

石室の墓壇は、石室の平面形に合致した形状を呈しており、羨道部でくびれる。支室内での墓壇の深さは1m～1.6mを測る。墓壇底面には石室構築のさいに腰石を据えるための掘りこみが溝状にめぐっている。

出土遺物

出土状況

石室内墓壇の床面近くの埋土中から、耳環、勾玉、ガラス玉、鉄鏃、須恵器皿が、墓道からは追葬時のかき出しによると思われる耳環、大刀片が、さらには追葬時のものと思われる須恵器が、羨道と墓道から検出された。

出土遺物を列記するとつぎの通りである。

(1) 武器	鉄 鏃	8本
	大刀片	1
(2) 装身具	耳環	4個
	勾玉	1個
	管玉	1個
	小玉	6個
(3) 土器	須恵器	32個体以上
	杯蓋	6個体
	杯身	6個体
	高台付杯	1個体
	皿	2個体
	盤	1個体
	高杯	4個体
	平瓶	2個体
	罎瓶	1個体
	台付短頸壺	1個体
	甕	3個体
	土師器	1個体
	高台付杯	1個体

鉄鏃 (Fig.88—6～13, P L. 55)

6は広鋒片丸造三角形式である。鋒の先端部を欠く。鋒は片丸造りであり鋒幅32mmを測る。

7は変形圭頭斧箭式である。鋒最大幅29mmで両丸造りである。8～13は筥、茎の小片である

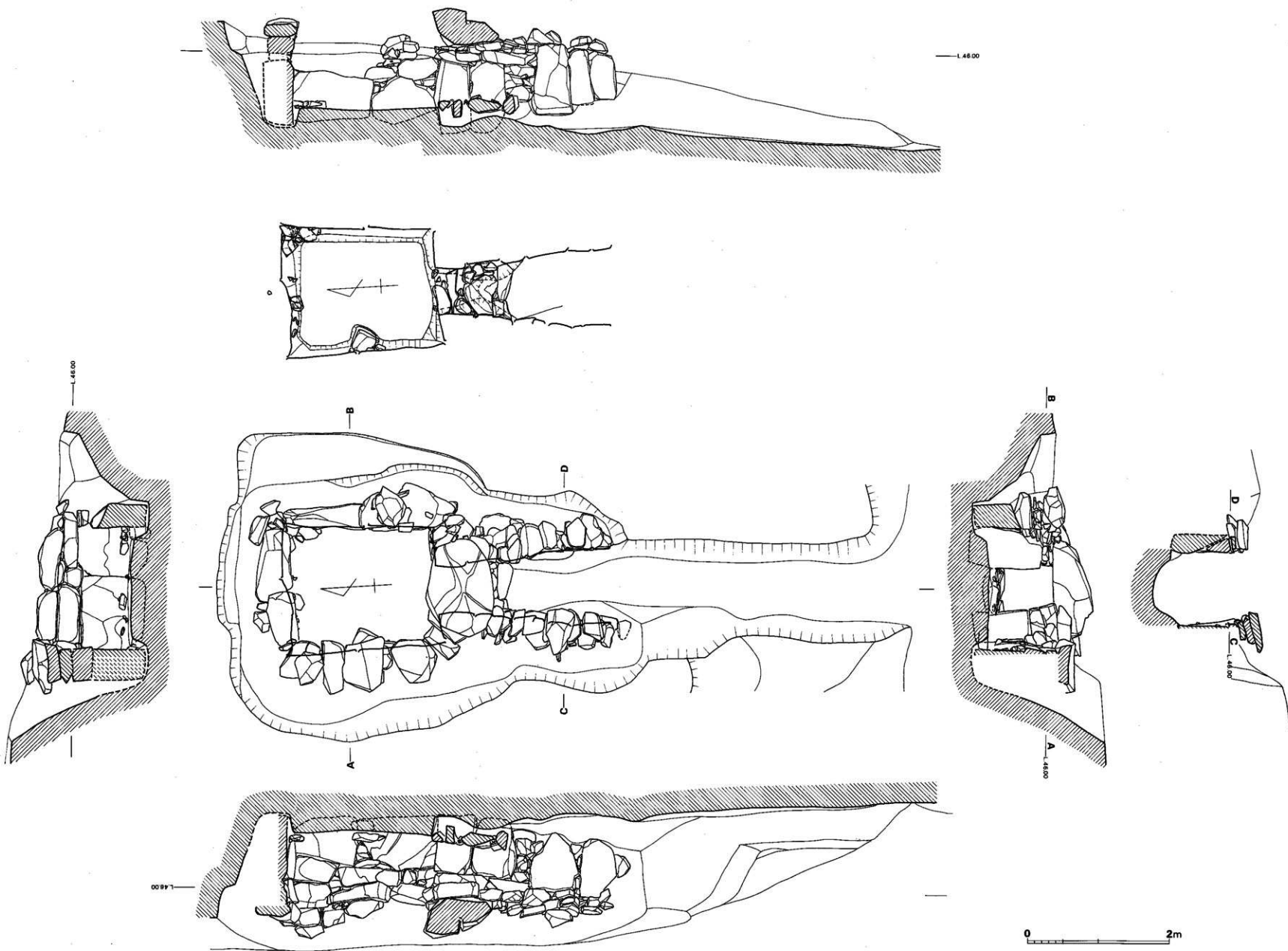


Fig. 87 5号填石室墓平面图 (缩尺1/40)

が11は6.7の型式の筥波ぎにはならない。13は鎌波ぎである。

大刀 (Fig.88-15, P.L. 55) 刃部のみ的小片である。刃部幅18mm、刃部厚5mmである。

不明鉄器 (Fig.88-14) 半分しか残っていないが全長は3cm程度のものである。馬具とともに検出される例があるため、馬具の付属品の一種と思われる。

耳環 (Fig.88-1~4, P.L. 55) 1は銀環であり、棒状のものを曲げて造られ

た純銀製品である。径は22.5mm×21mmで円形を呈しており、断面は2.5mm×2mmである。石室床面からの出土である。2は銀環である。径は29mm×25.5mmの楕円形を呈し、断面は6mm×5mmである。石室埋土中からの出土である。3は金環であるが剥落が著しく銅地が出ている。径は29mm×26mmであり、断面は7.8mm×6.5mmで楕円形を呈している。装道部埋土中からの出土である。4は金環であるが銅地は存在せず金箔のみである。

勾玉 (Fig.88-5, P.L. 55) メノウ製品であり、全長は29mm、厚さ8.5mmである。孔は片側からのみ穿孔されている。石室内埋土中からの出土である。

小玉 (Fig.89, P.L. 55) 1は直径7.8mmで厚さは10.5mmと厚く、管玉に近い形態である。2は青色ガラス玉であり、直径8.8mm、厚さ5.8mmであり、2つの孔を有する。3は青色ガラス玉であり、径8.5mm×7.5mm、厚さ8.5mm。6は青色ガラス玉であり、径5.9mm×6.2mm、厚さ3mm~4mmである。7は青色ガラス玉であり、径5mm×6mm、厚さ3.5mmである。4・5は土製品であり、径6.2mm~6.5mm、厚さ5mmである。5

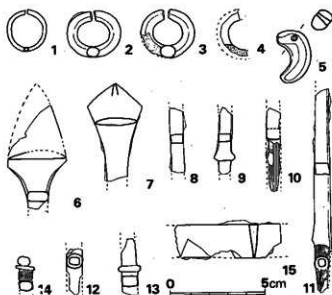


Fig. 88 5号墳出土耳環・勾玉・鉄器類実測図 (縮尺1/2)

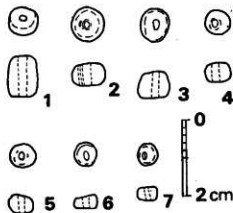


Fig. 89 5号墳出土玉類実測図 (実大)

は孔面に切った痕があり、このことから、棒状のものに玉を連ねて1個ずつ切断して、切断面をみがいて丸くしたものと考えられる。

須恵器 (Fig.90~92, P L. 56・57)

杯蓋 (1~6)

口径の大きさ身受けかえりの有無によりⅠ~Ⅲ類に分類できる。

Ⅰ類 (1・2) 口径は14cm~14.5cmと大形品である。器高は3.8cmであり、やや扁平な形態である。天井部は回転ヘラ削りを施しており、以外は横ナデとナデ調整である。墓道の黒色土下層からの出土品である。色調は灰色を呈しており、胎土、焼成は良好である。

Ⅱa類 (3) 口径は10.5cmと小形品である。器高は3.0cmを測る。天井部は未調整であり、頂部内面はナデを施す。以外の部分は横ナデ調整である。墓道の黒色土上層からの出土品である。天井部外面にヘラ記号を有する。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。

Ⅱb類 (4) 口径は9.5cmとⅡa類に比してひとまわり小形品である。器高は3.4cmあり、Ⅱa類より高い。天井部外面は未調整であり、頂部内面はナデ調整である。その他の部分は横ナデ調整である。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。胎土にはわずかに砂粒を含む。天井部外面にヘラ記号を有する。

Ⅲ類 (5・6) 蓋に身受けのかえりを有するものである。5は口縁端部をわずかに折りまげたものであり、6はかえりはやや長目である。5は頂部につまみを有するものであり、頂部周辺には回転ヘラ削りを施している。口径15.0cmである。明灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒をわずかに含むが良好である。

杯身 (7~18)

立上りの長さや形状、口径、蓋受けの有無により3分類した。

Ⅰa類 (7) 立上りは1.3cmであり内傾する。蓋受け基部には1条の沈線が入る。底部は回転ヘラ削りを施しており、以外は横ナデ調整である。底部内面のみナデを施す。明灰色を呈しており、焼成は不良である。胎土には大粒の砂粒を含んでいる。墓道からの出土品である。

Ⅰb類 (8) 立上りは1.0cmと短く、やや直立気味である。蓋受け基部には1条の沈線が入る。最大径14.8cm、器高4.8cmでⅠa類よりも大形品である。明灰色を呈しており、焼成は不良である。胎土には砂粒をわずかに含む。周溝からの出土品である。

Ⅰc類 (9・10) 立上りは0.9cmと短く、内傾する。立上りの形態はⅠa類と同じであるが長さが短くなる。灰色ないし灰黒色を呈しており、胎土、焼成はともに良好である。

Ⅰd類 (11・12) 立上りは0.8cmと短く、内傾するが、途中から直立する。ともに底部にヘラ削りを施しているが11は削りが少ないため丸味をもたない。墓道からの出土品である。12は羨道部埋土中から出土した。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土に小砂粒を含む。

Ⅰe類 (13) 立上りは0.7cmと短く、内傾度も小さい。立上りと内傾斜面との境は稜をなさ

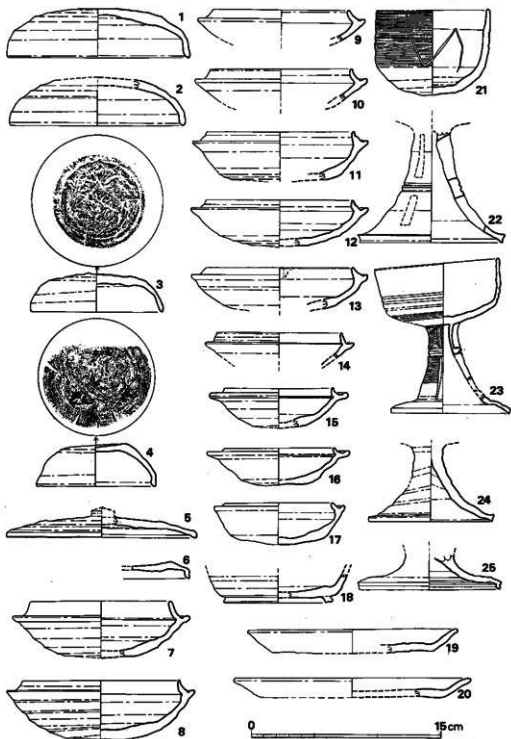


Fig. 90 5号墳出土須恵器実測図(縮尺1/3)

ない。

Ⅱ a 類 (14~16) 立上りは0.5cm~0.9cmと短く、小形品である。蓋受け部最大径は11.0cm~11.8cm、器高は3.0cm~3.2cmである。底部調整法は回転ヘラ削りを施さずに静止ヘラ削りと未調整である。立上り基部内面にはいずれも沈線が入る。14は南側周溝内、15は墓道黒色土下層から、16も墓道からの出土品である。ともに胎土には砂粒を含んでいる。

Ⅱ b 類 (17) 立上りは0.4cmと短く、内傾する。Ⅱ a 類よりもさらに小形品となる。墓道黒色土層からの出土品である。色調は灰黄色を呈しており、焼成は不良である。胎土には細砂粒を含む。底部は磨滅しているため調整法は不明であるが、未調整の可能性が大である。

Ⅲ 類 (18) 高台を有するものである。体部上半部を欠いている。高台は短い。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細砂粒を含むが良質である。西南部の周溝から出土した。

Ⅲ (19・20) 19は口径16.7cm、器高2.0cm、20は口径18.8cm、器高1.6cmである。底部はヘラ切りである。ともに石室内埋土中からの出土品であり、追葬時の土器と思われる。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には細砂粒もしくは砂粒を含んでいる。

盃 (21) 口径9.0cm、器高6.9cmである。体部にはカキ目を施しており、中央部付近には螺旋状の沈線が入る。従って場所により2条と3条になる。底部は回転ヘラ削りを施している。体部外面にはヘラ記号を有する。墓道前面の周溝からの出土品である。灰黒色を呈しており、焼

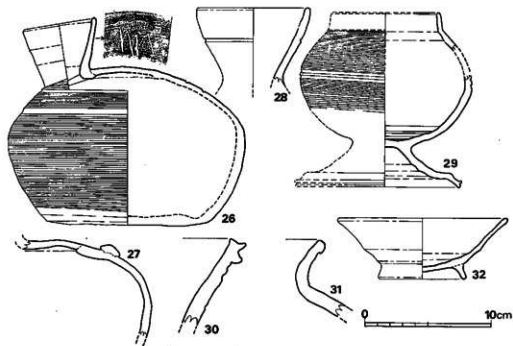


Fig. 91 5号墳出土須恵器・土器実測図 (縮尺1/3)

成は良好である。胎土は多量の砂粒を含んでおり、このため器表は粗雑である。

高杯(22~25) 22は杯部を欠損し、また脚部も全体の強度を残すにすぎない。脚柱の高さは8.8cmであり、上下2段、3カ所に長方形の透しが入る。脚中央部には2条の平行沈線が入って上、下を区切る。墓道からの出土品である。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土も良好である。23は短脚2段透しの高杯である。杯部は口径10.0cmであり、下半部近くに3条の平行沈線が入り、底部近くにはカキ目を施している。脚柱部中ほどには沈線が入り上、下2段3カ所に透しが入る。脚柱部にもカキ目が入る。上方の透しは貫通していない。杯部外面下方にヘラ記号を有する。色調は灰色を呈しており、焼成は不良である。胎土には小砂粒を含んでいる。24は脚柱部のみである。透しは入らない。杯部を欠くが、杯部の形態は23のものを予想できる。脚柱内面にはしぼり痕が著しい。脚柱径9.7cmである。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土は精選されていて良好である。墓道黒色土上層からの出土である。25は一応高杯の部類に含めたが29のように台付壺の脚になるかも知れない。内面には横ナデによる凹凸が著しい。墓道からの出土品である。灰黒色を呈しており、焼成は良好である。

平瓶(26・27) 26は完形品である。底部と体部の境部のわずかな部分にヘラ削りを施す。底部中央部付近は指頭圧痕がみられる。調整法は頸部は内外面とも横ナデ調整を施しており、体部は全面にカキ目が入る。頸部外面にはヘラ記号を有している。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土は良好である。27は体部の一部である。体部上方にはボタン状の突起がつく。現存部外面には目の細かいカキ目が入る。内面は横ナデ調整であり、接合部分のみナデ調整である。西南部周溝からの出土品である。灰色を呈しており、胎土、焼成はともに良好である。

提瓶(28) 口頸部のみであるが提瓶と思われる。頸部中央に1条の沈線が入る。墓道の黒色土層の上、下両層から出土した。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土に多量の砂粒を含んでいる。

台付短頸壺(29) 口頸部は1.5cmと短く、端部は丸い。胴部中央には2条の平行沈線が入る。胴部にはカキ目が入っており、底部付近はヘラ削りの上からカキ目を施している。脚端部外面には1条の沈線が入る。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土は良好である。墓道からの出土品である。

甕(30・31・33) 30は長頸甕の頸部である。頸部に沈線が入り、沈線内にヘラ描き文が入る。31は短頸甕の頸部と肩部の若干を残すのみである。肩部外面は平行叩き目が入り、内面は同心円叩き目が入る。33は長頸甕であり、底部を欠損する。口径は50.4cm、頸部高は15.6cm、胴部最大径は86.8cm、現在高は90cmである。頸部上半部に2条の平行沈線が2カ所に入って、3区にわけており、それぞれの場所に櫛状波状文が入る。頸部内面は横ナデによる凹凸が著しく、下方に近い位置に1条の沈線を配する。胴部外面は平行叩き目が入り、内面は同心円叩き目が入る。色調は暗灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には砂粒を含む。墓道出土。

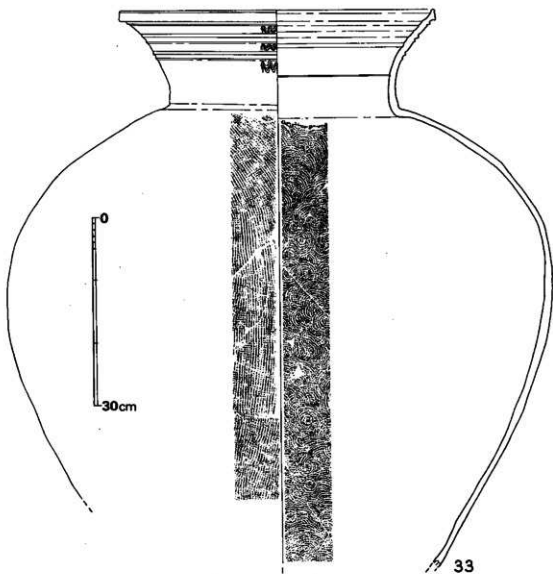


Fig. 92 5号墳出土須恵器実測図(縮尺1/6)

土師器 (Fig.91—32, P L. 57)

杯 (32) 高台付杯である。高台は長く、外方へ開く形態である。底部と体部の境はやや角張っており、ふくらみを有する。西南部周溝の黒色土層から出土した。色調は灰褐色を呈しており、焼成は不良である。胎土に細砂粒を含む。口径13.5cm、器高5.0cmである。

杯蓋Ⅰ類は杯身Ⅰ類とセット関係になるものと思われ、杯蓋Ⅱa類は杯身Ⅱa類と杯蓋Ⅱb

類は杯身Ⅱb類と、杯蓋Ⅲ類は杯身Ⅲ類とそれぞれセット関係になるものと思われる。

I類はⅢB期、Ⅱ類はⅣ期、Ⅲ類はⅤ期に属するものと思われ、その実年代はそれぞれ6世紀後半、6世紀終末、8世紀代に比定される。このことから、古墳は6世紀後半に築造され、6世紀終末まで追葬され、8世紀代に再び利用されたと考えられよう。

唐人塚 6号墳

墳丘 (Fig.93)

本墳は丘陵南裾の低位置にあり、墳丘は削平されたあと、土砂が堆積しており、このため古墳の存否は定かでないが、地表に石材が1個のぞいていたため、この部分にトレンチを設定して古墳を検出し、調査に及んだ次第である。西側トレンチの土層断面では石室中心から5.4mの位置が墳裾であり、水平層もしくは、石室方向へ下降気味の盛土を行っている。盛土の厚さは1.1mを測る。北側は墓頭端部1mの位置から内方へ腰石の高さまで盛土を行い、その後は水平に盛土を行っている。ここでは石材の詰め粘土を用いているのが観察された。盛土の観察から直径は8.7mを上回る規模のものである事が判明した。

石室 (Fig.94, P L, 58)

石室前半部は著しく削られており現存しない。従って、石室の構造は単室か複室かの区別はつかないが、主軸はN-9°-Eで、ほぼ南に開口している。支室は奥壁幅2.2mであり、横1.6mで、縦1.2m大の石材と、横0.5m、縦1.55mの石材を用いており、上方には若干、持ち送り気味に2段程積んでいる。両側壁とも横1.5m~1.65m、縦1m大の石材を用いており、上方にもかなり大き目の石材を積んでいる。空間部には小石を詰めており、部分的に粘土を併用している。床面からの現存高は1.75mを測るが、築造当初もこれと大差なかったものと思われる。床面には長さ20cm~30cmで、扁平な石を敷いている。この敷石を施す際にはあらかじめ地山上に10cm~30cm程の盛土を行なって平坦面を造っている。

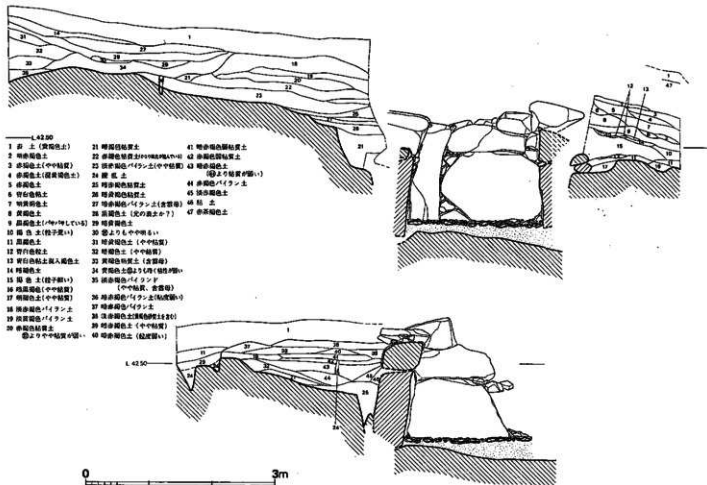
出土遺物

出土状況

石室は盗掘を受けており、さらに、石室前面部は破壊し尽されていたために詳細は不明な点が多い。石室中軸線に近い奥壁寄りの位置から、ガラス玉が検出されており、前面部の方で鉄鏡片が若干検出された。石室内埋土中からは、耳環、鉄鎌、須恵器、土師器が若干点検出された。

出土遺物を列記するとつぎの通りである。

- | | | |
|---------|----|----|
| (1) 武器 | 鉄鎌 | 若干 |
| (2) 工具 | 鉄鎌 | 1本 |
| (3) 装身具 | 耳環 | 1個 |



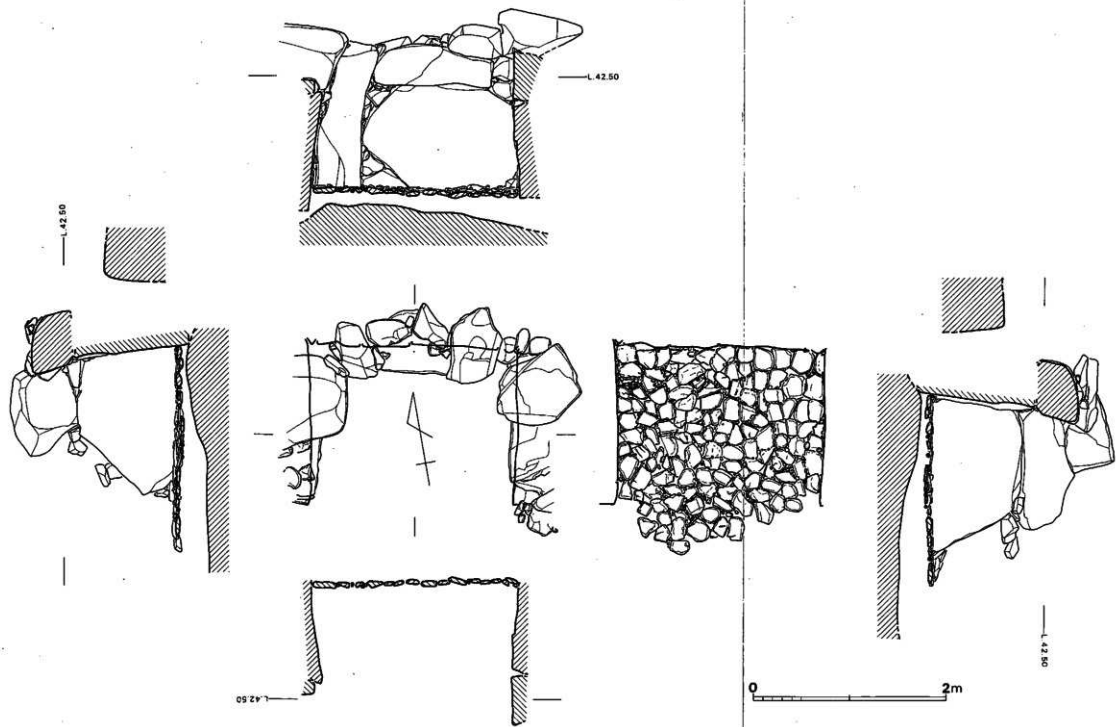


Fig. 94 6号填石室平面图 (缩尺 1/40)

	小玉	2個
	粟玉	6個
(4) 土器	須恵器	1個体
	台付短頸壺	1個
	土師器	7個体
	甕	1個体
	杯	4個体
	高台付杯	2個体

鉄鏃 (Fig.95-4~9, P.L. 59) 4~8は鏃の部分であり9は茎の部分である。8は棘寛被ぎであり茎は遺存しない。9は茎の一部であり木質の遺存がみられる。断面は円形を呈する。

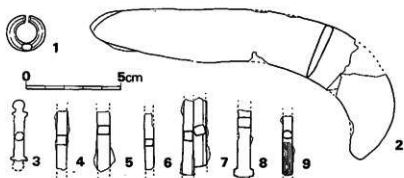


Fig. 95 6号墳出土耳環・鉄器類実測図 (縮尺1/2)

不明鉄器 (Fig.95-3, P.L. 59) 全長38mmであり、両端部に円頭形ものを挿入している。馬具付属品の一種と思われる。

鉄鏃 (Fig.95-2, P.L. 59) 図の左上の部分は手前に折り返してある。即ち刃の先端に対して右側に折りまげている。この部分には柄の木質が遺存しておりこれから柄は鏃身に対して鈍角につくことがわかる。全長16.9cm、刃部幅3.0cm、刃部厚0.5cmであり、両刃がついている。刃は先端部で内側に彎曲している。石室内埋土中からの出土品である。

耳環 (Fig.95-1, P.L. 59) 金環である。径は20.5mm × 19.5mmで円形であり、断面は5.2mm × 4mmの楕円形

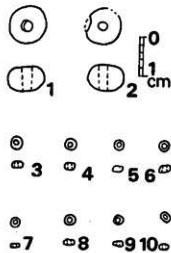


Fig.96 6号墳出土玉類実測図 (実大)

を呈している。

小玉 (Fig.96—1・2, P L, 59) 直径9.5mm、孔径2.5mmと直径9.5mm、孔径2.0mm×2.2mmで厚さ6.5mmのものである。ガラス製品であるが風化が著しく、色調は定かでない。石室床面から出土しており、他に5個体分ある。

栗玉 (Fig.96—3~10, P L, 59) 直径2mm~3.2mm、厚さ1mm~1.8mmの小さなものである。4は緑色ガラス玉であり、以外はすべて青色ガラス玉である。これ以外に7個体分が確認されている。いずれも石室内床面からの出土品である。

須恵器 (Fig.97—1)

高台付短頸甕 (1) 石室内埋土中からの出土品である。高台は低く、高台底面を若干くぼませている。胴部外面は全面をヘラ削りのあと横ナデを施している。胴部最大径部は上方にあり、やや角張るが稜線は入らない。口頸部は短く、わずかに外反する。口縁部上端面は、ややくぼませる。口径は14.9cm、胴部最大径は22.2cm、器高15.5cmである。色調は灰色を呈してお

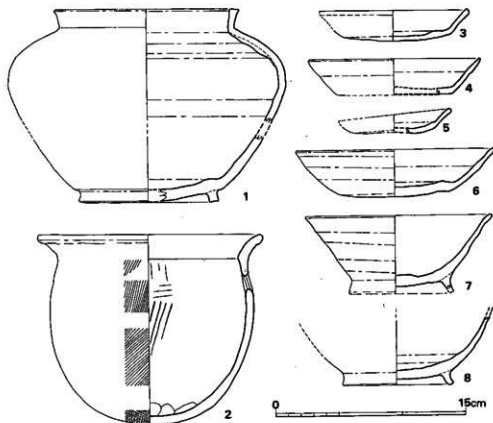


Fig. 97 6号墳出土須恵器・土師器実測図 (縮尺1/3)

り、胎土、焼成ともに良好である。

土師器 (Fig.97-2~8, P.L. 59)

壺(2) 胴部上方で口縁端部から3.1cmの位置に両面穿孔による直径1.5cm大の円孔が1個焼成後穿たれている。口径部は短く外彎し、頸部基部外面は稜をなさないが、内面は稜線が入る。底部は丸底であり、やや厚味を増す。胴部外面は刷毛目調整を施し、内面はヘラ削りの上をナデている。口径17.8cm、胴部最大径16.9cm、器高15.2cm。横褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土に砂粒を多量に含む。

杯(3~6) 3は口径11.6cm、器高2.5cmである。底部はヘラ切りのあとナデており、底部内面はナデを、以外は横ナデを施す。体部は若干外彎し口縁部を肥厚させる。黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土は良好である。4は口径13.4cm、器高2.9cmである。底部はヘラ切りを施しており、底部内面はナデを、以外は横ナデ調整を施している。淡黄褐色を呈しており、焼成はやや軟質である。胎土は良好である。5は口径8.8cm、器高1.9cmである。底部はヘラ切りである。底部内面はナデを施し、以外は横ナデを施す。淡黄褐色を呈しており、焼成はやや軟質である。胎土は良好である。6は口径15.6cm、器高3.8cmである。底部は回転ヘラ削りを施しており、底部内面はナデ、以外は横ナデ調整である。赤茶褐色を呈しており、焼成はやや軟質である。胎土には砂粒を含む。

高台付碗(7・8) 7は高台の端部を欠く。口縁部はわずかに外反する。口径14.5cmである。黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含む。8は黒色土器Aである。内面はヘラ磨きを施しており、黒色を呈する。高台径8.8cm。外面は淡黄褐色を呈している。胎土に砂粒を含んでおり、焼成はやや不良である。7は9世紀中葉、8は9世紀後半に属する。

石室内埋土中からは追葬時のものと思われる遺物が若干検出されているが、古墳築造時の年代は不明である。古墳の立地から見て、5号墳よりは後出するもので7世紀代に築造されたものと考えられ、奈良時代、平安時代に再利用されている。1の高台付短頸壺は8世紀前半に比定されるものであり、蔵骨器として古墳に埋納されたものであろう。また2の土師器壺は頸部直下に穿孔しており、これも蔵骨器として使用された可能性が高い。従ってこの6号墳は奈良時代に再び埋葬の目的で使われており、しかも蔵骨器を出土したということは、貴重な一資料となり得るであろう。遺物としては11世紀の土師器をも含むが、この時期にまで埋葬が行われたかどうかは定かではないが、何らかの目的で使われたことは確かな事実であろう。

(註1) 森田勉氏の御教示による。

唐人塚7号墳

墳丘

1号墳の西側で、丘陵の西端部に位置している。墳丘は削平されていて現存しないが、もともと、あまり高い墳丘を有するものではなかったようである。

周溝は存在しなかった。

石室 (Fig.98, P L. 60)

主軸はN-48°-Eで、ほぼ南西に開口する単室の横穴式石室である。

玄室は奥壁と側壁の一部を失っているが、残存部から、その規模は知る事ができた。奥壁幅は70cm~75cm、右側壁長は95cmである。石材の抜き跡から、奥壁は基底面に2個の石材を用い、側壁も2個の石材を横長に用いている。

袖石は側壁からあまり突出させていない。

羨道部の石材は、玄室よりもやや小ぶりの石材を用いている。

石材はいずれも1段を残すのみであるため、上部の構築状況は不明である。

墓壇はあまり大きくなく、石室の石材が入る最小限程度の規模のものであり、形態も石室の構造に沿ったものである。1段目の石材を据えるに際しては、個々の石材の安定をはかるための掘り込みがみられる。

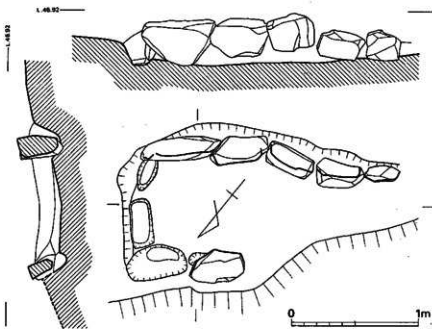


Fig. 98 7号墳石室実測図 (縮尺1/30)

出土遺物

出土状況

玄室内の床面からは須恵器の高台付杯が3個体、伏せた状態で発見されたが、調査中に盗難に会い現存しない。本墳の近くからは須恵器の小片が2個体検出されており、古墳の年代を知る手掛りとなる。

出土遺物を列記するとつぎの通りである。

- | | | |
|--------|------|-----|
| (1) 土器 | 須恵器 | 5個体 |
| | 高台付杯 | 5個体 |

須恵器 (Fig.99)

高台付杯(1~2) いづれも底部近くの小片であり、全体の形を知り得ない。1、2 いづれも底部近くの小片であり、全体の形を知り得ない。1、2ともに高台は低く、底面は内側のみが地につく形態である。色調は灰色を呈しており、胎土、焼成ともに良好である。

上述した2片の須恵器はⅦ期に属するものと思われる。

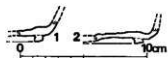


Fig. 99 7号墳周辺表採須恵器
実測図(縮尺1/3)

2. 中・近世墓の調査

(a) 甕棺 (Fig.100, P L, 65)

4号墳の周溝北側の肩部20cmの位置から検出された。合わせ甕であるが上甕は削平時に欠損して口縁部をわずかに残すのみであった。下甕は直径36cm~38cm、深さ25cm程の小堅穴を掘り、これに甕を65°の角度で埋置する。口縁部は現存する小堅穴水平面とほぼ同じレベルである。これに口縁部を合わせて上甕をのせて棺としている。小堅穴と甕棺との空間部には暗茶褐色土を詰めている。これは中世に属すると思われる。

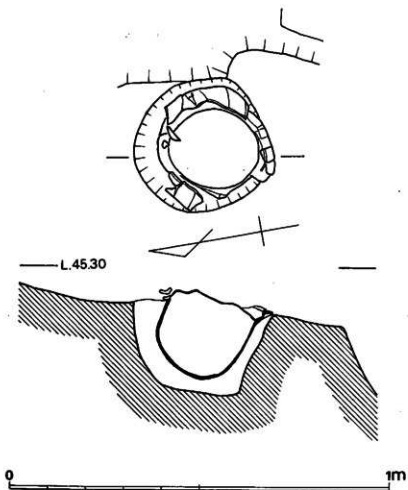


Fig. 100 唐人塚遺跡甕棺実測図 (縮尺1/10)

遺物

甕 (Fig.101, P L. 65)

ほぼ直立する胴部に浅い底部を接合したような形態であり、口頸部は鋭く外反し、内面は稜をなす。口頸部内面は平坦面を有しており、口縁部外面は凹彎する。外面は縦と斜め方向の刷毛目調整を施しているが、底部には及ばない。胴部内面はヘラ研磨しており、底部はヘラ研磨とナデを施している。器壁は一様に厚手造りである。口径30.3cm、器高22.5cm程である。色調は茶褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には多量の砂粒を含んでいる。

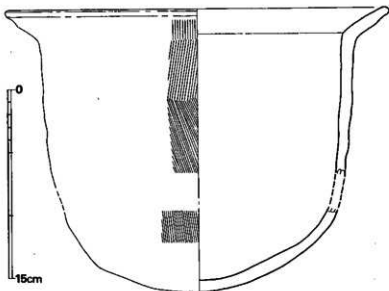


Fig. 101 唐人塚遺跡出土甕実測図 (縮尺1/3)

(b) 土壌墓

4号墳と5号墳との間の平坦面から4基の土壌墓が検出された。1・2・3号墓は北向きに一列に並び、4号墓はこれと直角方向に位置する。

第1号土壌墓 (Fig.102, P L. 61) 北壁が5号墳の周溝を一部切っている。墓壇は1.15m × 0.84mで略長方形を呈している。墓壇の西北に偏した位置に0.66m × 0.38mで隅丸長方形の掘り込みがある。墓壇の深さは0.38mであり、この位置から深さ10cmほどの2段目の掘り込みがある。この2段目の掘り込み部はただちに埋めもどされて、底面は平坦であったと思われる。墓壇内出土の土師器と洪武通宝は棺外副葬品であったものが落ち込んだものであろう。土壇内からは人骨、釘などは検出されていない。主軸の方位はN-70°-Wである。(川述昭人)

出土遺物

洪武通宝 (Fig.106, P L. 64) 6枚重ねのものが出土した。

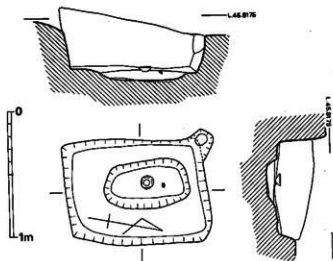


Fig. 102 近世墓1号棺実測図(縮尺1/30)

土器 (Fig.104, P L. 61)

掘り方底面から約12cm程浮いて、宋銭とともに発見された杯で、口径9.2cm、器高2.6cm、底径4.6cmを測る。器壁は薄く、口縁部は三角形を呈し、端部はシャープに引き出されている。焼成はやや軟質で、白色味をおびた淡灰色を呈する。胎土中には砂礫を比較的多く含み器面はざらつく。糸切り彫しの方向からロクロの回転方向は左廻りである。

口縁部内側に油煙の付着した跡があることから灯火器として使用されたと考えられる。

(森田 勉)

第2号土壇墓 (Fig.103, P L. 62) 1号墳の北方80cmの位置に所在している。土壇は80cm×56cmの長方形を呈しており、深さは40cm程である。北壁の中央部には径12cm、深さ9cmのピットがある。床横断面では中央部が凹陥している。土壇内上方の東壁寄りの位置で陶器1個と土師器皿が1個出土したがこれは棺外副葬品が落ち込んだものと思われる。墓壇内からは人骨、釘は検出されなかった。主軸はN-40°-Eである。(川述昭人)

出土遺物

土器 (Fig.104, P L. 62・64)

陶器1および小皿1を検出した。両者とも

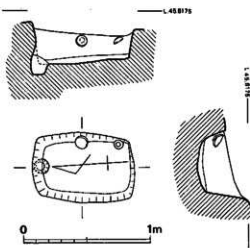


Fig. 103 近世墓2号棺実測図(縮尺1/30)

に墓壙東端近く、また底面から約25cm程の高さから発見された。1は口径7.1cm、器高1.8cm、底径3.1cmを測る。糸切り離してであろうが器面風化のため詳らかにしえない。胎土は精良でほとんど砂粒を含まない。焼成は軟質で淡赤茶色を呈する。油煙の付着から灯火器として使用されたと考えられる。3は陶白色の釉薬をかけた朝鮮系の陶器である。体部最下部に左廻りに1回転のヘラ削り調整を行っている。内面見込み部分に3足のトナの目跡がある。胎土は荒く微砂粒を非常に多く含み、またその色調は赤味をおびた茶色である。唐津焼であろうかと思われ、また唐津であれば体部のヘラ削り部分が非常に狭いことから古期に属するものであろう。

(森田 勉)

第3号土壙墓 (Fig. 105, P L. 62) 4号墳の同溝の外側ぎりぎりの位置に北壁がある。土壙は138cm×100cmで隅丸長方形を呈している。深さは70cmほどであり底面の規模は98cm×70cmで隅丸長方形を呈する。人骨が検出されている。埋葬形態は横臥屈葬であり、右肩を下にし、頭位はN-15°-Wである。土壙の主軸はN-11°-Eであるが埋葬時には北西と南東を結ぶ対角線が主軸のようにになっている。土壙の東側すなわち遺体の背面にあたる所で床面からやや厚いた状態で数珠玉と洪武通宝2、紹□元室1、慶長通宝1、不明1が検出された。釘は検出されなかった。

出土遺物 (Fig. 106, P L. 63・64)

数珠玉 33個出土している。直径5mm～6mm、厚さ5mm、孔径2mm強のものである。ガラス製品であり、透明に近い白色を呈する。

銅銭

洪武通宝 2

紹□元室 1

鉄銭

慶長通宝 1

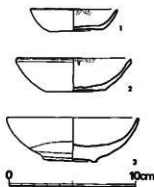


Fig. 104 近世墓2号棺出土土師器・陶器実測図 (縮尺1/3)

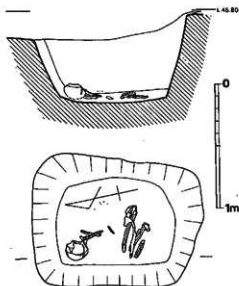


Fig. 105 近世墓3号棺実測図 (縮尺1/30)

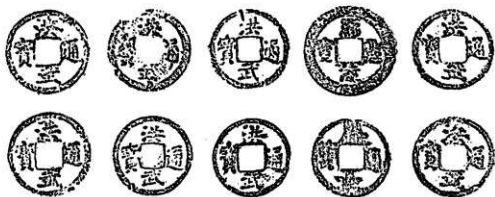


Fig. 106 近世墓出土銭貨拓影(実大)

不明 1

第4号土壇墓 (Fig.107) 3号墓の西側60cmの所に位置しており、これは他の3基と異って、主軸は直角方向にずれている。土壇は110cm×82cmでやや形のくずれた隅丸長方形を呈する。底面はほぼ平坦であり、深さは42cmを測る。主軸はN-77°-Wである。人骨は遺存していないため 頭位は 不明である。なお鉄釘も検出されなかった。

(川述昭人)

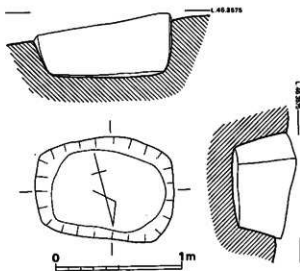


Fig. 107 近世墓4号棺実測図(縮尺1/30)

3 結 語

当初、丘陵頂部に3基の古墳が築造されているとの判断で北の方から順に1、2、3号と番号をつけ、調査を開始した。

1号墳の横穴式石室の調査の進行とともに墳丘下に、古墳築造前の遺構が存在していることがわかり、石室の調査後、墳丘下の調査に着手した。墳丘下からは、土壘墓7基、石蓋土壘墓2基、木棺墓2基、箱式石棺墓1基、不明遺構2を検出した。地山面での等高線を追うと、46.75mのコンターは南北に長い菱形を呈しておりこのコンターより高所にすべての遺構は占地する。このコンターのほぼ中央部に1号墳の横穴式石室があり、この石室の下には石室構築時に破壊されたためか遺構は存在しなかったが、これをとりまくような形で墓地は営まれていた。また2号墳は調査前の地形測量では周囲を開墾により削られた古墳と思われたため、これを2号墳としたが、横穴式石室は存在せずに墓地群が検出された。従ってここから検出された遺構はすべて2号墳の何号棺とよぶことにした。地山面で測った等高線の47.25mの線は1号、2号は連続せずにそれぞれ独自のコンターがまわり、おのおの独立した形状を呈している。2号墳は土壘墓5基、石蓋土壘墓3基、箱式石棺墓4基の総数12基からなり、そのうち9基は頂部平坦面にあり、46.5m以上の高さにすべて占地していた。遺構間の切り合いはないため、各遺構の所在がわかるほどの近接した時期に次々に墓地は営まれたものと考えられる。あまり高くないが盛土をもっており、南西側は地山整形を施している。北から北東にかけては溝状遺構が2カ所平行にあり、ともに西側は切れるが弧状のものである。溝2を墳丘裾部とすれば2—1号箱式石棺墓の中軸線の縦、横の交点がほぼ2号墳の中央部となり、隅丸形状の墳丘を考える事ができる。3号墳は北西部は崖面となり、若干崩壊しているため、横穴式石室は現存する墳丘の中心からはずれた所に位置しているように見える。この3号墳の横穴式石室の墓室は木棺墓のぎりぎりの位置にまで及ぶが、これを切ってはいない。しかしこの横穴式石室築造時にはいくつかの遺構を破壊した可能性がある。溝4は弧状の溝状遺構であり、横穴式石室以外の遺構と伴うものと考えられる。2、3号墳間には周溝があり、須恵器が多数検出されたがこれは、3号墳の横穴式石室に伴う遺物と思われる。

それでは調査の結果判明した事や問題点を遺構の種類ごとにあげて結語としたい。

土壘墓

近世墓を除く土壘墓は15基検出されており、いずれも木棺墓、箱式石棺墓、石蓋土壘墓と同時期のものと思われる。

①頭位は北1、北～北北東1、北北東1、東北東1、東2、東～東南東1、南南西1であり、頭位のわかるもの9基のうち、北～東の間のものは7基である。

②地形から見た各遺構の配置は頂部を中心とする平坦面に13基、斜面に斜向するもの1基、群からはなれた斜面に単独であるもの1基である。平坦面に所在するものは1号墳には6基、2号墳には4基で、これはすべて小児用と思われるものである。3号墳には2基である。丘陵に対して平行のものが過半であり、直交するものは1基で、斜向するものが半数以下である。

③墓壇は2段掘りのものは1—4号棺・2—8号棺・3—3号棺の3基であり、その他は1段掘りである。特殊なものとして2—9号棺があげられ、これは前述した如く、長壁の一方に長方形の横穴を穿っているのが見られた。

④棺の形状は、両小口が弧状を呈し、しかも頭部と足部でその長さが異なるⅠ類と、棺は細長い長方形を呈しているⅡ類、小形で隅丸長方形を呈するものⅢ類、小形で方形に近い長方形のものⅣ類、側壁の一方に横穴を穿つⅤ類、片方の小口と、片方の側壁にだけ石材を用いるⅥ類に大別される。Ⅰ類は1—4号棺・2—8号棺の2基であり、Ⅱ類は1—5号棺・1—7号棺・1—9号棺・2—10号棺・3—1号西棺の5基である。Ⅲ類は1—13号棺・1—14号棺・2—11号棺・2—12号棺・3—3号棺の5基であり、Ⅳ類は1—10号棺の1基のみ、Ⅴ類は2—9号棺の1基である。Ⅵ類は8—1号棺である。

⑤床面の施設として粘土枕をもつものは1—4号棺の1基のみである。また内部から赤色顔料を検出したものはない。

⑥副葬品についてみると1—5号棺は鉄斧、1—14号棺は鉄器、3—1号西棺は滑石の勾玉と有孔円盤が出土している。1—14号棺の鉄器は出土時は刀子のように思われたが現在は紛失して不明である。従って、その種類は農工具2、装身具1である。またその位置は棺内からは鉄器と装身具が出土しており、鉄斧は床面から浮いた状態の出土であるため、棺外副葬であったと思われる。出土遺物と被葬者との位置関係は鉄斧は左側壁側の中央部であり、鉄器は頭位がわからないので不明である。装身具は攪乱を受けていたので出土位置は定かでない。

⑦年齢構成をみると成人と思われるものが7基、小児と思われるものが8基であり、小児の割合合いが大である。

石蓋土墳墓

全部で6基検出されており、うち3基は完存しており、2基は蓋石を若干消失し、残りの1基は蓋石は取り去られていた。

①頭位は北北東1、東1、東南東1、南～南南西1、西北西1、北西1であり、東～北、北～西間が多いが、一定性はない。

②地形から見た各遺構の配置を見ると、1号墳の東側の斜面近くで丘陵に直交して2基並置しており、2号墳では丘陵西半部の平坦面に2基と斜面に斜向して1基営まれている。更にこれとは離れて石蓋土墳墓のみが5号墳の墳丘築造前に営まれているのが1基検出された。

③墓壇は2段掘りのものは2-4号棺・2-7号棺の2基であり、平面形は長方形を呈する。削平され上部構造が不明なものを含めて1段掘りは残りの4基であり、いずれも地山を掘削して棺となして石蓋をする。同じ1段掘りでも2-2号棺は墓壇内に木棺を埋置して裏込めを行ったものと思われ、棺の壁面は地山でなく埋土である。

④棺の形状は長方形を呈していて、頭部と足部の小口の大きさが若干異なるⅠ類と、両小口は弧状を呈して、頭部幅が若干広いⅡ類とに分類される。Ⅰ類は5-1号棺を除くすべての石蓋土壙墓が入り、Ⅱ類は5-1号棺のみである。

⑤床面の施設として粘土枕をもつものは1-11号棺・1-12号棺・2-4号棺の3基であり、検出遺構の半数が粘土枕をもつ事になる。また内部から赤色顔料は検出していない。

⑥石蓋の石材は5-1号棺は厚味があって柱状に近いような花崗岩を用いているが、他の石蓋の石材は花崗岩を板状に割ったものを主として用いている。

⑦副葬品についてみると、2-4号棺は刀子1、土師器甕2個体分、5-1号棺は刀子が出土している。種類は工具2、土器2である。出土位置は、棺内から刀子2本、棺外からは土器2である。出土遺物と被葬者との位置関係は2-4号棺は頭部からやや下った右側に刀子があり、頭部左側の棺外には石蓋に密着して、主軸と平行に土師器甕が横たえてあり、口縁部にはこれを覆う大きさの石で蓋をしている。また被覆粘土近くから土師器の底部近くの小片が検出された。5-1号棺は足部に近い右側から、鋒を足部小口に向け刃部を右側に向けた刀子が1本検出された。

⑧被葬者の年齢構成は1-11号棺は成人用としてはやや小さすぎるようであり、小児用かも知れない。2-2号棺は小児用であり、以外は成人用である。2-4号棺は差し違いに2体埋葬している。

木棺墓

3基検出されており、うち1基は割竹形木棺と思われるものである。

①頭位は南東1、東南東1、北東～北北東1であり、大略すれば北東から東南東に集中する。

②地形からみた遺構の配置は1号墳の西側の緩傾斜面に丘陵と直交して2基並置した状態であり、他の1基は3号墳の平面上に土壙墓と並置してある。

③棺の形状は1-3号棺は断面U字形を呈しており、平面は長方形である。1-2号棺は底面は平坦であり、小口、側壁とも掘り込みがなく、床にも板材を用いたものであろうか。3-1号東棺は片方の小口は弧状を呈し、他方は直線である。底面は平坦であり、地山をあまり掘りくぼめていない。

④副葬品についてみると1-2号棺からは刀子が、1-3号棺からは管玉1、ガラス玉4

が、3-1号東棺からは鉄斧、鉈、刀子が出土している。これを種類からみると、農工具を出土したもの2基、装身具を出土したもの1基である。出土位置はいずれも棺内からであり、被葬者との位置関係は1-2号棺は頭部の右側で刃を右側壁に向け、鋒を足部に向けて刀子が、1-3号棺は中央部からやや上方の右側で手首くらいの位置から管玉とガラス玉が、3-1号東棺では足部左側のコーナーから鉄斧が検出された。

箱式石棺墓

全部で6基検出されたが、棺材が完全に残っていたのは2基だけであり、他の4基は詰めに使われた粘土や礫が残るのみであった。

①頭位は北2、北東～北北東1、北東1、北東～東北東1、東1、不明1であり、すべてが北から東の間におさまる。

②墓壇の平面形は、長方形ないし隅丸長方形を呈しており、両側壁・両小口2段掘りが2基、両側壁2段掘りが3基、不明1基である。これを見ると墓壇が現存するすべての箱式石棺墓は2段掘りであり、床面には更に個々の棺材を据えるための掘り込みがみられる。

③棺材の接合部にはほとんどが粘土を詰めているのが見られ、2-1号棺は特に入念であるが、1-1号棺は、側壁、小口部の詰めには粘土は用いていない。蓋石の残存する2基には蓋石間の詰めに粘土を用い、2-1号はかなり厚く被覆する。

④床面の施設としては敷石を施したものは1基も存在しないが、粘土枕をもつものは2基あり、あと1基はその可能性がある。棺材に赤色顔料を塗布したものは2-1号棺だけであり、枕部に見られるのは2-6号棺である。

⑤副葬品についてみると、1-1号棺は鉈、2-1号棺は鉈とガラス玉、2-5号棺は鉄鎌が出土しており、これを種類から見ると、農工具3、装身具1となる。またその位置は、棺内からは鉈、鉄鎌、ガラス玉の3であり、棺外は被覆粘土中から鉈が1本検出されている。出土遺物と被葬者との位置関係はガラス玉は左手首であり、鉄鎌は右側の足部近くから出土している。被覆粘土中の鉈は足部に近い蓋石間にあり、長軸に対して直交するような形で置かれていた。

⑥石棺の配置を地形との関係でみると、5基は頂部平面面にあり、1基だけ、やや斜面よりで、丘陵と平行に存在する。

⑦被葬者の年齢構成をみると、2-1号棺は熟年の女性であり、他の4基も成人用と思われるが、1基だけ小児用がある。

⑧最後に1-1号棺は北側にL字状の幅25cm～40cm、現存高10cm程の溝があり、これに伴う可能性はあるが確証はない。

それではこれらの土壘墓、石蓋土壘墓、木棺墓、箱式石棺墓の年代を考えてみる事にする。

これらの遺構は、ほぼ同一時期の所産と思われるものであるが、年代の決め手となる遺物は少ない。この中で特に重要になってくるのは、2—4号石蓋土墳墓の棺外副葬品の土師器甕である。この土器は柏田Ⅲ期の古い所に位置づけられるものであり、あえて実年代をあたえれば4世紀中葉から後半にかけての、やや後半よりの年代が与えられよう。従って、他の遺構もこれとは若干の先後関係はあっても、この年代を大きく隔たる事はないものと思われる。

横穴式石室

唐人塚遺跡からは横穴式石室を内部主体とする6基の古墳が発見された。石室は3、4号墳は、床面に石材の一部とその抜き跡を残すのみであり、1号、6号、7号も半壊に近い状態であり、比較的残りの良好だったのは5号墳だけという状況であった。従って石室の構造を考える上ではあまり良好な状態とは言えなかった。

ここで調査を通して、明らかになった点を列挙していく事にする。

①占地について；1、3、4号墳は丘陵の頂部の最高所に位置しており、4号墳はやや斜面部に位置する。7号墳は1号墳の西方裾部で、丘陵斜面近くに位置する。5号墳は斜面の中程に墓壇を掘り、斜面低方に墓道を設ける。6号墳は丘陵裾部に所在する。その占地からみて、小形横穴式石室である7号墳を除けば頂部から斜面部さらに裾部へと順次に構築されたことがわかる。

②方位について；頂部に占地する1号墳は西北西に開口し、同じく頂部に占地する3号墳は、これと逆方向の南東に開口する。4、5、6号はほぼ南向に開口する。7号墳は南西に開口しており丘陵に平行の位置にある。この開口方位からは、1号、3号、4・5・6号、7号に4分類でき、築造年代からは1号と3号、4・5・6号、そして7号に3大別できる。

③石室構造について；1号墳は単室であり、3号墳も単室の可能性が大である。4号墳は抜き跡から複室と考えられ、5号墳は単室、6号墳は不明である。玄室の平面の規模は、1号墳は長さ2.5m、幅1.95m、3号墳は推定で長さ2.3m、幅1.7m、4号墳は長さ2.8m、幅1.9m、5号墳は長さ2.15m、幅1.85m、6号墳は長さ不明、幅2.2m、7号墳は長さ0.95m、幅0.7mであり、平面形は5号墳がやや方形に近い長方形であり、他は長方形プランを呈する。1号墳、5号墳とも腰石として大き目の石材を用いており、1号墳は、この部分内面に赤色顔料を塗布している。

④周溝について；周溝を有するものは3号墳、4号墳、5号墳である。3号墳は東半部にのみ所在する。4号墳は地山を掘削して、幅2m～2.3m、深さ1mで直径20mの堂々たる周溝を有する。5号墳は墳丘東側は斜面となるため、周溝は存在しないが西側は2重に廻っている。内側は幅1.2m～1.7m、深さ1m～1.5mのシャープなものであり、底面は平坦である。これの内側の位置は、石室中軸線から5mの距離である。2重目の周溝は1重目の周溝の10cm

～50cmの位置にある。土層断面から内側のそれは墳丘築造時には、盛土中に隠れてしまうものである事が言える。

⑤出土遺物について：1号墳は、墳丘中から鉄斧と石鏃、そして表採品や墳丘からの出土品として須恵器・土師器が若干出土した。3号墳からは磁石・須恵器が、4号墳からは鉄鏃・鉄鉾・刀子・耳環それに須恵器多数と土師器が検出された。5号墳からは鉄鏃、大刀片、耳環、勾玉、管玉、丸玉、須恵器、土師器が、6号墳からは鉄鏃、鉄鏃、耳環、丸玉、粟玉、須恵器の蔵骨器、土師器が、7号墳からは須恵器が出土している。

⑥年代について：出土遺物は前述した如くであるが、出土遺物のうち須恵器からその年代を考えてみる。1号墳は6世紀前半代に比定され、3号墳は、石室、もしくは、墳丘中からの出土品であると断定できるものはないが古式の須恵器を採集しており、この遺物は5世紀後半に比定される。4号墳は6世紀後半に築造され7世紀初頭まで追葬が行なわれ、8世紀に再利用されている。5号墳は6世紀後半でも4号墳よりは後出する時期に築造され、6世紀終末まで追葬し、8世紀代に再利用されている。6号墳は5号墳よりは更に後出し、7世紀代に築造されて、奈良時代、平安前期に再利用されている。7号墳は、石室内の須恵器3個体が盗難に会い現存しないが、周辺部採集品とあわせて8世紀代のもものと判断される。従って、築造順序は3号墳→1号墳→4号墳→5号墳→6号墳→7号墳の順になる。遺物では、4、5、6号墳は築造当初からみると、かなり年代の隔りのある土器が石室内から発見されており、古墳への再埋葬が行なわれている可能性が高い。その中でも6号墳検出の蔵骨器をみると、石室に火葬の埋葬が行なわれた事がわかり、興味深い。

(川途昭人)

近世墓

①土壙はすべて方形もしくは長方形を呈しており、遺存した唯一の骨から北頭位の右側臥屈葬であることが判明した。

②土壙内からは鉄釘、棺材などは出土していないため木棺を使用した事は確認されない。筑紫野市周辺で中世墓を出した遺跡は南から、山の口遺跡、八ノ隈遺跡、原口遺跡、桶田山遺跡、塔の原遺跡、剣塚遺跡があげられる。このうち釘などの出土で木棺と考えられる遺跡は桶田山遺跡、剣塚遺跡、八ノ隈遺跡である。ここで当遺跡の遺物の出土状況を見ると棺外の遺物が棺材の腐蝕とともに墓壙内に落ち込んだと考えられる状態で出土している点から桶のような棺を想定できる。

③銭貨は銅銭、鉄銭が2基の土壙から総数11枚検出された。2号墓出土の6枚重ねの銅銭は宋銭の洪武通宝のみであるが、3号墓出土の5枚は銅銭と鉄銭があり、銅銭は洪武通宝2枚、紹口元宝1枚で、鉄銭は慶長通宝1枚および判読困難なもの1枚である。

④数珠玉は3号墓から33個検出されており、いずれも透明に近い白色のガラス玉である。玉

の出土状況は側臥屈葬の背面部から出土しており、合掌した手首にかけたものとは違う。棺を使用したとすれば、棺外上面に置いたものが棺材の腐蝕により落ち込んだものと考えられる。

⑤土器は小皿・杯および古唐津と考えられる陶器が出土した。

⑥封土については、既に上部が削平されているため不明である。

⑦墓を造営した年代については出土遺物が少ないことからわかりに決め難いが、慶長通宝および杯・小皿・「古唐津」から17世紀前半代にその上限を定めることができ、またその頃にその実年代を求めても大過ないと調査者等は考えた。

(川述昭人・森田勉)

註1) 山福新幹線関係埋蔵文化財調査報告—IV—1977 福岡県教育委員会

(2) 井上裕弘氏の御致示による

(3) 九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告—VI—1975 福岡県教育委員会

(4) 九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告—VII—1976 福岡県教育委員会

(5) 九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告—VIII—1976 福岡県教育委員会

(6) 九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告—VI—1975 福岡県教育委員会

(7) 九州縦貫道関係埋蔵文化財調査報告—IV—(本文編)1974 福岡県教育委員会

(8) 「祖先のあしあと」筑紫野市所在遺跡の調査報告会資料 福岡県教育委員会

鉄鉋の定性分析

1. はじめに

福岡県筑紫野市杉塚に所在する唐人塚遺跡の 1-1号箱式石棺墓から出土した鉄鉋について、定性分析を行なったので報告する。

なお、当遺跡の推定年代は、古墳時代前期（4世紀後半）に比定され、石棺6基中3基に鉄器が副葬されていた。鉄器の種類は、鉄鉋3本の他に、鉄斧（袋状）3点、刀子4本、鉄鏃1点等である。

2. 試料

供試材の鉄鉋は、現存長5.0cm、幅1.2cm、厚さ2.5mm、断面はU字形を呈している。この端部よりサンプリングしたが、全体に錆化していた。

3. 分析方法

分析は、試料が錆化しているのと量の制約があることから、スペクトル発光分析法を実施した。この方法は、試料を粉末状にし、補助電極として純粋な炭素電極棒を用い、その一方に凹穴をあげ、試料をこれにつめて両極間にアーク溶解で発光させて、得られるスペクトル線の波長の位置から、その構成元素の存在を知ることが出来る発光定性分光分析である。

すなわち、化学分析の絶対法に対して相対法であり、その試料中の主成分元素の多寡を知ることができる方法である。分析に消費する量は、約20mg程度である。

4. 分析結果と考察

Tab. 4に分析結果を示す。唐人塚遺跡出土の鉄鉋から検出される元素は、鉄(Fe)をはじめとして造滓成分のアルミニウム(Al)、カルシウム(Ca)、けい素(Si)、マグネシウム(Mg)であり、また微量元素の銅(Cu)、モリブデン(Mo)、チタン(Ti)、ゲルマニウム(Ge)、マンガン(Mn)等である。

鉄(Fe)は母材であり、非常に強く検出されるのは当然として、非金属介在物と考えられる造滓成分のアルミニウム(Al)、カルシウム(Ca)、けい素(Si)、マグネシウム(Mg)が全体的に多いのは製錬条件や鍛造技術の稚拙さを示し、製作年代の古さを現わしているといえよう。

また、微量元素は、銅(Cu)、モリブデン(Mo)が強く、チタン(Ti)が明瞭で、ゲルマニウム(Ge)、マンガン(Mn)が辛じて認められると出たのは、特異な現象で製鉄原料を考える上で重要である。すなわち、砂鉄を原料とするならばチタン(Ti)とバナジウム(V)が併せて検出される筈であるが、該材はチタン(Ti)のみであり、また銅(Cu)、モリブデン(Mo)、マンガン(Mn)の検出から鉄鉱石使用の蓋然性が高まる訳である。なお、ゲルマニウム(Ge)は通常砂鉄に含まれるのは稀であるので、これからも鉄鉱石の可能性は強くなる。

そうすると、チタン (Ti) を含有した鉄鉱石の産出地が問題となろう。その候補地を次に摘録してみる。

村上英之助氏は月の輪古墳出土鉄器の原料の考察に当って、「朝鮮の黄海道に10%近いTiを含むところの含チタン磁鉄鉱が賦存していること、又朝鮮に多い接触鉱床がしばしばTiを含んでいる」と指摘されている。

また、長谷川熊彦氏は南朝鮮における鉄鉱資源で、「金海地方。南方釜山駅に約三五キロ、中古時代から採掘された遺跡。日本海沿岸山岳地帯に花崗岩片麻岩中で石灰岩火山岩接触交代鉱床 磁鉄鉱。分析例 Fe 56~57, S 0.3, TiO₂ 11」と挙げている。両氏は土田次郎氏の朝鮮鉄床論引用に基づいている。

筆者も唐人塚出土鉄鏡の原料として、この金海地方に賦存するチタン (Ti) を含有した磁鉄鉱の分析値に魅力をかんじる。鉄鏡素材は、この磁鉄鉱の産出地近くで製錬されたであろう。しかる後、現地で製品化まで行なったか、素材の形で搬出されて北部九州の何処かで鍛冶加工を施したのか、その辺の判定はこの分析値だけでは難しい。この問題は鉄鏡の南朝鮮の出土例を睨みつつ形式変遷をふまえて、今後の分析データの集積を待つべきであろう。

なお、参考のために推定年代の流れに沿って唐人塚出土の鉄鏡以外に、花登2号墳出土鉄器類、倉瀬戸5号墳出土刀子、広石古墳群出土鉄器等の分析結果をTab. 4に記載している。

鉄器器種の違いがあるが、最も時代の古い唐人塚出土の鉄鏡は、他の鉄器類に比べてアルミニウム (Al)、カルシウム (Ca)、マグネシウム (Mg)、けい素 (Si) 等非金属介在物と考えられる造滓成分は、相対的に高く、製錬や鍛冶技術のレベルは低調であることから、製作年代との相関が指摘できそうである。

5世紀後半の花登2号墳出土の各種鉄器、7世紀代の倉瀬戸6号墳出土刀子及び広石古墳群出土の直刀・鉄鏡等いずれも造滓成分 (Al+Ca+Mg+Si) は低目である。野上文助氏のように「5世紀中葉の時点になると、新たに鋳留技術・大陸系鍛冶技術の導入が工人の渡来によって開始される。」とされ、製鉄技術の革新があり、技術アップと相俟って鉄器生産の飛躍的な発展があったのであろう。古墳副葬品のうち、各種鉄器や鉄鏡の増大はこれを物語っている。また、鉄器の分析結果のうち、アルミニウム (Al)、カルシウム (Ca)、マグネシウム (Mg)、けい素 (Si) の4成分を指標として、技術の推移を読み取ることが出来る。

次に同一古墳に副葬された鉄器でも器種によって素材の使い分けが認められる。例えば、花登2号墳の鉄器の場合、微量元素のうちマンガン (Mn)、すず (Sn)、チタン (Ti) の有無によって、その差を知ることが出来る。また、広石古墳群Ⅱ-2号墳出土の直刀と鉄鏡では、コバルト (Co)、クロム (Cr)、マンガン (Mn)、鉛 (Pb)、すず (Sn)、チ

符号	試料		履歴		銀 (A B)	アルミニウム (A 1)	比素 (A a)	ほう素 (B)
	器種	遺跡名	遺跡所在地	推定年代				
	鉄 籠	唐人塚石棺 1号	筑紫野市杉塚	4 C後半	0	5	0	0
参 考 値	壺状鉄製品 用途不明鉄製品	花登 2号墳	小郡市三沢字花登 881-1、882-2	5 C前半	0	2	0	0
	"				0	2	0	0
	刀 子				0	2	0	0
	鉄 芥				0	3	0	0
	鋤 先				0	2	0	0
	鉄 鋸				0	1	0	0
	刀 子	倉瀬戸古墳 5号墳	福岡市片江字倉瀬戸	7 C初 ~7 C後半	0	2	0	0
直 鉄	刀 茎	広石古墳 IV-2号墳	福岡市西区拾六町 広石	6 C後半 ~7 C前半	0	1	0	0
	"	"		"	0	2	0	0
	"	I-1号墳		"	0	3	0	0
	"	III-1号墳		"	7 C初 ~7 C後半	0	3	0

- 0 : 認められない
 1 : 半じて認めらる
 2 : 明瞭
 3 : 強い
 4 : 可成り強い
 5 : 非常に強い

モリブデン (Mo)	ナトリウム (Na)	ニオブ (Nb)	ニッケル (Ni)
3	0	0	0
0	0	0	0
0	0	0	0
0	0	0	0
0	0	0	0
0	0	0	0
0	0	0	0
0	0	0	0
0	0	0	0
1	1	0	1
1	1	0	1
1	1	0	1
1	1	0	1

Tab. 4 鉄器の分光分析結果

バリウム (Ba)	ビスマス (Bi)	カルシウム (Ca)	コバルト (Co)	クロム (Cr)	銅 (Cu)	鉄 (Fe)	ゲルマニウム (Ge)	カリウム (K)	リチウム (Li)	マグネシウム (Mg)	マンガン (Mn)
0	0	5	0	0	4	5	1	0	—	4	1
0	0	1	0	0	1	3	0	0	0	2	1
0	0	1	0	0	1	3	0	0	0	2	1
0	0	1	0	0	1	3	0	0	0	2	1
0	0	1	0	0	1	3	0	0	0	3	1
0	0	1	0	0	1	3	0	0	0	4	1
0	0	1	0	0	1	3	0	0	0	2	0
0	0	1	0	0	1	3	0	0	0	2	0
0	0	1	0	0	1	3	0	0	0	2	0
0	0	2	1	1	2	4	0	0	0	2	1
0	0	1	1	0	2	4	0	0	0	1	1
0	0	3	2	1	2	5	0	0	0	2	2
0	0	3	2	1	2	5	0	0	0	2	2
0	0	3	2	1	1	5	0	0	0	2	1

鉛 (Pb)	アンチモン (Sb)	けい素 (Si)	すず (Sn)	テルル (Te)	チタン (Ti)	バナジウム (V)	タングステン (W)	亜鉛 (Zn)	ジルコニウム (Zr)	磷 (P)	④
0	0	5	0	—	2	0	0	0	0		
0	0	2	0	0	1	0	0	0	0		
0	0	2	1	0	1	0	0	0	0		
0	0	2	1	0	1	0	0	0	0		
0	0	2	1	0	0	0	0	0	0		(4)
0	0	3	0	0	1	0	0	0	0		
0	0	2	0	0	1	0	0	0	0		
0	0	2	0	0	0	0	0	0	0		
0	0	2	0	0	0	0	0	0	0		
0	0	3	1	0	0	0	0	0	0	0	(5)
1	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	
0	0	3	0	0	1	1	0	1	0	0	(6)
0	0	3	0	0	1	1	0	1	0	0	
0	0	3	0	0	1	1	0	1	0	0	

分析は新日鉄八幡製鉄所で行なった。

タン (Ti)、バナジウム (V)、亜鉛 (Zn) 等に差異があり、特に鉄鏝ではチタン (Ti)、バナジウム (V) の存在から製鉄原料に砂鉄 (極低チタン含有砂鉄) が使用されていることが判り、他に低温で鉄に固溶されやすいコバルト (Co)、すず (Sn) 等が検出されるのも興味ある現象である。

なお、鉄器器種が同じであれば鉄器中の構成成分は近似しており、この傾向は花登2号墳出土の鋤先や広石古墳群の鉄鏝等で認められる。古墳期における鉄器製作も、器種によって素材の選択を行なったのであろう。

5. まとめ

唐人塚石棺出土の鉄鏝は、銅 (Cu)、モリブデン (Mo) を多目に、またチタン (Ti) を含有した磁鉄鉱を原料とした素材と推察される。産出地は南鮮の金海地方の可能性が強い。

この鉄鏝は、アルミニウム (Al)、カルシウム (Ca)、マグネシウム (Mg)、けい素 (Si) 等造滓成分を形成する非金属介在物を非常に強く検出することから、5世紀以降の鉄器に比べて製錬や鍛造技術で見劣りがし、鉄材自身の推定年代の古さがうかがわれる。しかし、鉄鏝は南鮮で製品化されたのか、素材として列島に搬入されて鍛冶加工されたのか、この分析結果から結論づけはできない。

付記

この稿作成にあたり、使用した分析データは清水峯氏 (旧新日鉄生産技術研究所部長、現在九州大学工学部冶金学教室教授) の御尽力で揃った事を銘記して感謝の意を表しておきます。

(大澤正巳)

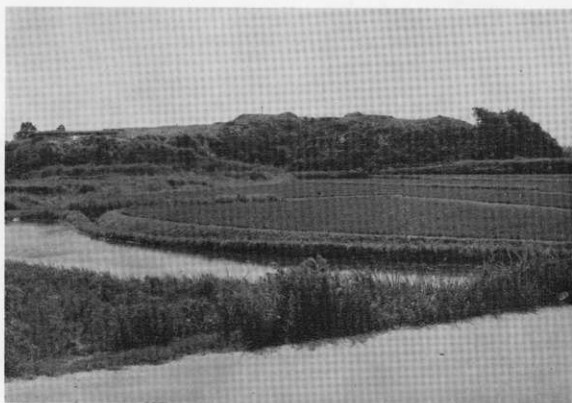
- 註(1) 村上英之助「月の輪古墳出土鉄器の原料について」『たたら研究』第9号 1962。
 (2) 長谷川熊彦「大陸製鉄技術のわが国古代への伝播」『日本製鉄史論』所収。たたら研究会編1970。
 (3) 土田定次郎「朝鮮鉄鏝論」(海外製鉄原料委員会編「東亞に於ける鉄鏝及び滿鐵鏝」朝鮮中共編) 1944 霞ヶ関書房。
 (4) 大澤正巳・山本信夫「鉄鏝の新例に関する検討」『考古学雑誌』第62巻第4号 1977。
 (5) 大澤正巳「福岡平野を中心とした出土した鉄鏝の分析」『広石古墳群』福岡市教育委員会 1977。
 (6) 同上
 (7) 野上文助「古墳時代における鉄および鉄器生産の諸問題」『考古学研究』第15巻第2号 1967。

唐 人 塚 遺 跡

P L A T E S



(1) 唐人塚遺跡遠景 (北西から)



(2) 唐人塚遺跡遠景 (西から)



唐人塚遺跡全景（南から）



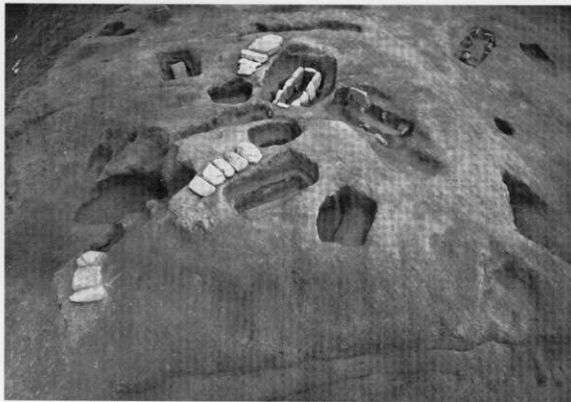
唐人塚遺跡遠景（北から）



(1) 唐人塚遺跡近景 (東から)



(2) 唐人塚遺跡近景 (南から)



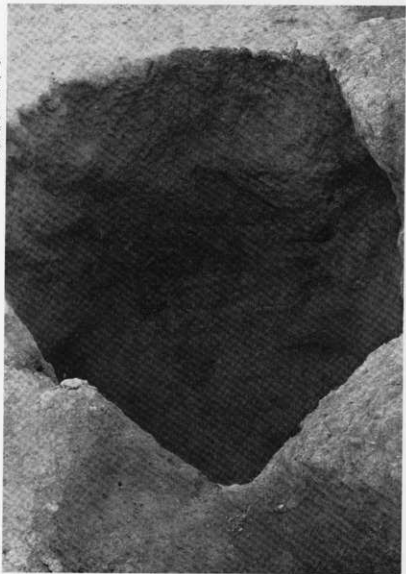
(1) 唐人塚2号墳遺構出土状態



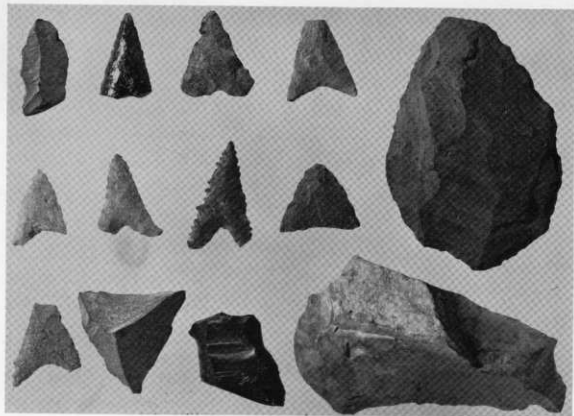
(2) 唐人塚2号墳地山整形面近景



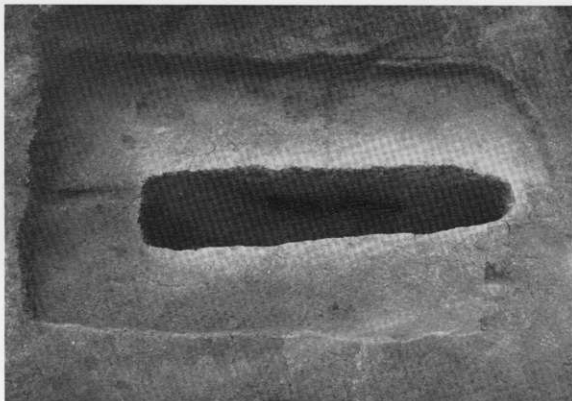
(2) 第1号土甕



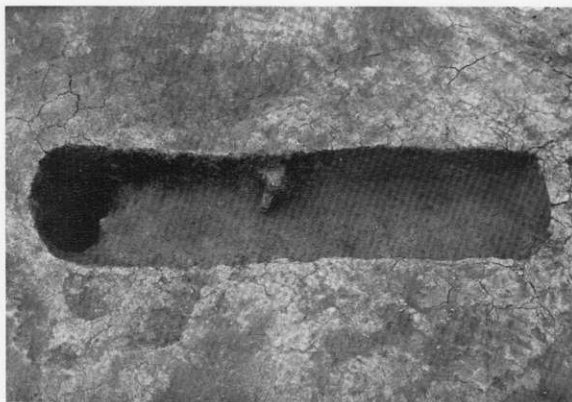
(1) 第1号貯藏穴



唐人塚遺跡出土石器類 (実大)



(1) 1—4号土壙墓

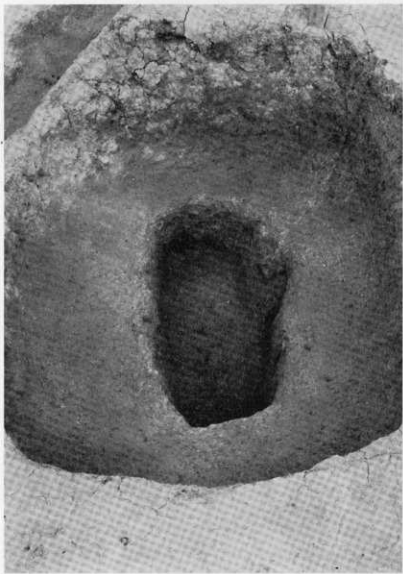


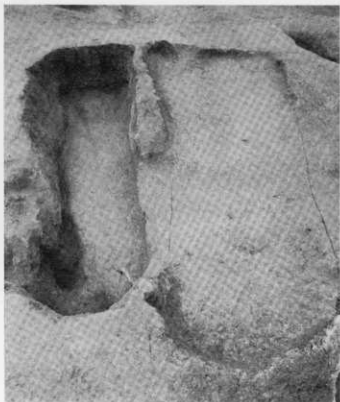
(2) 1—5号土壙墓

(2) 2—12号土横墓

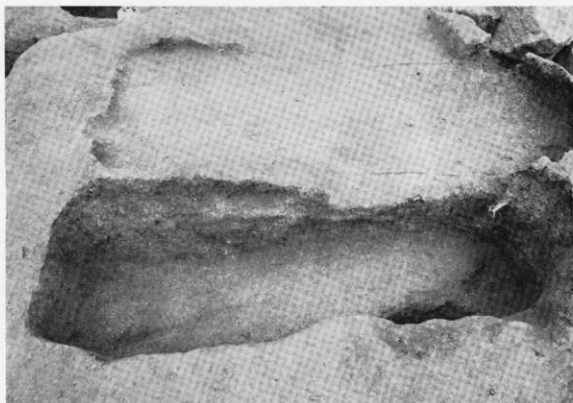


(1) 2—8号土横墓





(1) 3-1号土壇墓 (北東から)



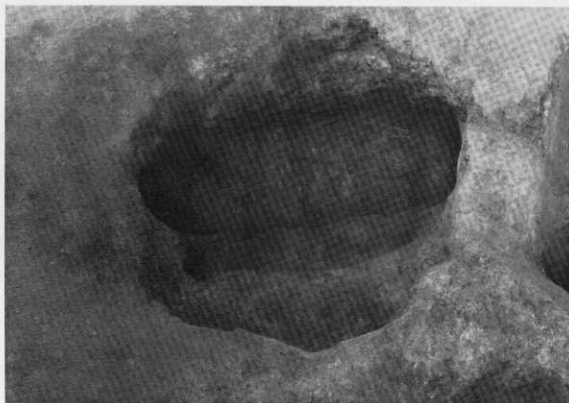
(2) 3-1号土壇墓 (南東から)



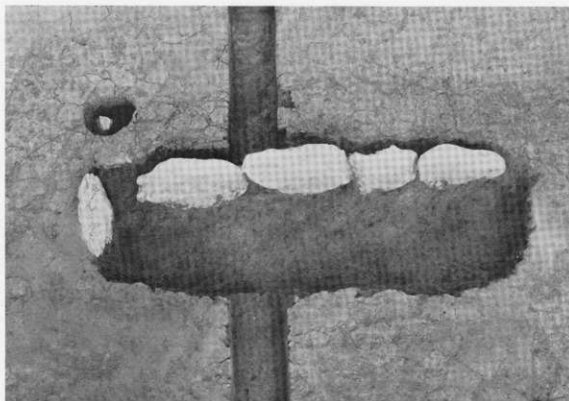
(1) 2—10号土壙墓



(2) 3—3号土壙墓



(1) 2—9号土墩墓



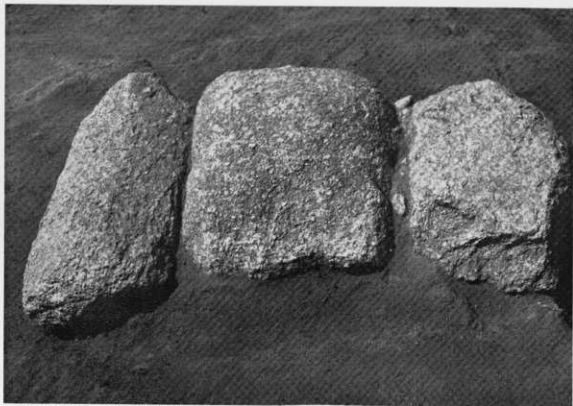
(2) 8—1号土墩墓



① 1—11号石蓋土壙墓



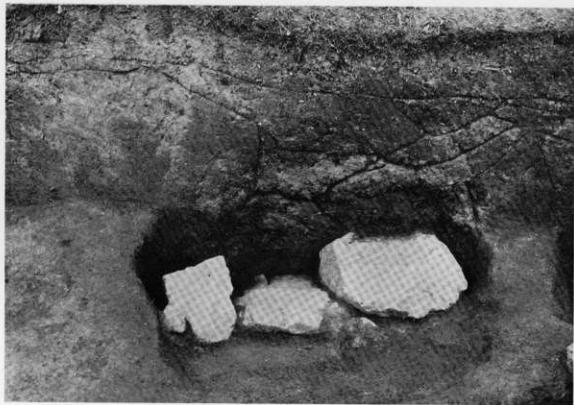
② 1—12号石蓋土壙墓



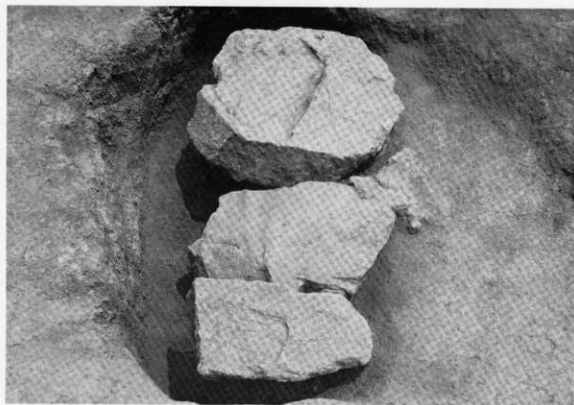
(1) 2—7号石盖土壙墓



(2) 1—11·1—12号石盖土壙墓

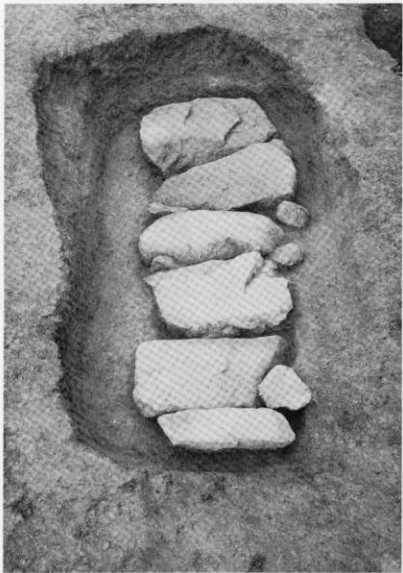


(1) 2—2号石蓋土壙墓と土層断面

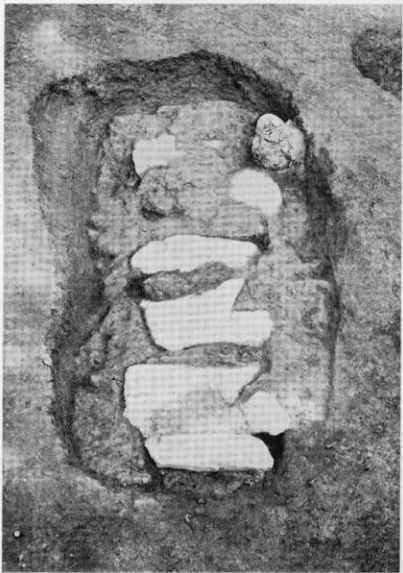


(2) 2—2号石蓋土壙墓

(2) 2-4号石蓋土壙墓被覆粘土除去後の状態

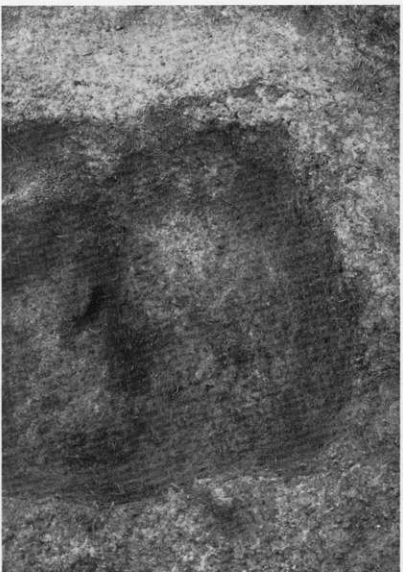


(1) 2-4号石蓋土壙墓検出状態

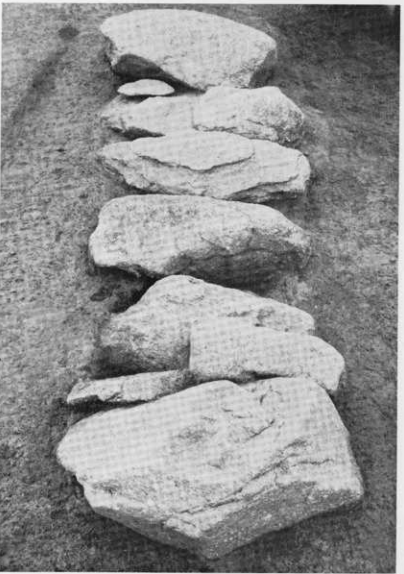




(1) 2—4号石蓋土壙墓 石蓋を取り除いた状態



(2) 2—4号石蓋土壙墓 粘土枕と遺物出土状態



(1) 5-1号石蓋土壙墓



(2) 5-1号石蓋土壙墓 石蓋を取り除いた状態



(1) 2—4号石盖土墩墓 棺外副葬土师器瓮出土状态



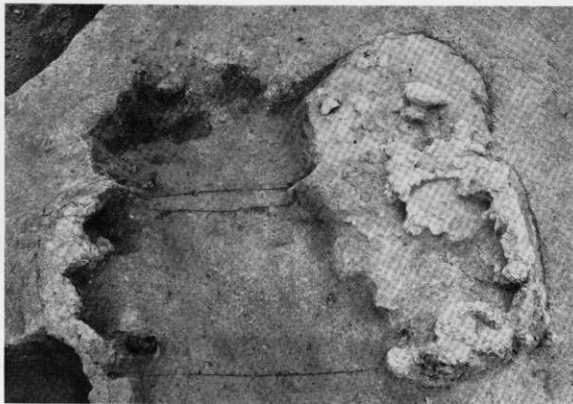
(2) 1—2号木棺墓内刀子出土状态



① 1—2号木棺墓



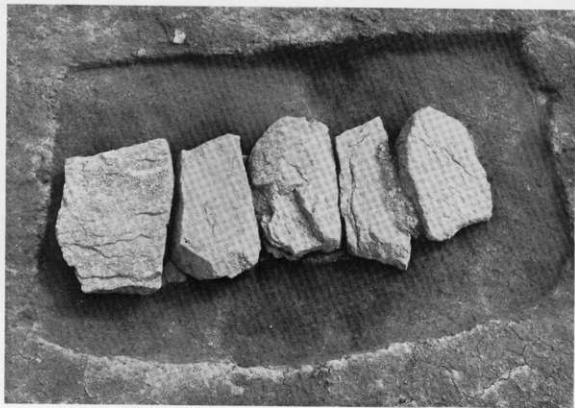
② 1—3号木棺墓



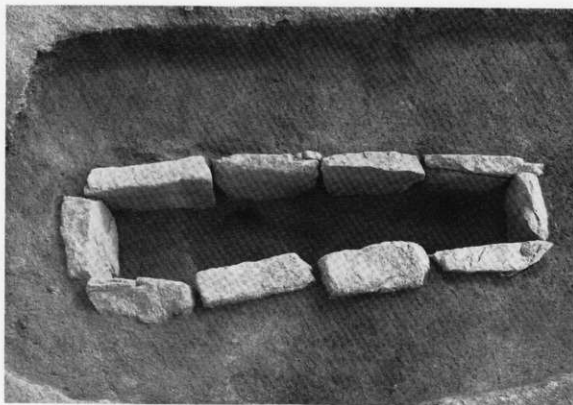
(1) 3—1号木棺墓(東棺)・土壙墓(西棺)



(2) 3—1号木棺内鉄斧出土状態



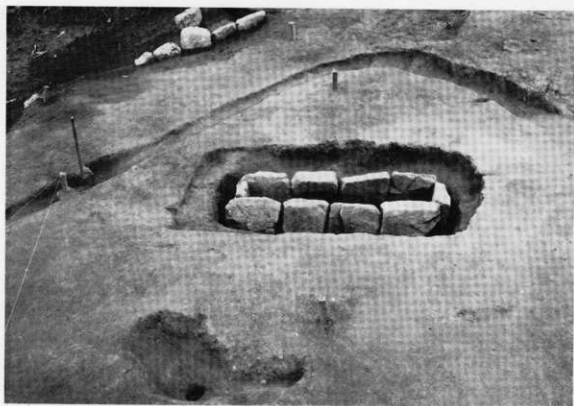
(1) 1-1号箱式石棺墓



(2) 1-1号箱式石棺墓 石蓋を取り除いた状態



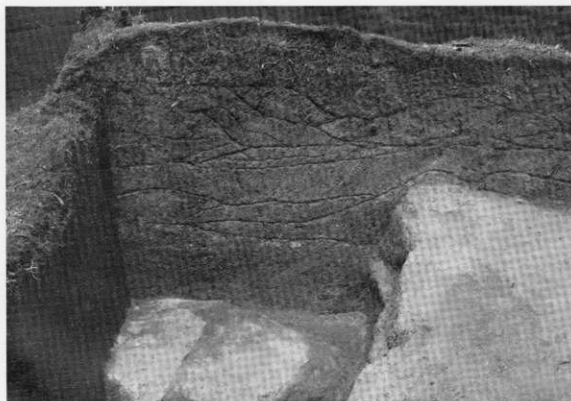
(1) 1-1号箱式石棺墓 石材を取り除いた状態



(2) 1-1号箱式石棺墓全景

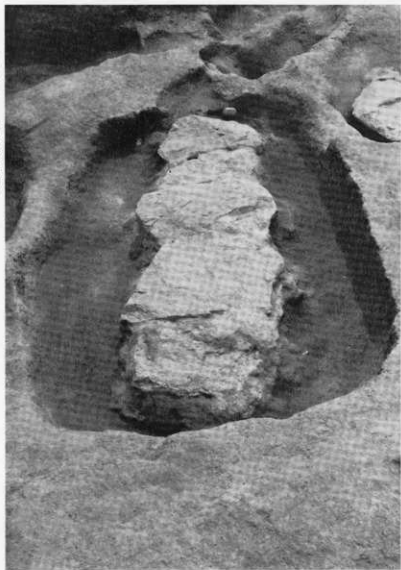


(1) 2-1号箱式石棺墓と土層断面(南壁)

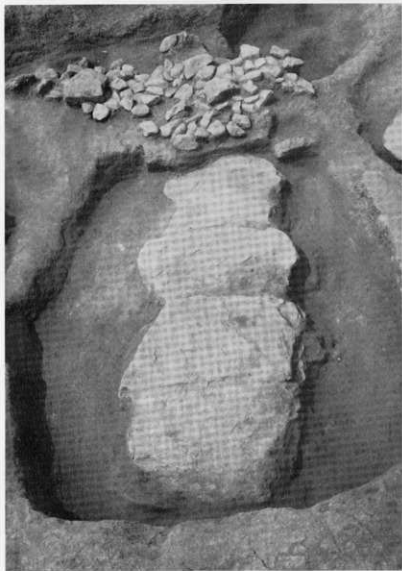


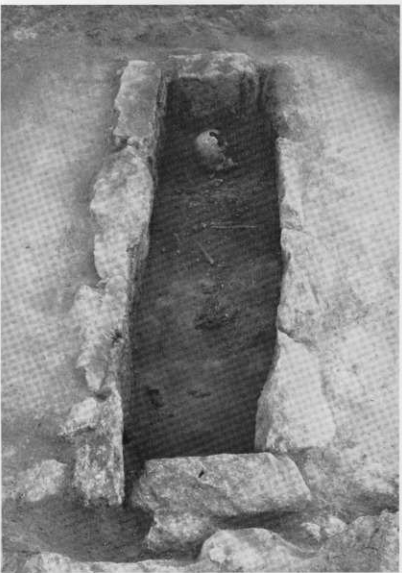
(2) 2-1号箱式石棺墓と土層断面(東壁)

(2) 2-1号箱式石棺墓



(1) 2-1号箱式石棺墓と配石遺構出土状態





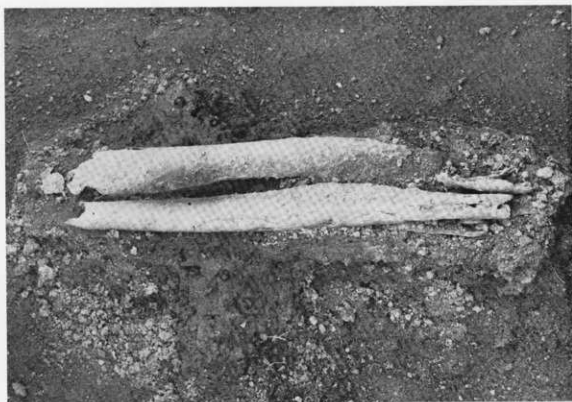
(1) 2-1号箱式石棺墓 人骨出土状態



(2) 2-1号箱式石棺墓 人骨と小玉出土状態

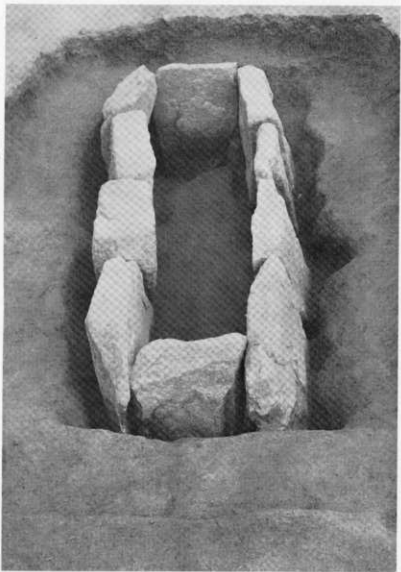


(1) 2-1号箱式石棺墓 石蓋被覆粘土中の施出土状態

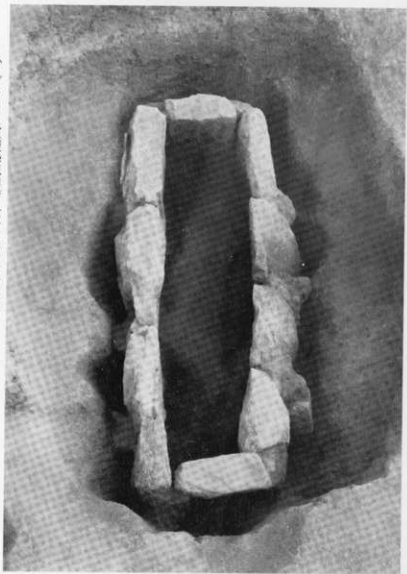


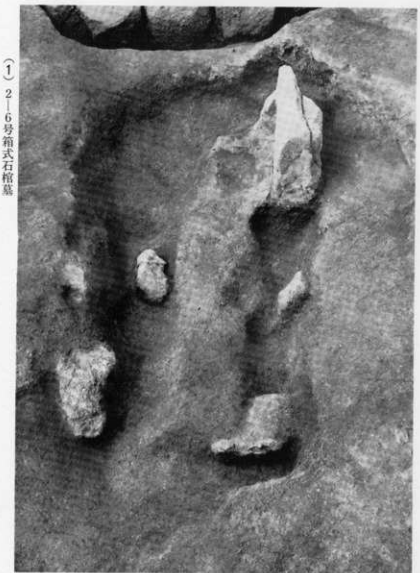
(2) 2-1号箱式石棺墓 小玉着装状態

(2) 2-1号箱式石棺墓 石棺構築状態

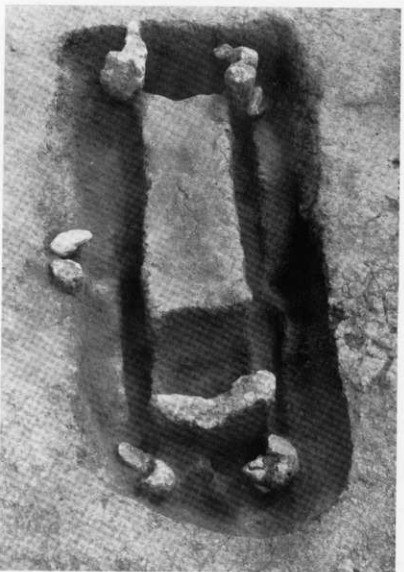


(1) 2-1号箱式石棺墓 棺材と粘土使用状態

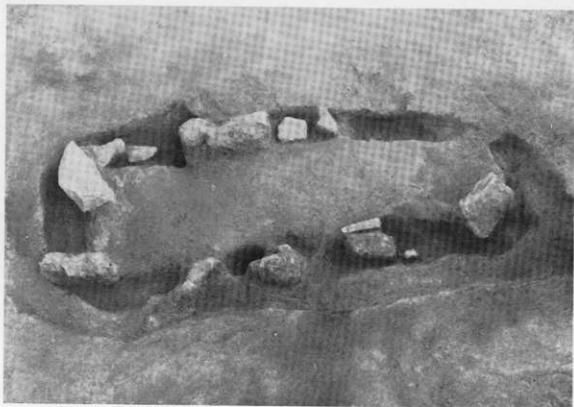




① 2—6号箱式石棺墓



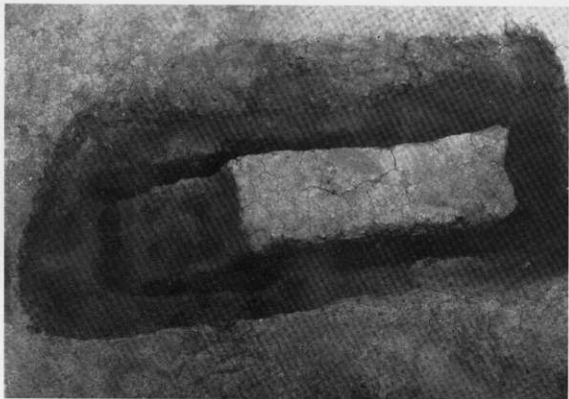
② 2—3号箱式石棺墓



(1) 2—5号箱式石棺墓



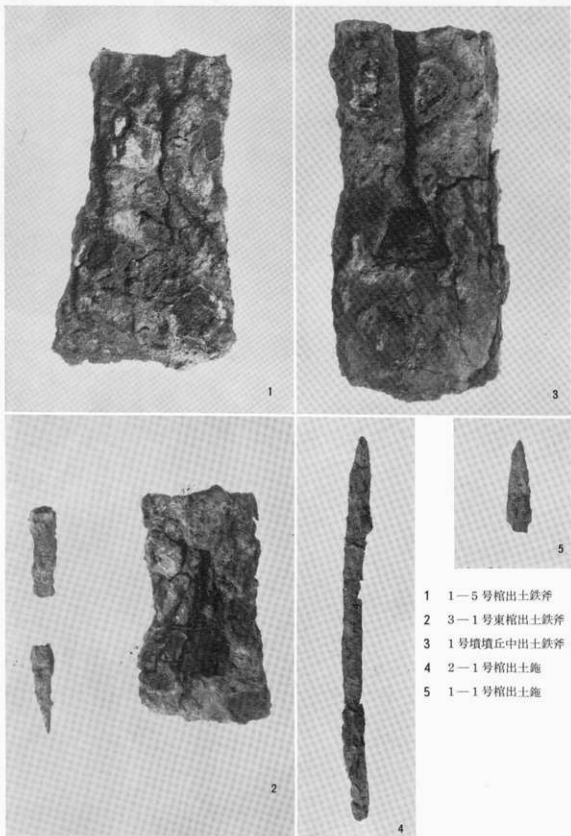
(2) 2—5号箱式石棺墓内铁鎌出土状态



(1) 2-3号箱式石棺墓 石材抜き跡の状態



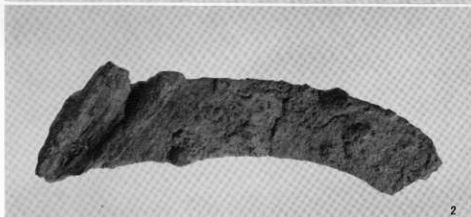
(2) 3-2号箱式石棺墓



- 1 1—5号棺出土铁斧
- 2 3—1号东棺出土铁斧
- 3 1号坟坛丘中出土铁斧
- 4 2—1号棺出土土铤
- 5 1—1号棺出土土铤



1



2



3



4

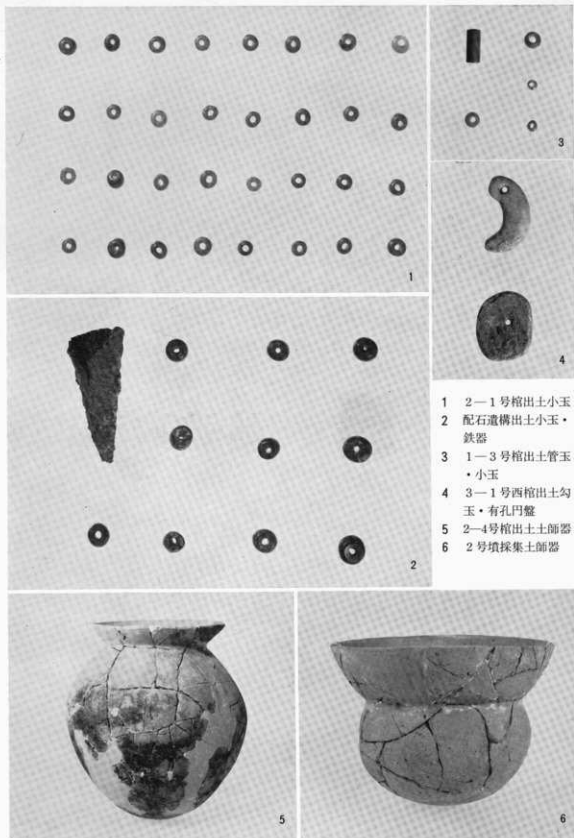


5



6

1 2—5号棺出土铁鎌 2 性格不明遺構出土铁鎌 3 性格不明遺構出土铁鋤先
4 1—2号棺出土刀子 5 2—4号棺出土刀子 6 5—1号棺出土刀子



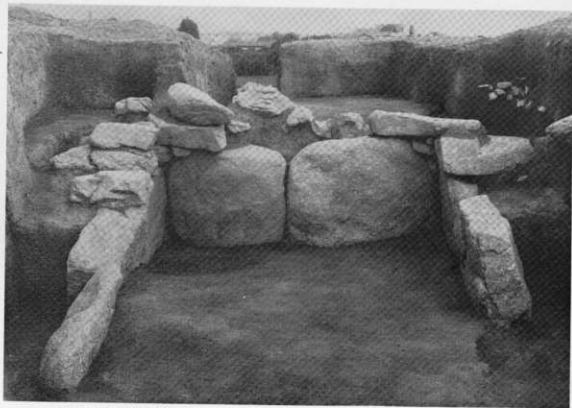
唐人塚遺跡出土遺物 玉類・鉄器・土師器



(1) 1号墳調査前全景(北から)



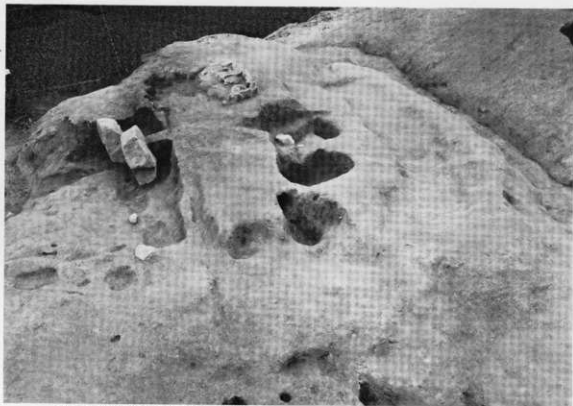
(2) 1号墳墳丘と石室全景(北西から)



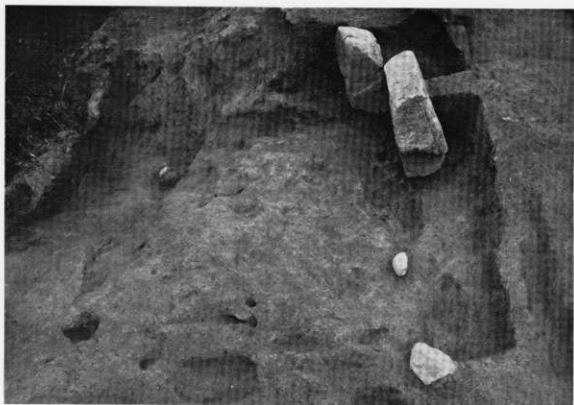
(1) 1号墳石室近景



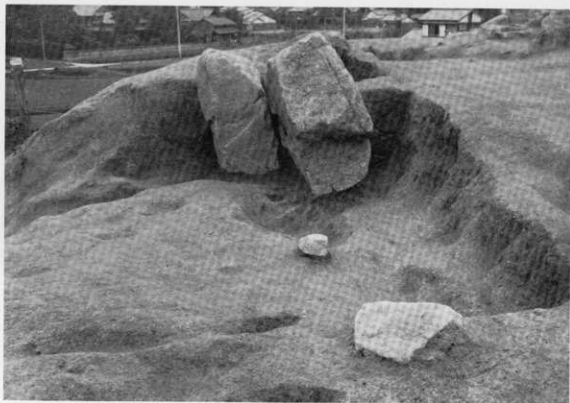
(2) 1号墳石室全景



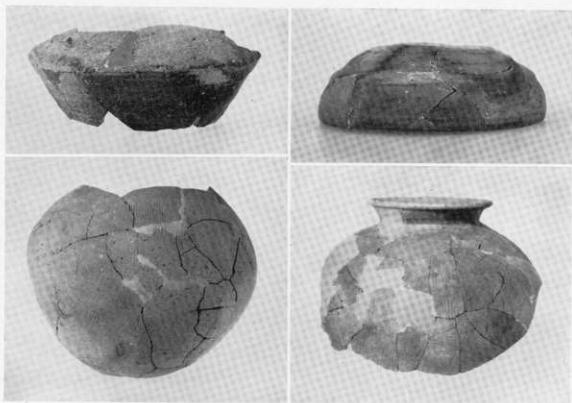
(1) 3号墳墳丘と石室全景 (南東から)



(2) 3号墳石室近景 (南東から)



(1) 3号墳石室と墓塚近景



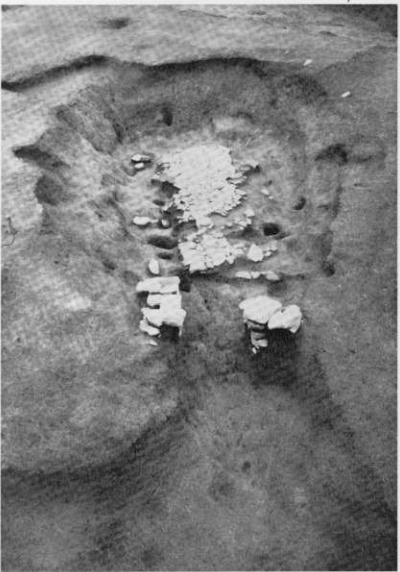
(2) 3号墳出土遺物 須恵器



(1) 4号墳全景(西から)



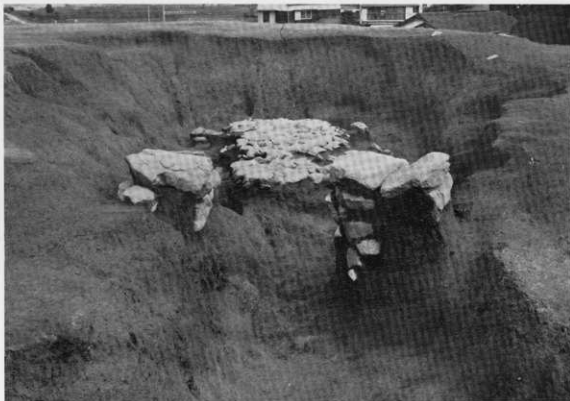
(2) 4号墳周溝と石室(南から)



(↑) 4号墳石室全景(南から)



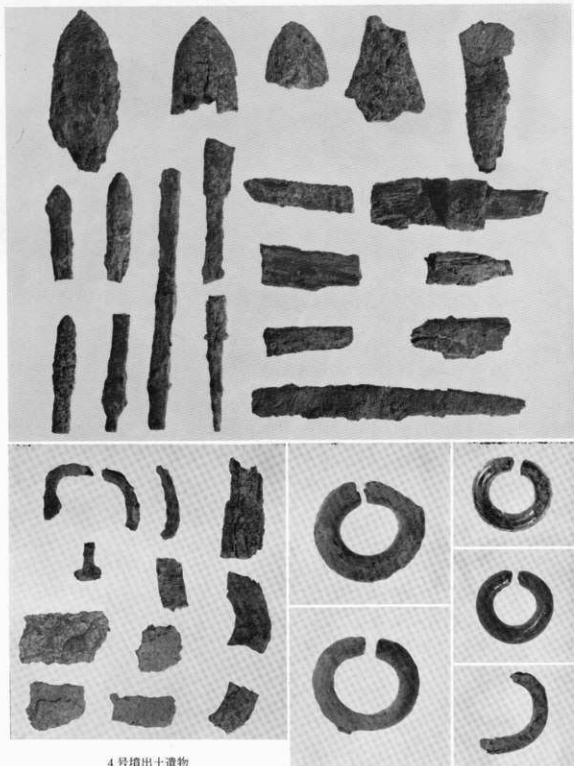
(2) 4号墳石室近景(北から)



(1) 4号墳石室近景(墓道から)



(2) 4号墳周溝土層断面

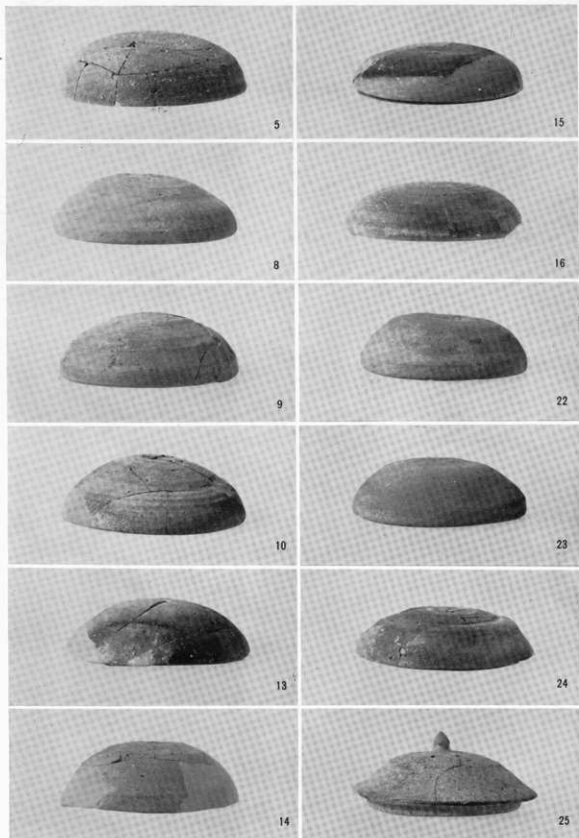


4号墳出土遺物

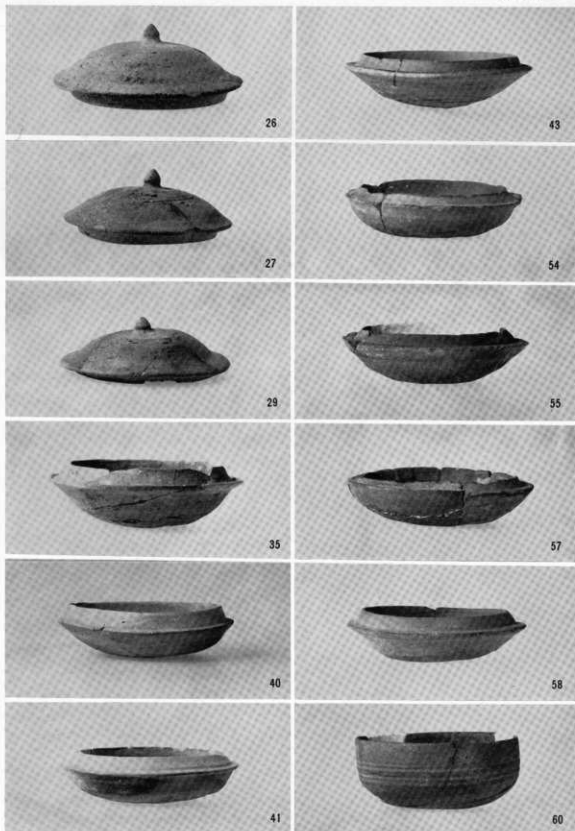
上 鉄鏃・刀子

下左 鉸具・鈎・大刀片・鉞

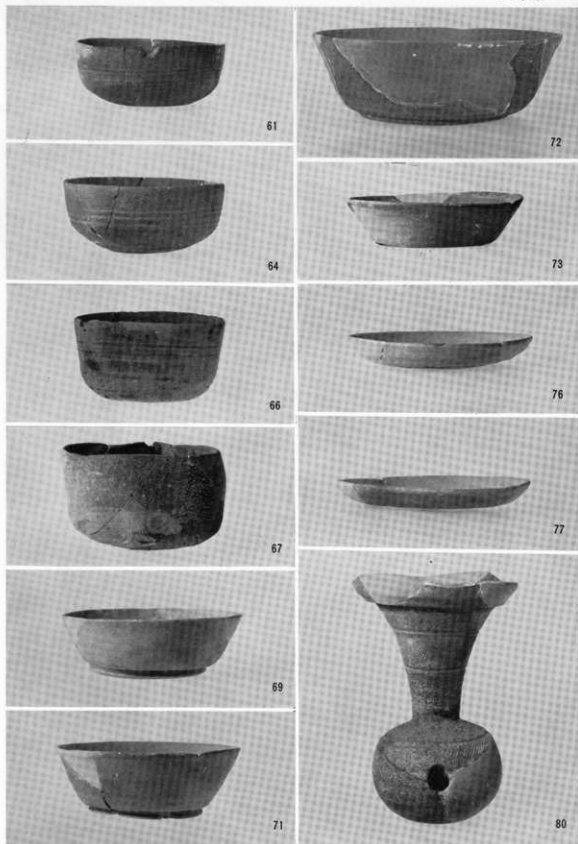
下右 耳環



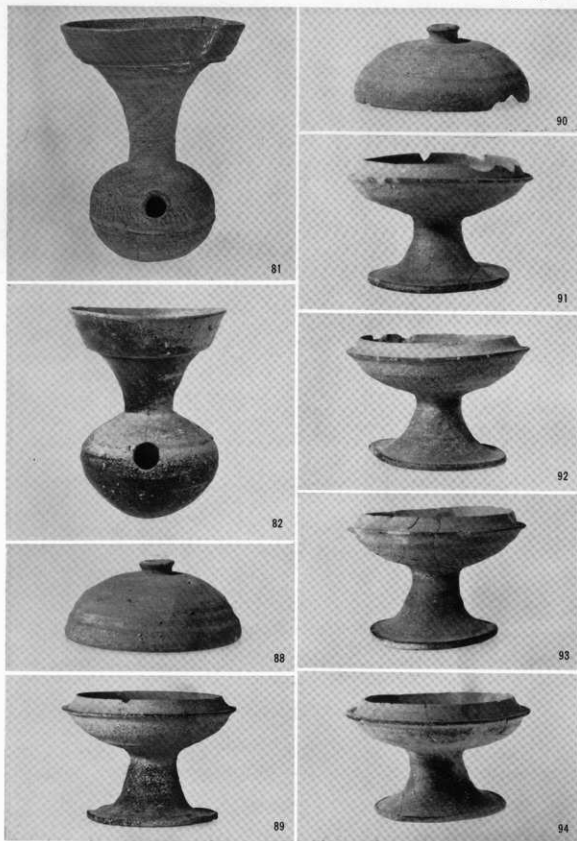
4号墳出土遺物 須恵器その1



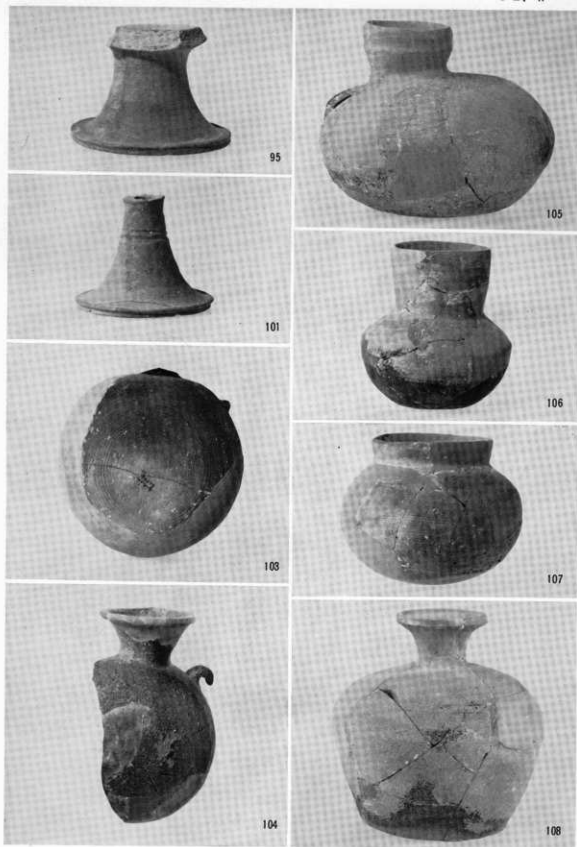
4号墳出土遺物 須恵器その2



4号墳出土遺物 須恵器その3



4号墳出土遺物 須恵器その4



4号墳出土遺物 須恵器その5



114



116



118



119



115



120



122



123



(1) 5号墳全景(西から)



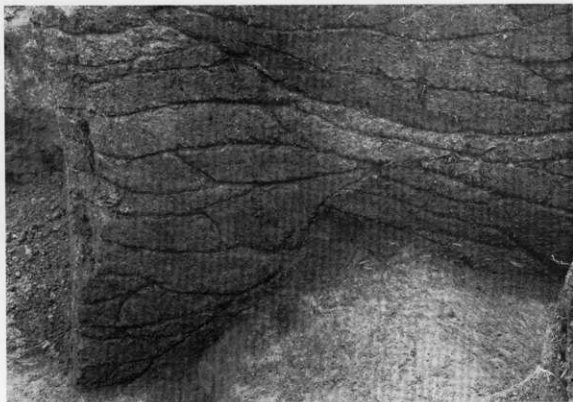
(2) 5号墳全景(北西から)



(1) 5号墳周溝と石室(南から)



(2) 5号墳周溝近景(東南から)



(1) 5号墳右側壁裏込めの状態



(2) 5号墳周溝土層断面(北から)



(1) 5号墳石室全景 (南から)



(2) 5号墳石室近景 (墓道から)



(1) 5号墳石室近景 (美道から)



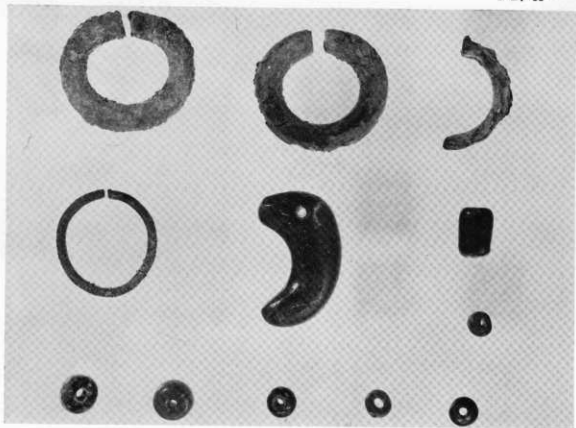
(2) 5号墳石室奥壁 (南から)



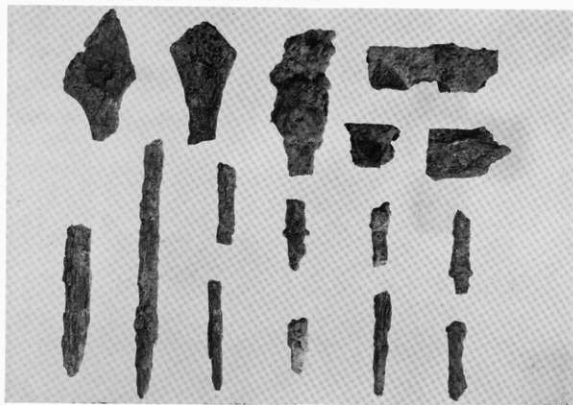
(1) 5号墳石室近景 (北から)



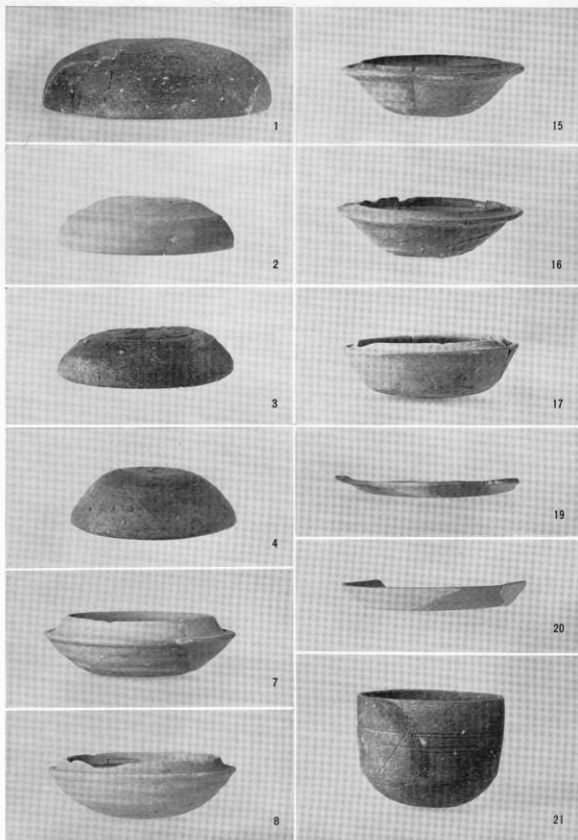
(2) 5号墳墓道中遺物出土状態



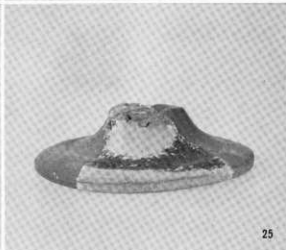
(1) 5号墳出土遺物 耳環・勾玉・管玉・小玉



(2) 5号墳出土遺物 鉄片・短刀

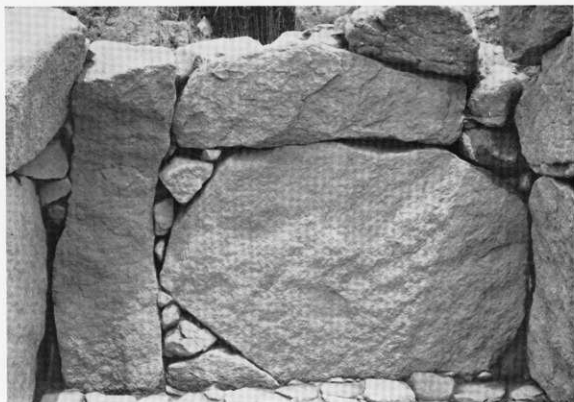


5号墳出土遺物 須恵器

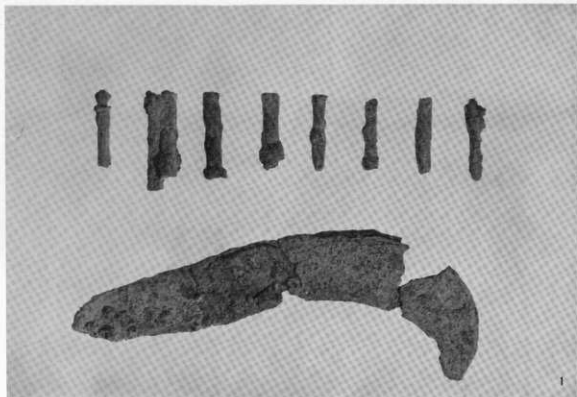




(1) 6号墳石室近景(南から)



(2) 6号墳石室奥壁(南から)



1



2



4



5



6



7

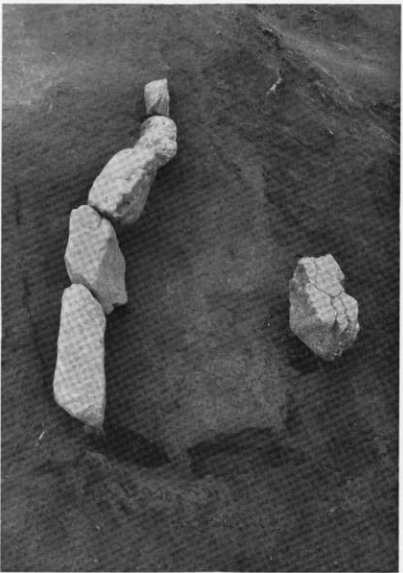
6号墳出土遺物

- 1 鉄 鉄
鉄 鎌
2 耳 環
小 玉
粟 玉
3~7 土師器

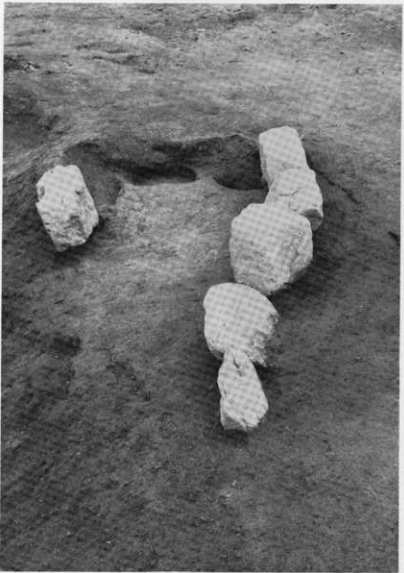


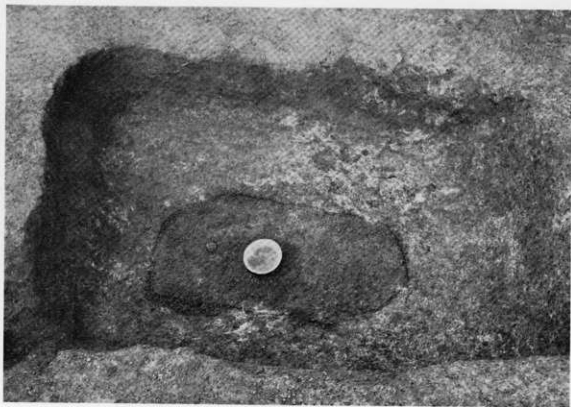
3

(2) 7号墳石室全景(北東から)

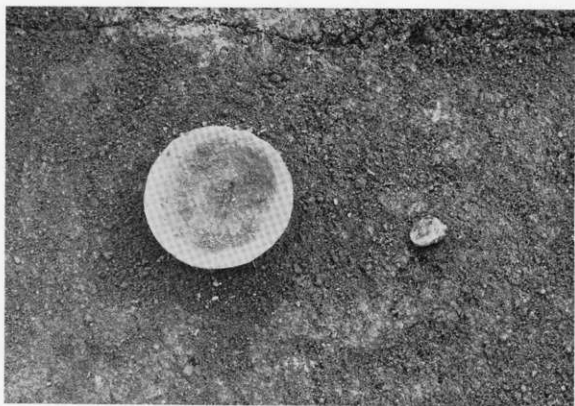


(1) 7号墳石室全景(南西から)





(1) 1号近世土壙墓

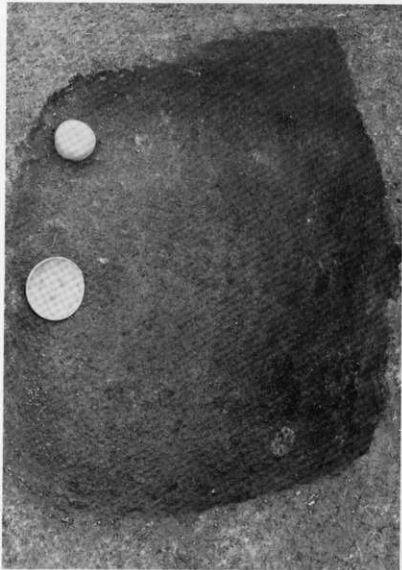


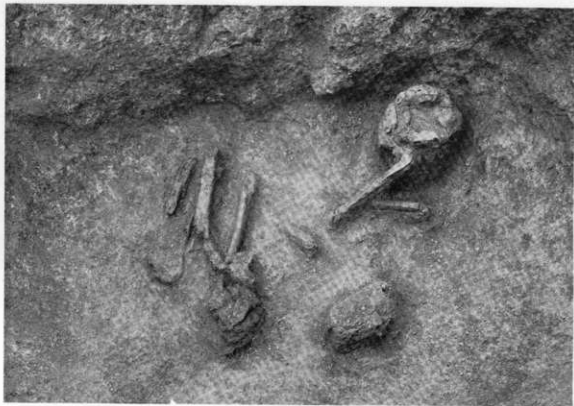
(2) 1号近世土壙墓 土師器・銭貨出土状態

(2) 3号近世土壙墓

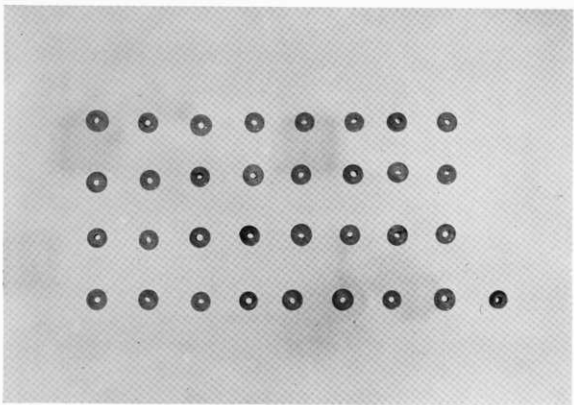


(1) 2号近世土壙墓





(1) 3号近世土壙墓 人骨出土状态



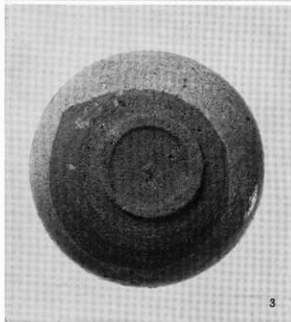
(2) 3号近世土壙墓出土遺物 数珠玉



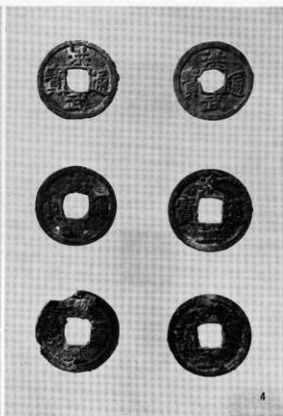
1



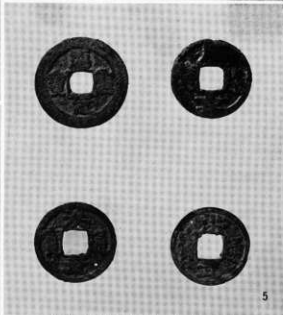
2



3



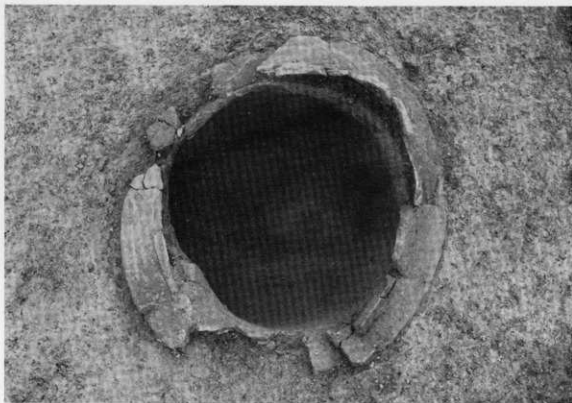
4



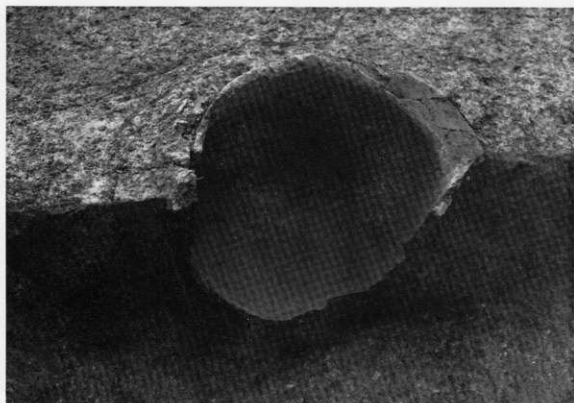
5

近世土壠墓出土遺物 陶器・銭貨

- 1 2号棺出土陶器(表)
- 2 同 上 (横)
- 3 同 上 (裏)
- 4 1号棺出土銭貨
- 5 3号棺出土銭貨



(1) 菱棺墓



(2) 菱棺墓墳と断面

IV 前田遺跡の調査

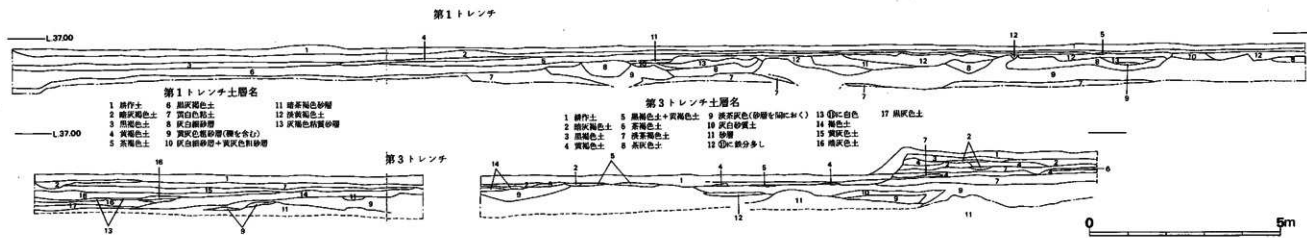


Fig. 108 前田遺跡土層断面図 (縮尺1/100)

Ⅳ 前田遺跡の調査

1 調査の経過

前田遺跡の調査は1972年（昭和47年）11月27日から12月28日まで実施した。
調査団は下記のとおりである。

調査担当者 福岡県教育庁文化課技術主査 西谷 正
調査補助員 菊池法信、瀬戸 隆、山崎 謙
庶務担当者 福岡県教育庁文化課主事 植田 實

以下に、調査日誌によって経過をたどってみよう。

- 11月27日（月） 曇時々雨 第1～第3トレンチを設定して発掘調査を開始する。現場小屋の設置を行う。
- 11月28日（火） 曇時々小雨 午前中現場小屋の設置を行い、午後から第3トレンチを掘り進む。層位は耕土、床土、細砂層、粗砂層の順である。
- 11月29日（水） 晴 第3トレンチの発掘を続行する。細砂層・粗砂層から弥生式土器、土師器、須恵器が出土する。東半部は湧水があるため、ポンプ到着後に掘ることにする。
- 11月30日（木） 雨のち曇 遺物整理を行う。
- 12月1日～2日、4日～6日 晴 A地区の表土削ぎ作業を行い、表土から須恵器、土師器を検出する。西半部分の表土除去作業にとりかかる。
- 12月7日（木） 曇のち雨 A地区西半部分の表土除去作業を終り遺構を検出する。長方形のピット状のものを検出する。
- 12月8日（金） 晴 A地区追掘検出。長方形の土壌のほかには不整形なピット若干と断面U字形で北から南へ走る溝を検出する。
- 12月9日（土） 晴 B地区の表土削ぎ作業を行う。西側から、多量の鉄滓及びみいごの破片らしきものを検出する。A地区は清掃と若干のピットらしいものを発掘する。
- 12月11日（月） 晴 B地区発掘続行。B地区東半表土除去作業を開始する。
- 12月12日（火） 雨のち曇 雨天のため現場作業中止。断面と遺物整理を行う。
- 12月13日（水） 晴時々雪 B地区表土削ぎ作業を行う。円弧状を呈する溝が検出される。
- 12月14日（木） 晴 B地区表土削ぎ作業を続行する。南半部では表土をさらに10cmほど掘り下げて遺構を追う。礎石の抜き跡らしきものが認められる。
- 12月15日（金） 晴 B地区表土除去作業を続行する。昨日と同様に東南側から遺構を検出して掘る。柱穴と思われる多数のピットを検出する。
- 12月16日（土） 晴 唐人塚遺跡の丘陵北側裾部を伐採し、草木を焼く。B地区の表土除去作業は一応終了。周溝を含めた遺構掘りを行う。

- 12月18日(月) 晴 円形の周溝を掘り、多量の土器片を検出する。他の遺構掘りも実施する。
- 12月19日(火) 晴 B地区掘り残しの遺構検出とピットを掘る。A地区第1トレンチ発掘開始。
- 12月20日(水) 晴 A・B地区清掃後全景写真を撮る。午後から実測のための割り付けを行い、第1トレンチと第3トレンチの補足発掘を行う。A地区東南隅で焼土面があり、追求した結果、カマドと思われる。
- 12月21日(木) 晴 B地区平板測量で遺構配置図を作成する。唐人塚遺跡北西部の表土除去作業を開始する。
- 12月22日(金) 晴 A・B地区の平板測量による遺構配置図作成。B地区実測のための水糸割りを完了する。唐人塚北西部の表土除去作業を終る。
- 12月23日(土) 晴時々小雨 A地区の割り付け後A地区から実測を開始する。水田面に設定した第1、第3トレンチは縮尺1/100で平面図を作成する。唐人塚遺跡は奈良時代須恵器小片を2片ほど採集したが遺構は検出されない。
- 12月24日(日) 晴 A地区平面を実測終了。B地区は実測を続行する。唐人塚遺跡は最上段部の表土除去作業を行い遺構を検出する。
- 12月25日(月) 雨 雨のため作業中止。
- 12月26日(火) 晴 A地区第1トレンチは土層断面図を作成する。第3トレンチは土層断面図作成に着手する。B地区平面実測を続行する。唐人塚遺跡はトレンチ発掘続行。
- 12月27日(水) 曇 B地区平面実測続行。第3トレンチ土層断面の実測続行。唐人塚遺跡はトレンチによる発掘を終了し、平板測量で発掘区を入れる。
- 12月28日(木) 曇 B地区の実測を終了し、すべての調査を終る。

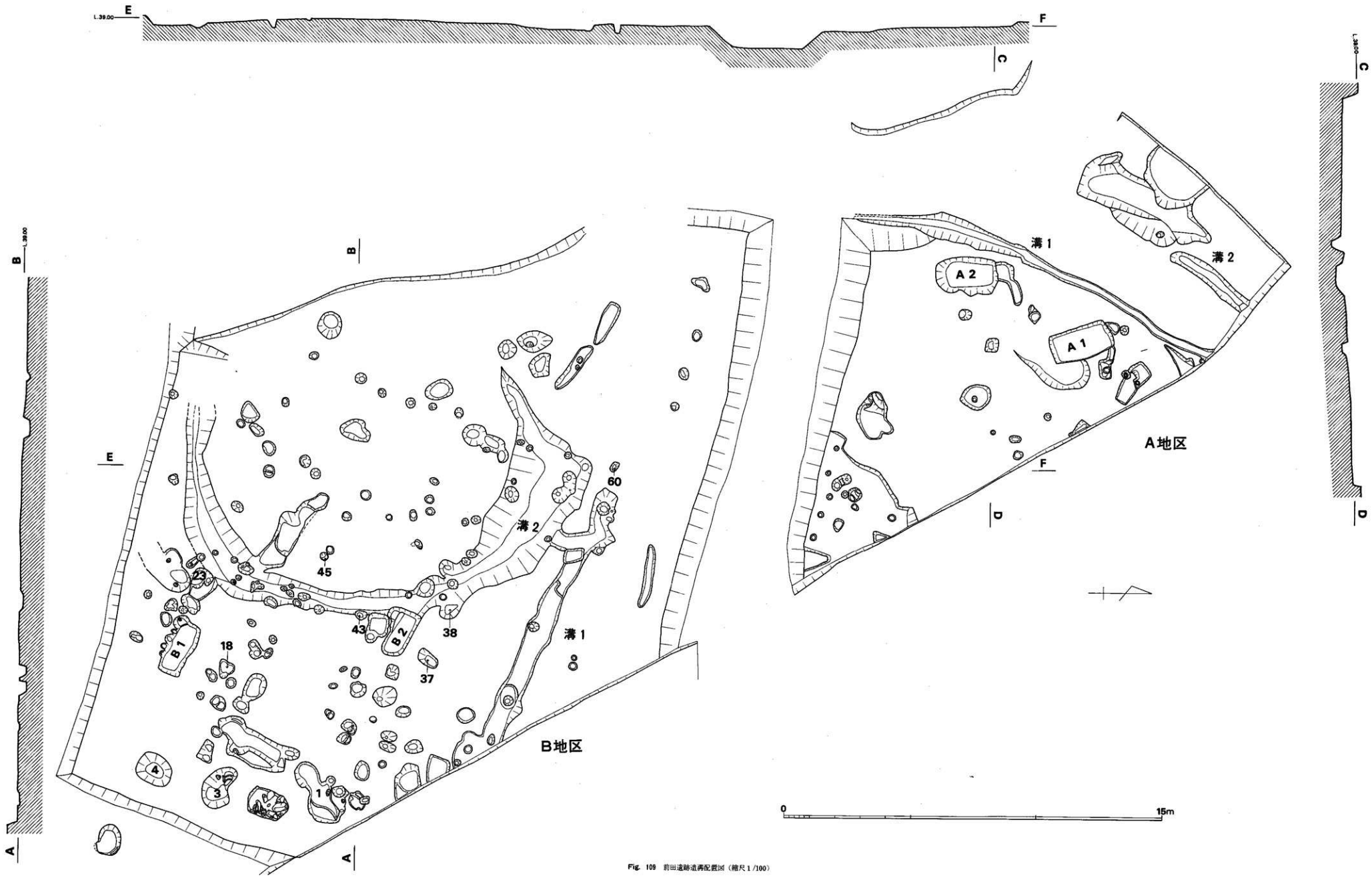


Fig. 109 前出遺跡遺構配置図 (縮尺 1/100)

2 調査の内容

遺構 (Fig.109, P L, 66)

遺構としては長方形の土壇、円形の溝、溝、大小のピット群を検出した。長方形の土壇は壁面がしっかりしており、土壇墓かとも考えられる。また円形の溝は古墳の周溝かとも思われるが、内部主体が検出されないので断定はできない。

柱穴、根石

多数のピットが検出されており、その規模は15cm~140cmほどであり、そのうちでも30cm~50cm大のものが最も多い。これらのものは柱穴になるものが多いと考えられるが建物としてのまともはみせていない。B地区の西壁近くからは1.3m大の大きなものが検出されている。またピットの中に石が詰っていて根石と考えられるものも検出されたがまともはない。ピッ

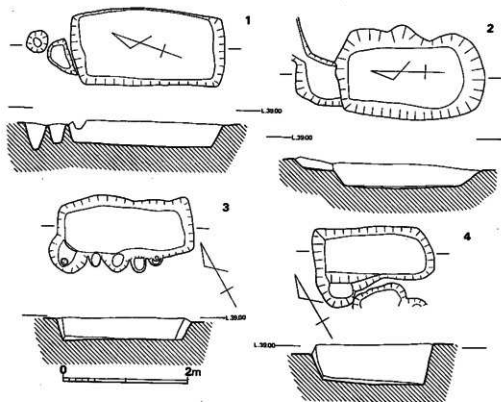


Fig. 110 土壇突刺図 (縮尺1/60)

トからは若干の土師器片、須恵器片とともに鉄滓が検出されている。鉄滓を出土したピットはB地区の1、3、4、18、23、37、38、43、45、60である。

土壌

土壌墓かとも思われる形状のものがA地区で2、B地区で2検出された。

A-1土壌 (Fig. 110-1)

平面形は長方形を呈しており、規模は長さ2.5m幅1.25m深さは40cmである。底面での規模は長さ2.1m、幅1.1mであり、床面は北側がやや高くなる。4壁とも整然と切り込まれており、整っている。

中からは9世紀代の須恵器、土師器の破片が検出されている。

A-2土壌 (Fig. 110-2)

平面形は隅丸長方形を呈しており、規模は長さ2.4m、幅1.4m、深さ0.29mである。底面では南側小口壁が弧状となる長方形を呈しており、規模は長さ1.85m、幅0.9mであり、床面は若干丸味をもつ。

中からは鉄滓、須恵器・土師器片が出土しており、遺物から見た年代は平安初期と思われる。

B-1土壌 (Fig. 110-3)

平面形は不整ながらも長方形を呈しており、規模は長さ2.2m、幅0.9m、深さ30cmである。南壁は5つのピットによって切られている。底面での規模は長さ1.85m、幅0.7mであり、床面はほぼ平坦である。

B-2土壌 (Fig. 110-4)

南壁をピットが切っている。平面形は西小口壁が弧状ぎみの長方形を呈している。規模は長さ1.9m、幅0.85m、深さ0.66mである。底面は西側が低くなっており、底面での規模は長さ1.6m、幅0.65mである。中からは鉄釘が1本出土しており、土壌の性格としては土壌墓が考えられる。

溝

A地区では2条、B地区では3条の溝が検出されたが、B地区の1条の溝は浅いため、いわゆる溝状を呈していない。

A-1溝

幅は30cm～100cmであり南側部で幅広となる。深さは中央部で30cm程であり、北から南へ流路をとるものである。古墳時代から奈良、平安初期の遺物を出土している。

A-2溝

幅60cmの溝であり3.5m程確認した。深さは中央部で20cmである。底面のレベルから流路は南から北方向をとるものと判断できる。新しい遺構である。

B-1溝

幅60cm～80cmで深さ12.5cmの溝であり12.5m程確認されている。深さは中央部で20cmであり、底面から若干のビットが検出されている。底面のレベルは東が高く西が低いものである。水が流れるものとすれば西側で行き止まりとなる。

B-2 溝

円形の溝である。幅は80cm～280cmであるが、深さは10cmと浅いものである。溝底面には多数のビットが検出されている。古墳の周溝かとも考えられるが浅りが非常に悪く、内部主体も検出されていない事から即断はできない。しかし周溝底面よりも石室墓底面が若干高ければ、墓塚は残らなくても良い事にはなり、古墳の周溝とも充分考えられ得る。溝の直径は溝外端部で15m～16mである。中からは須恵器片・土師器片が出土している。古墳時代の遺物としては杯身が1個体あり、遺物の年代は7世紀初頭と考えられる。

出土遺物

出土状況

表土層から須恵器片・土師器片・瓦・青磁片・鉄滓などが検出されているが、遺構内からは土師器、須恵器、鉄滓が若干検出されただけである。

出土遺物を列記すれば次の通りである。

(1) 石器	石 匙	2
	石 鏃	3
(2) 鉄 器	鉄 鎌	1
	鉄 釘	1
(3) 土 器	弥生式土器	若干
	須恵器・土師器	若干
	青・白磁	若干
(4) その他	古 瓦	若干
	フイゴの羽口	1
	鉄 滓	若干

(川述昭人)

石器 (Fig. 111)

石匙(1・2) 1は、サヌカイトの横割ぎの剝片を素材とし、バルブ側につまみを付け、エッジの部分に押圧剝離によって刃部を作っている。刃部長約6cmを測る。B地区表土中より出土。2は、サヌカイトの縦長剝片を素材とし、バルブ側につまみを付けている。刃部調整は、ブランテング状にC面側からエッジの部分だけに施されている。長さ6.3cmを測る。B地区表土中より出土。

石鏃(3・4) 3は、黒曜石の剝片を素材とし、全体形を二等辺三角形に仕上げ、加工は素

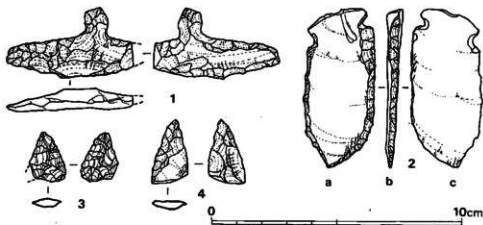


Fig. 111 石器実測図(縮尺2/3)

雑で挟り込みは施されていない。最大長19mm、最大幅19mmを測る。4は、サヌカイトを素材とし、仕上げは雑である。末端部は折断している。最大長2.6cm、最大幅1.5cmを測る。両者共A地区表土中出土。

(平ノ内幸治)

鉄器 (Fig. 112)

鉄釘(1) B地区の2号土壌からの出土品である。先端部を一部欠損しており、現存長は4.1cmである。幅5mmであり断面は方形を呈する角釘である。

鉄鎌(2) 表土からの出土品である。全長17.5cm、中央部幅3.0cm、厚さ5mmである。基部は刃先に対して左側に折りまげた部分があり、柄がつくものであるがこの部分に木質は遺存していなかった。

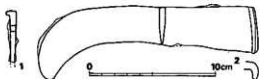


Fig. 112 鉄器実測図(縮尺1/2)

遺構内出土遺物 (Fig. 113—1～9)

須恵器 (1～5)

1はA地区の罨1からの出土品である。立上りは1.3cmであり、内傾する。復元口径は14cm、蓋受け部径16.8cm、器高5cm弱の大形品である。蓋受けは太く、しっかりしており、蓋をかぶせて焼いたため、蓋受け部以下の外面は灰白色の自然釉が付着するが、内面にはない。底部外面はヘラ削りを施すが以外は横ナデ調整である。暗灰色を呈しており、焼成、胎土ともに良好である。

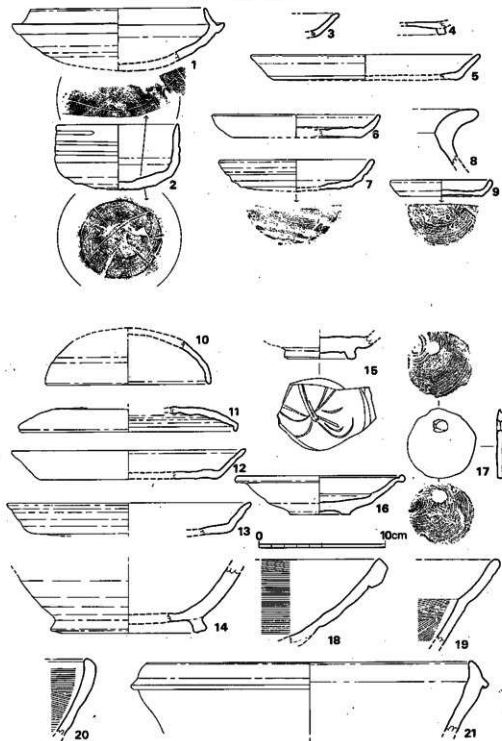


Fig. 113 土器実測図 (縮尺1/3)

2は身に蓋受けを有さないものであり、逆に蓋に身受けのかえりがつくものである。底部は広範囲をヘラ削りしてあり、体部はほぼ直立して口縁となる。体部外面には螺旋状に沈線が入り、所によっては2条と3条になる。器壁は全体に厚手造りである。底部外面と内面には異なったヘラ記号を有している。色調は暗小豆色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。口径9.8cm、器高5.1cmである。円形の周溝からの出土である。

3はA-1土壌からの出土品である。皿の小片である、残存部は内外面ともに横ナゲ調整である。色調は灰褐色を呈しており、焼成は不良である。胎土には砂粒を含む。

4は高台付杯の高台部のみ的小片であり、B地区の土壌からの出土である。高台は短く、内側的一端のみが地につく形態である。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土は精選されていて良い。

5は皿であり、ビット5からの出土品である。口径18.2cm、器高2.1cmである。ヘラ切り底であり、体部は横ナゲを施す。色調は灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。

土師器(6~9)

6は皿であり、ビット16から出土した。口径13.4cm、器高1.8cmである。ヘラ切り底である。体部外面には一部に煤が付着している。灰褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。

7はビット22から出土した。糸切り底の皿である。体部外面は横ナゲによる凹凸が著しくつく。口径12.4cm、器高2.5cmのものである。色調は淡黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土は精選されていて良い。

9はビット48から出土した。糸切り底の小皿である。口径8.1cm、器高1.3cmである。黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。

8は甕の口頸部であり、ビット5から出土したものである。胴部内面はヘラ削りを施し、以外は横ナゲ調整である。灰黄褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。

表土出土遺物

須恵器(10~14)

杯蓋(10・11)10は口径13.1cmであり、器高は4cm~4.5cm程のものである。全体に丸く作られている。現存する内外面はすべて横ナゲ調整である。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土には小砂粒を含んでいる。11は口縁端部を短くおろした形態のものである。口径17.2cm。明灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土に細砂粒を含む。

皿(12・13)12は口径18.5cm、器高2.4cmであり、13は口径19.4cm、器高2.6cmのものである。底部はともにヘラ切り未調整である。12は明灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土

は精選されていてよい。13は灰白色を呈しており、焼成は不良である。胎土には細砂粒を含む。

台付壺(14) 下半部を残存するのみである。体部外面は広範囲にヘラ削りを施している。器壁は非常に厚い。灰色を呈しており、焼成は良好である。胎土に小砂粒を含んでいる。

青磁(15) 底部を残存するのみである。淡緑色の釉がかかり、高台底面にまで一部及んでいる。龍泉系青磁である。

陶器(16) 台付皿である。口径13.5cm、器高3.1cmである。内面見込みの部分には3足のトチの目跡がある。胎土には細砂粒を多量に含んでいる。釉は灰緑色のものがかかっており、外面は上半部にのみ釉がかかる。

土師器

鉢(18~21) 18と19は外面に煤が付着している。18~20は内面には横方向の細い櫛描き目が入る。18は明褐色であり、焼成は良好。胎土に小砂粒を含む。19は黄褐色であり、焼成良好。胎土に小砂粒を含む。20は灰白色であり、焼成不良である。胎土に小砂粒を含む。21は褐色を呈しており、口縁部以下の3cmまでは淡桃色を呈する。胎土には大粒の砂粒を含んでおり、焼成は良好である。

土製品(17)

表裏両面に糸切り痕がつく円板状のものである。焼成後に両面穿孔による1cm大の円孔があく。孔に紐を通して、つり下げて使ったものと思われる。明褐色を呈しており、焼成は良好である。胎土は精選されていて良い。

3 結 語

①前田遺跡水田面の調査では、大宰府条坊の道路や側溝、ならびに杉塚庵寺関係の遺構が検出されるか期待がもたれたが何ら検出されなかった。

②A、B両地区に分けた丘陵部の調査では土塚、溝、ピット群を検出した。長方形の土塚は鉄釘の出土から土塚墓と考えられる。またピットについては、掘立柱建物の柱穴になるものもあると思われるがまとまらなかった。

③鉄滓やフイゴの羽口が出土している事から製鉄跡があった事が考えられる。

④遺物から見た年代は、表土層からは古墳時代・奈良時代・平安時代・鎌倉時代・室町時代の遺物が検出されているが、その中でも、奈良・平安時代のものが主であり、9世紀が中心を占めている。遺構からは小片が多かったが、古墳時代のもの若干と、奈良・平安時代が多く、その中心は8世紀後半から9世紀代のものであった。従って遺構の年代もほぼこれと同時期が考えられる。

(川途昭人)

前 田 遺 跡

P L A T E S



(1) 前田遺跡発掘前遠景



(2) 前田遺跡全景

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告—XⅧ—

昭和52年11月1日

発行 福岡県教育委員会

福岡市中央区西中洲6番29号

印刷 株式会社 チューエツ

福岡市博多区東比恵2丁目9番1号